

夜を抱きしめて

SKY BLUE



目次

献辞	
献辞	3
(一) 父	
(一) 父	7
(一・一) 夢国島	
(一・一) 夢国島	11
(一・二) 東京	
(一・二) 東京	19
(一・三) 青葉荘	
(一・三) 青葉荘	27
(二) 娘	
(二) 娘	35
(二・一) 夢国島	
(二・一) 夢国島	39
(二・二) 東京	
(二・二) 東京	45
(二・三) パンドラ	
(二・三) パンドラ	51
(三) ふたり	
(三) ふたり	59
(三・一) 八月、You Are SoBeautiful	
(三・一) 八月、You Are SoBeautiful	67
(三・二) 九月、ひなぎくのジェーン	
(三・二) 九月、ひなぎくのジェーン	77
(三・三) 十月、Jesse	

(三・三) 十月、Jesse	85
(三・四) 十一月、A House Is Not aHome	
(三・四) 十一月、 A House Is Not aHome	93
(三・五) 十二月、On TheRadio	
(三・五) 十二月、 On TheRadio	101
(三・六) 一月、LovingYou	
(三・六) 一月、 LovingYou	109
(三・七) 二月、Still	
(三・七) 二月、 Still	117
(三・八) 三月、Ribbon In TheSky	
(三・八) 三月、 Ribbon In TheSky	125
(三・九) 四月、New York State OfMind	
(三・九) 四月、 New York State OfMind	133
(三・十) 五月、Bridge Over TroubledWater	
(三・十) 五月、 Bridge Over TroubledWater	141
(三・十一) 六月、Mr.Lonely	
(三・十一) 六月、 Mr.Lonely	147
(三・十二) 七月、夜を抱きしめて	
(三・十二) 七月、 夜を抱きしめて	155
(三・十三) 八月、Memory	
(三・十三) 八月、 Memory	165
終わりに	
終わりに	177

献辞

献辞

沖縄のひとりの少女と、或る友人に捧ぐ。

(一) 父

(一) 父

田古八男(たこはちお)四十六歳が親愛なる友人、やすおと着ぐるみマンに語ったところによると、田古の半生は大体以下である。但し何分田古本人が自ら記憶喪失者であり、且つノイローゼであると宣言していることから、その思い出語りの真偽の程は定かでなく、従って十分に注意されたい。

(一・一) 夢国島

(一・一) 夢国島

なんだかね、やっぱり、沖縄から東の方角へ四百キロメートルばかり泳いでいくとって無理に泳ぐ必要もないんだけど、海がそりゃもう青いからつい泳ぎたくなるんだ。で何だっけ、そうそう海、泳いで、最初にぼっかり浮かんでいる大陸が、夢国島というんだ。

夢国島、知ってるかい。知るわきゃないよ、そりゃそうだ。ちっぼけな島だし、貧乏神が取り憑いてるし。なんだかね、やっぱり、ぼくなんか、その国で生まれたんだけど実際。ところで貧乏神って知ってるかい、疫病神とは違うんだ。どう違うかって、なんか貧乏神ってのは実は大黒様って噂、だから良い神様だけど、疫病神の方は限りなくサターン、サターンってありゃりゃ。だからサターンからの攻撃を免れる為、ぼくなんかわざと貧乏な家のかあちゃんの腹を選んで、そこに宿ったという訳。訳、訳、訳、分かんないって、さあね。人生理屈じゃないっていうよ。

生まれた時から男で、その癖内気。悪い奴になる度胸もないから、お人好しの振りしている。でもお喋りの訓練が足りなかったせいで口下手、それを気にして未だに無口。はあ、良く言うよ、それを言うなら人見知り、ってそれだけ喋れば上等かもね、成一程成程。でもなんだかね、やっぱり、ぼく自身は無口、無口、無口。どうしてかい。今お喋りしているのはぼくじゃないんだ。なんか喋らされてる感じっていうか、独りでに唇が動いてしまう。って誰に、だから貧乏神。

そんな貧乏神にぞっこん惚れられた貧しい家から島に唯一つの学校に通い、中学を出してもらった後は、マグロ船に飛び乗って世界の海を股に掛け、太平洋、大西洋、インド洋と横断、縦断。気付いた時には肌はこんがり日焼けして、元々彫りの深い顔立ちだから黒人と間違われる始末。横須賀辺りを小粋に歩けば日本の娘っ子から英語で声掛けられるも、生憎意味が分からない。えっ同じ日本人なのにとって、ああ勿体ない。

そこでカサブランカでアメリカの船乗りについて教えてもらったよ、ギター爪弾き、イングリッシュのラヴソング。ええ例えば、例えばって、うーん思い出せない、なんせ生憎記憶喪失……。あ、そうそう、じゃーん、一気にいくよ、ひなぎくのジェーンで America の、Jesse は Janis I a n で、A House Is Not a Home が Dionne Warwick だけ、On The Radio は Donna Summer 様様、Loving You by Minnie Riperton さ、Still は Commodores だね、Ribbon In The S k y そりゃ Stevie Wonder よ、New York State Of Mind そう Billy Joel だ、えラヴソングじゃないって、硬いこと抜き抜き、お次が Bridge Over Troubled Water ねえ Simon And Garfunkel でも、Roberta Flack バージョンも悪くないべえって勝手にな、Mr.Lonely とくりゃ Bobby Vinton よ、Memory これは Elaine Paige さん、ま、こんなとこかな。でもどれもこれも歌詞長いから、唯一覚えられたの

が、他でもないない You Are So Beautiful。勿論何処いらのカバーじゃなくて本家本元 Billy Preston と来たもんさ、でも上田正樹もわるくないかもよ、いえーい。

そんなこんなで年中海の上に生存していたから、気付いたら二十三の独身で、父ちゃん、母ちゃんの死に目にもあえずじまい。心配した爺ちゃん、婆ちゃんの紹介で島の娘と結ばれたのが二十四。決め手は十八番の You Are So Beautiful。夜の海辺で口遊めば、娘はうっとり、ぼくの腕の中。ううっ、いいね、妬けるね、この色男。名を美砂と言い、年は思わず頬も赤らむ二十歳、もうどきどき。

だからなんだかね、やっぱり、ぼくは船を降りる決意をし、島で生きてゆくことに。だけど島にゃこれって産業もないから、美砂の実家のさとうきび畑を手伝いながら、貧しくとも清らかに細々と暮らしたとき。

畑仕事の最中はみんなでラジオ聴きながら、思いっ切り働いて汗びっしょり、そりゃ気持ちいいんだ。浜からの風が吹くとね、さわさわさわーっと、さとうきびの葉と美砂のながーい髪が揺れてね。そんな時は決まってラジオからラヴソングが流れていたかな、ううっ、堪んない。

日が沈み、夜が訪れ、美砂とぼくは海岸に出る。夜毎美砂の耳元で You Are So Beautiful を口遊めば、美砂の瞳がうるうると潮辛い涙で濡れたのは勿論、島に打ち寄せる波もすすり泣く。そんな潮風の中でぼくたちは激しくも切なく愛し合い、一年が過ぎると美砂のお腹に子宝。命授かり、暑い暑い八月の六日、ぼくが二十五、美砂が二十一の時、目出度く玉のようになって女の子には変だけど、娘が誕生したんだ、嬉し泣き。

何て名前がいいかい、美砂ちゃん。美砂が言うには、わたしたちこの海辺で愛し合った。ほら見て、この海の砂、きらきらと丸で銀河の星の滴。それにも増して、見てよ、この子のくりくりした目。だから星の砂、星砂(せいさ)ってどうかしら、ねえ、あんた。どうかしらあって、そりゃもういいに決まってんべ、なあ、まったく。さっすがうちのかあちゃん、センスあるねえ、と来たもんだ。お前が美しい砂の美砂で、こいつが星の砂の星砂か、成る程。ぼくは文句の付けようもなくとっと同意。

星砂が生まれたその日の晩から、ぼくは美砂に向かって唄うのも忘れ、星砂に子守唄、唄って聴かせたさ。曲は勿論、これしかないよ、You Are So Beautiful。すると星砂はいい子になって、どんなにむずがる時も、どんな嵐の晩、海が荒れる夜も、不思議にぴたっと泣き止んで、にこにこ天使の笑い声、笑い顔して、はい、おやすみなさい、夢ん中。

とまあ、貧しくはあれどささやかな幸いの中で、細々と営んでいたぼくたちの暮らし。そこへ多国籍バイオ化学メーカーだか何だかいう会社の営業が現れて、こいつあサソリのクローンを入れたさとうきびの苗なんだがね。うん、それで。だからベリベリストロングあるよ、どんな害虫にもどんな台風にだって負けやしないんだから。うん、だから。そ恐い顔しないで、ちょっと試しに使ってみてよ、ただでいいからさって、勝手に置いていきやがった。

こっちは純情かつ無知なもんだから、へえ、こりゃ便利だねなんて気軽に使ってみたところが、さあ大変。その年のさとうきびは全滅。おまけに畑の土までやられちまって、草も生えやしない。うっそーっ、冗談だろおい、正に悪夢ーっ。困った弱った、このまんまじゃ一家揃って夜逃げか無理心中。どうしよう、どうすりゃいいんだ、父ちゃん、母ちゃん。

なんだかね、やっぱり、愛する家族の為、仕方ないから泣く泣くぼくは、再びマグロ船に飛び乗ったのさ。いとしい美砂まだ女盛りの二十三歳と、まだ二つ切りの幼過ぎる星砂を陸に残し。それが二十七のこと。

七つの海を股に掛け、星セントジョンズ、バミューダパンツじゃない海峡、そんなチャールストン、ホノルルるる、そしてサイパンぼん、じゃジャカルタ、シドニーに、おおオークランド、刑事コロombo、ケープタウンち、リスボンぼん、バレンシアじゃ、レイキャビクくくくっ。アラスカでオーロラを見たよ、エスキモーと一緒に釣りしてさ、でもあそこら帯はまじ寒がっただなーやって、それ当たり前。兎に角せっせと稼いで、せっせせっせと仕送り。世界中の港のポストマンで田古八男の名を知らぬ者はなし、て位、働いて働いて仕送りしたもんさ。

でもなんだかね、やっぱり、そろそろ国、故郷が恋しい、かあちゃんのおっぱい恋し、娘にも会いたい。そんな里心がついたのが二十八。ってまだ一年じゃん、でももう駄目駄目我慢出来ない。そうなるも居ても立っても居られなし。ぼく帰る、絶対帰るから、ひとりでも。って帰れる訳ねえよ、ここは船の上、どう足掻こうが海の上。最寄りの港はレイキャビクでござい。

そこでこっそりと北極海で日本に帰港するタンカーと擦れ違いざま、水鉄砲じゃない無鉄砲、先方に飛び移ろうとしたのが運の尽き。うわあー助けてーっ。足を滑らせ、そのまんま北極の氷河の上へとまっ逆さま。あー、誰か助けて、死ぬ、頭かち割っちゃうよーっていうか、その前に凍え死んじゃうかも、じゃない確実にそうなるよ。で意識朦朧、心朦朧、心もよう、寂しさのつれづれに……ってぼく唄ってる場合じゃないよ。

意識を失い、何が何だか、生きているのか死んでいるのかも分からないまま、ある時、はっと目を覚ますぼく。あれっ、すると目の前には見知らぬ人ばかり。ここは天国ですか。いいえ、違います。じゃあと話を伺うと、何でもぼくは頭血だらけで北極の氷の海を漂っていたんだそう。うっそだろうーっ。そこを救出され、一週間ずっと昏睡状態で生死の境を彷徨っていたのだという。まじかよ、でもまことなら、すっごいじゃん、もしかして奇蹟の生還ってやつですか。恐る恐る頭部を触ってみると、確かに包帯ぐるぐるのぐるぐる巻き巻き、なんだかね、やっぱり。

頭部を打って気絶したのが功を奏したのでしょうか、凍死からも免れたようで、今生きているのが奇蹟な位です。まったく不死身の肉体と不屈の精神とをお持ちですね、はい。とか何とか、ぼくを取り囲む感嘆しきりの見知らぬ方々。多少イントネーションはぎこちないけど、日本語喋ってるから、やっこさん日本人かも。

助けて頂きながら、ろくに感謝も出来ずに御免なさい、有難う。でここは一体何処なんです、皆さん方はどなた様。恐る恐る尋ねると、返って来た答えは何と、海上自衛隊の潜水艦の中ですよ。ほーっ、自衛隊。世界広しといえども、自衛隊なんて持っているのは日本だけ。しかも、ちょうど現在祖国への帰路の途上にありますです、とか。はあ、そうですか。祖国って言葉がちょびつとばかし気にはなるけど、この際気にしない気にしない。差し支えなければこのまま祖国までお送りします、だって。差し支え有る訳ないじゃん、まったく。それはどうも重ね重ねで有難う御座います。

ところでお住まいはどちらですか。えっ、お住まい。ええっと、と考えるも思い出せない、頭ん中まっ白なぼく。分かりませんって答えると、相手は吃驚。げっ、じゃお名

前は。名前位幾ら何でも分かるべさと思ってもやっぱり駄目、思い出せない。はあ、思い出せないって自分の名前をかよ、どうなってんの、ぼく。焦りつつも、やっぱり分かりません。すると流石の相手も、まじですか。正に今はいつ、ここは何処、わたしは誰状態。要するに早い話がって遅い話でも構わんけどさ一向に、詰まりは記憶喪失……ってこと、がーん。潜水艦の中の沈黙は、陸上のそれよりも更に深く重く静かなのだと、その時初めて知るぼくだった。

ま、それはさて置き、何はともあれ、先ずは祖国まで帰りましょう、治療はその後で。とは御尤も。何にせよ、ここは潜水艦の中、嫌だからって途中下車じゃね途中下艦する訳にもいかないし。祖国にていろいろと調査、精密検査も致しましょう。ほうそれは有難い、そうですね、ぼくも目一杯不安ですし。では祖国に到着するまで、今しばらくお休み下さい。はい、有難き幸せ、ではお言葉に甘えて爆睡しまーす。って知らぬが仏、見知らぬ人々の見守る中、安らかな眠りに就くぼく。

んな訳ないでしょ、記憶喪失なんだから。嘘だろ、思い出せぼくって、頭ん中は焦りまくり。目を瞑って眠った振りしながら、さあ、わたしは誰、焦んなくていいからゆっくりと思い出せや、と懸命、珍しくまじなぼく。失くした記憶を捜そうとしてひたすら意識を集中させ、脳内を訪ね歩く。どっかにぼくの記憶転がってませんか。

だけどやっぱり何一つ思い出せない、駄目だまじで。そんな失意のどん底のぼくの耳に、まだぼくの枕元に付き切りの見知らぬ方どもの会話が入って来る。しかし、あれえ、なんか妙、日本語じゃないじゃん。ほにゃらら、ほにゃらら、ほにゃらら。むにゃむにゃむうにゃ、むにゃむにゃるる。

はあ、何だこいつら、日本人じゃないのかよ、まじやべ。確かにさっき祖国に帰るとは言ってたけど、日本に帰るなんざ一言も明言してなかったよね。何が海上自衛隊だよ、嘘吐き。でも日本語お上手あるね、みなさん。で心ん中はたらーっと冷や汗。もしかして拉致……、どっきん、どっきん。どっかの国で洗脳されスパイとして養成され、祖国日本で諜報活動に暗躍する自分を想像するぼく。そんな、あほな。ここは記憶喪失のショックを一旦置いといて、こっから何とか脱出せねばなるまい。

しかしまだ病人のぼく。思うに任せず、そのまま彼らの言う祖国とやらの近海に到着し、潜水艦はぶくぶくぶくっと上昇し、遂に海の上。やったーっ、じゃなくてやばいです、はい。見渡す限りが予感通りの、そこは異国の軍港であったとき。って呆然と立ち尽くしてる場合じゃないよ。さあ逃亡逃亡と、見知らぬ連中の一瞬の隙を突き、さっさと海に飛び込んだのさって鯛焼きくんか、ぼく。海の底目指し、ぶくぶくぶくっと何処までも潜って潜って、そこは火事場の馬鹿力。巨大なイソギンチャクの陰に身を潜め、巨大クラゲにへばり付き、何とか追っ手の目をくらませる。

やつらの方とて、どうせ死に損ないの役立たず野郎と見切ったか、海ん中に二、三発砲弾かまして、はいお終い。ふう、良かった良かったと思ったのも東の間、海の上に浮き上がり、気付けば頭の包帯は何処へやら。見渡せば四方八方三百六十度一面青い海。ぎらぎらと照り付ける太陽、おまけに今はいつ、ここは何処、わたしはだーれ。唯一分かることは、ここが日本海ということだけ。それだけじゃ何の役にも立たねって。

これからどうすりゃいいの、泣きっ面に蜂でいると、不幸中の幸い、都合の良いことに向うから大きな木片が流れ来る。それにつかまり限りなき青い空を見上げながら、お

かーちゃん、助けて、と絶叫。でも生憎そのおかあちゃんが誰なのか、思い出せない。どっと疲れに襲われて、木片にしがみ付き死んだように眠りに落ちる、てか。まじ死にたいよ、ぼく。

ザヴザヴシュワー、ザヴザヴシュワー……って、なんだかね、やっぱり、はっと目を覚ませば、そこは砂浜、打ち寄せる波音が続いている。どうやら何処かの海辺に漂着し、打ち上げられたぼく。見覚えがあるよな、ないようになって、あるわきゃないよ。でもなんか和風、松林とかあってさ。どう見ても日本っぽい、まじで。もしかしてと期待を抱きつつ、立ち上がろうとすれどよろよろ足に力が入らず、ぼたっと直ぐに倒れ込む。そりゃそうだ、元々弱っている上に何も食べていない。うーっ、腹減った、何でもいいから食べたいよーっ、なんか食わしちくりくり。

けれど通り掛かりの祖国民たちはみな、倒れたぼくを冷たく避けて行ってしまう。ああ待って、見捨てないで、お願い神様。でもぼくの恰好、着てるものはぼろぼろで下着姿だし、いつ伸びたのか髪はロンゲ、髭もぼうぼう、痩せこけた体。これじゃ如何にも怪しい、浮浪者か危ないふう男。

やばい、このまま飢え死にか。でも何だかんだでここまで生き延びたし、もう充分かも。こうして無事祖国じゃない日本の土を踏むことも出来た訳だしさなんて、妙に悟りの境地、境地、境地。あ、でもせめて永眠するその前に、念の為本当にここが日本なのかだけ確かめたい。

そこで、倒れたままの姿勢で失礼ながら、ちょうど通り掛かった気の良さそうなひとりの老婆に声を掛ける。すいませーん、ここ、もしかして日本ですか。はあ、確かにここは日本だな、でも何だあんた。老婆は目を丸くする。こんな昼間っから海岸に寝そべったりして、いい若いもんが。ん、もしかして外人さんかい、あんた。遭難でもしたんかね。

そうなんですよと洒落にもならない。でも良かった、やっぱり日本かあ。これで何も思い残すことなく死、ね、ま、す。では、と目を瞑るぼくに慌てたお婆さん。しっかりすっだな、あんた。と目の前に出してくれたのは、はい、まっ赤な林檎。くんくん、くんくん、いい匂い。匂いに引っ張られ生き返るぼく。いいんですか、こんな御馳走。いいから遠慮しねで食え。はい、では遠慮なく。林檎をかじると血が出ませんかとばかりに、思いっ切りがぶり。歯茎を血だらけにしながらの丸かじり。ああ、うめえ、生き返っただな。

こうして林檎が縁で、元気になるまでその老婆、はるさんの世話に。と言っても食料や着るものを恵んでもらいながらの、海岸での野宿生活だけどね。あんた、どっから来たただな。はるさんに心配掛けまいと適当に嘘を吐く。北の方かな。北海道かい。ん、ま、そんなとこ。ぼくが漂着したはるさんの村は、青森県は雪別離(ゆきわかれ)という寂れた漁村だそう。名は何ていうだ。ぼくの名かい。これまた口から出任せ、咄嗟に出たのが、田古八男。

何だ、じゃその名前、偽名かよ、って。なんだかね、やっぱり、面目無い。ここだけの話、本名は洸鎌(すがま)雪雄っていうんだ、役所には内緒だよ。

たこ八郎、あなたこ八郎かい、ボクサーの。でも海水浴してて溺れたんでなかったの。真顔で問うはる婆ちゃん。ちゃうちゃう、たこはちお。へえ、紛らわしいこったな。ファンだったんだよ。ああ、それでかい。

とまあ、こんなふうになんぴりと、雪別離の浜辺で絶え間ない波音耳にしながら、はるさんとお喋りしたもんさ。でも一緒にいるとどンドン情が移っていくもんで、かと言っていつまでも世話になる訳にはいかない。はるさんには家族だってあるし、長居すればする程別れも辛くなる。

そこで、お陰で体も随分回復したからと、断腸の思いでぼくは旅立つことに。あんれ、そりゃ寂しくなるだな。だどもたこちゃんもまだ若いんだし、もう一花咲かすだな。はるさんの勧めで、行き先は大都会、華の東京。涙ながらに雪別離駅ではるさんとさよならを交わし、ぼくの手には、いらないって言うのにはるさんが無理矢理くれた東京までの切符代。

とは言っても、東京になど宛てはなし。年も幾つだか定かでないし、ま、三十歳前後だとは見当付くんだけど、何しろ記憶を失ってからの空白期間があり過ぎて。でもまあ今更失うものは何ものなし、いつ死んだってお構いなし。東京行きゃ何とかなるんじゃないって軽い乗りで、雪別離から青森、新青森まで乗り継いで、そこから新幹線で一路東京駅へ。

ふう、ここまで一気に喋りで疲れたよ、一服するかい。

(一・二) 東京

(一・二) 東京

なんだかね、やっぱり、東京着いたのはいいけれど、宛てなどある筈もなく、行き成し路頭に迷う。って最初っから分かったことだからさ、とりあえず雪別離の浜辺でやってた要領で野宿しながら、東京の公園を転々としたんだよ。だけど同じ野宿でも全然勝手が違い過ぎてさ、何しろ海の音はしない代わりに、足音はするわ話し声やら電話の音はするやら。えらい騒々しくて、ぼくはノイローゼ気味になった位さ。

そこは俺の縄張りだ、どきやがれーっと同業者に怒鳴られたり、ここで寝泊りしてはいけませんとご丁寧にとんとん警察に肩を叩かれたり。果てはガキどもに殴られ蹴られ、ふう何度も死ぬ目に遭ったよ。だけどそんな死にたい気分で一杯の時、誰かが教えてくれたんだ。東京で野宿するなら、新宿行きなよ。施設でシャワーは使えるし、炊き出しも頻繁にあるしね。それに、あそこじゃ夢の丘公園ってのがあってさ……。

そこでぼくはびんびんと来た。新宿、夢の丘公園、確かになんか良さそうな響き。そう思った途端、突如うきうきベリベリハッピーあるよな気分襲われて、ぼくは文明崩壊後のユートピアを目指す如く、てくてく、てくてく幾日幾夜歩き続けながら、遂にこの地、夢の丘公園に辿り着いたという訳なのさ、じゃんじゃん。

でもね、実は東京来てからひとつ気付いたことがあるんだ。それはね、やたら東京の夜が目に沁みるってことなんだよ、ちかちかと眩しくてさ。何でそんなに目に沁みるかかっていうと、無数の光が瞬いているから。丸で冬の夜空に広がるギャラクシーのようさ、なんてね。

でもお言葉ですけど、東京の夜ってのはさ、元来目映いの。何たって大都会なんだから。ことに新宿なんて街に至っては摩天楼やら盛り場やらが新宿押し、ってそれを言うなら目白押し。どうせ大方乱立する街灯、ビルの灯り、ちかちか派手派手ネオンライト、渋滞する車のヘッドライト辺りなんじゃないのって。いやいや、それが違んだよ。

じゃ一体何だっていうと、何だと思う。ふざけんな、分かんねから聞いてんだろ。ま、そうかりかりしなさんな旦那。その無数の光の正体とは、実は、人の涙でござい。ええっ、何言ってんだお前、あほか。ま、そう思うのも無理ない無理ない、でもこれほんと。その涙ってのがしかも、人前では見せない人知れず零す涙であり、或いはぐっと堪えて心の中でだけ流す涙だったりする。へえって、もっと吃驚してよ。で、そんな人の涙の瞬きがあたかも夜の海の潮騒のように、幾数千万も無数無辺にここ東京の夜の果てまでも広がり、きらきらと瞬いているんだよ。そりゃもう息を呑む眩し目映さ。

へえ、凄いね。でもさ俺にゃ何にも見えねえよって。そりゃそうさ、普通の人には見えないもんだよ。だけどこれも内緒の話、ぼくには見えるんだ。何が、だから隠れた人の涙が、はっきりとこの目に光として映るんだよ。まさかって、そりゃ信じらんないよね、未だにぼくだって疑っている位なんだからさ。

分かった、でもそれって生まれつき。ちゃうちゃう、だからほら、多分あの時からだ
と思うのな。思うのなって、北極の氷に頭ぶつけた、あん時のショックから。成一程。
ねえ、でしょ。うん、でも、あれっ、だったらさ、何で東京来る以前には気付かなかっ
たのって話。

あ、そう言われてみれば確かにそうだ、何でだろ、摩訶不思議。何しらばっくれてん
だよ。多分思うに、はるさんの村とか人口少ないべ、だから村の人の涙を見ても、家の
灯りとか漁港や船の灯り、村にあるささやかな盛り場のネオンかなんかだとばかり、錯
覚したんだよ。でもきっと村の人たちの涙だったんだね。ああ、しまった、ちっとも気
付かなかったよ。その中にははるさんの涙なんかもあったろうに。

さ、これで超能力の話はお終い。現実に戻ろう。

まあそんな訳で、なんだかね、やっぱり、多分推定年令三十歳位として、ぼくは東京
新宿は夢の丘公園で野宿を始めたんだよ。でも最初の頃は、泣いてばかり。えっ、野宿
生活が辛過ぎるからだろって。ちゃうちゃう、さっきも話した通り、夜毎無数の人の涙
が見えてしまって、ついもらい泣き。今はもう随分と慣れたけどね。

そんな辛い夜は海の音が聴きたくなるけど、海にゆくには生憎新宿って街は海に遠過
ぎて。だから代わりにぼくは、ラジオを聴くって訳。何でか分からないけど、寂しい時は
無性にラジオが聴きたくなるんだよ。えっ、ラジオなんて高価なもん、どっから手に入
れたんだよって。まさかぼくった訳じゃねえよな。残念ながらそんな度胸はないと来て
いるぼく。もらったのさ。誰に。新宿来る前品川の公園で野宿してた頃、酔っ払ったサ
ラリーマンのあんちゃんから、どうせ何にも楽しみねえだろ、これでも聴けよって。単
三電池一本で聴ける小型の、ほら、これ、な。電池ワンカートン分とセットでさ、有難
くもくれやがった次第。くー、泣けるぜ、まったく、この東京砂漠、他人地獄にあって、
渡る世間鬼ばっかしでもないらしい。

ラジオを聴いていると、何処からか風が吹いて来るような気がするんだ。さわさわさ
わーっと例えばさとうきび畑を駆け抜ける風に吹かれているようなそんな気分。何でさ
とうきび畑なのかは定かじゃないけど、浮かんで来るんだなあ、この頭ん中にさ、ぼっち
しと。風はねさとうきび畑を駆け抜け、青い海の潮風に吸い込まれてゆく。その海辺に
はいつもひとりの女が突っ立っていて、潮風に振り向くと女の長い髪がきらきらと、夕
映えを反射させた海の波間に煌めいて、女はぼくに向かって笑い掛けるんだ。うん、ラ
ジオを聴いてっと、いつもそんな景色が浮かんで来るんだよ。

おっといけない、ラジオの話はこれ位にしておいて、ええと何処まで話したんだっけ。
そうそう夢の丘公園で暮らし始めたところだったね。でも野宿ってもぼけーっとして
るだけじゃ食ってけないし、お天道様にも申し訳が立たない。そこで一日中公園でぼけー
っとしている連中を尻目に、夢の丘公園の先輩に連れられ、アルバイトに出る。

主に工事現場の手伝い、きついけど、いい稼ぎになるよ。これだけあれば、酒もハイ
ライトもやらないから何とか食っていける。いやそれどころかお釣りが来る位。それに
噂通り新宿区の自立支援センター『希望の翼』でシャワー使わせてもらえるから、体も
清潔。

とか何か言うとなすっごい楽勝、ストレスなんざ無縁な極楽生活みたく聴こえるけど、
そんなことは決してなく、雪別離の村では夢想だにしなかった或ることがぼくを悩ます。

それは、その或ることとはじゃーん、ずばり、人付き合い。あへっ、これが実に厄介。やれ、おいバイト行くぞ、飲み行くべ、金貸せっていうか奢って、ごみ漁り行くよ、ってな調子で何かとうるさい。

ぼくもまだ新入りだから、最初のうちは、はいはい、いい子で付いて行ってたけど、段々と鬱陶しくなってね。ぼくなんか性善説、人を見れば、みんなはるさんみたいに良い人だって信じちゃう方だから、随分と嫌な思いもしたしさ。貸した金は返さない、人の物は勝手に使う、文句ばかり言う、指図、命令、人のことばかにして大笑い。ひとりでぼけーっとしたい時も遠慮なし騒ぎに来るし、しかも女だとか、競輪競馬、その他詰まんね話ばっかだしさ。

あーあ、面倒臭、鬱陶しい。これじゃ何の為に野宿してんのか、ちんぷんかんぷんよ。ちっとも自由じゃないやっつて、やんなっちゃった。人間不信、人間嫌いってやつ。

またどっか引越すか、でも何処行っても結局同じじゃない。世間のしがらみってやつは、きっと何処行ったら多かれ少なかれ、あるんだよ。特にこんな大都会東京じゃねって。あーあ、こんなことなら雪別離の海辺に死ぬまでいりゃ良かったんだよ、まったく。って悔やんだところで後の祭りのお富さん、じゃないおはるさん。

あーあ、どうすっぺ。人と一切関わらず天涯孤独で生きてゆく、そんなご都合の良い方法はないもんか。きょろきょろ公園を見回していると、またうるせえやつらがやって来て、うだうだうだうと下らないお喋り始めやがるんだ。折角今宵はゆっくりと満天の銀河でも見ながら、ロンリネスに耽りたかったのにさ。

なんだかね、やっぱりと、そんな矢先、アルバイトの工事現場でひとりの青年を見掛けたんだよ。ぼくとおんなじアルバイト、名を水野くんっていうんだけど、仕事は真面目で指示された通りをきちんとこなしている。だから評判も悪くない。だけど水野くんは凄いい喋り、しかもよく見ると独り言、絶えずひとりで何かぶつぶつと呟いているんだ。

最初は話し掛けられてんのかななんて思って、何ですかって返事しちゃった位なんだけど、違ったみたい。どう見てもやっぱり独り言。水野くん自身は真剣に誰か、多分大気中にちゃんと存在していて水野くんだけには見える透明人間さん相手に話し掛けているんだろうけど、はた目には誰もいないから、あれっ、やっぱり水野くんって変な人じゃなんてなっちゃうんだよね。

でもそんな水野くんを誰も悪く言ったりはしない。だってちゃんとやることはやっているから。口の方はそうやってぶつくさ独り言で忙しくても、手足は休まず荷物運んだり掃除したり後片付けしたり。ミスもないし、仕事もきれいだし、人には迷惑掛けないし、むしろ作業のとろいぼくなんかを手伝ってくれたりするんだよ、偉いよね水野くん。

そんな摩訶不思議な水野くん、人間的にもいい人っぽいし親近感も大いに湧くしで、ぼくなんかついついお近付きになりたくて、アルバイト終わったら一緒にお茶しませんかなんて誘ってみたんだ。そしたらいいよって、ちょうどぼくもお茶したかったところと水野くん快諾。で場所は新宿駅構内のベンチ、絶えることのない水野くと透明人間さんの会話の合間をぬって、いろいろとインタビューしたところによりますと、はい。幼い頃からずっとこんな調子だったそうで、お前さ、どっか行ってひとりで生きてってくれないと家族に見放され、自分でも迷惑掛けまいと、現在はアルバイトしながらアパー

トで一人暮らししているそうだ。

そうか、ぼくも記憶喪失なんだけどお互い大変だよと労い、でもアルバイトの少ない収入だけじゃ東京でのアパート暮らしは大変なんじゃないのと心配すると、実はこういう訳なんだよと事情を説明してくれた水野くん。それによると専門の医師の診断では確かに水野くんは一種の病気だそうで、でもそのお陰で生活保護が支給され、何とかやっていけてるといふ。

ふーん、病気かあ。人目は気にならないのと聞くと、水野くん、全然平気と笑ってみせる。だって自分は普通の人間だと信じているからだそうで、ぼくもそう思うと相槌を打つと、だけど他の人はそうは思ってくれず、ばかにされたり敬遠されたりするそうだ。へえ、敬遠ねえ、敬遠……。ん、その時ぼくの中でびびびっと高圧電流がショートして、あっこれだっと閃いた。

そっか、こうすりゃ人から敬遠される訳ね、よしよし。じゃぼくも水野くんみたいにしてみたらどうだろう。そしたら公園の連中から敬遠されて、あわよくば鬱陶しい人付き合いから解放されるかも知れないぞ。びんぼん、びんぼん、まじですか。少なくとも試してみる価値はありそう。良し善は急げとばかり、早速次の日からぼくは変な人の真似事を始めたという訳。元々神経質ノイローゼ気味なぼくだから、ノイローゼの振りすりゃいいかなって、それをもうちびっと大袈裟に誇張してやれって感じ。えっ、真似事とかノイローゼの振りとかって、じゃあ何かい、もしかしておっちゃんのそれって、お、し、ば、い。そう、面目無い。でも感動を覚える程に効果はてきめん。

例えば相手が、おい、金貸せ、と来る。ぼくは、なんだかね、やっぱり、金って何ですか。はあ何言ってんだ、お前あほか。あほって何ですか、ねえねえ、あほって。あほで駄目ならばかか、いいからつべこべ言わずに金貸せ。だからなんだかね、やっぱり、金って何ですか、どうしてこの世にお金なんて存在するんですか。そんなこと知るか、ああうるせえ、ははーん、お前あれだな。あれって何ですか。だから俺に金貸したくねえもんだから、そんな狂言してやがんだろ。狂言って何ですか。ええい、やかましい、いいよ、もう。

次に、あ、わりい、おめえの石鹸借りたから、と来る。そしたら、なんだかね、やっぱり、じゃ返してとぼく。返したじゃん、そこに。じゃなくて使った分も返して。何言ってんだ、この蛸、だからてめえは蛸なんだよ。でも借りたって言ったでしょ、だから返して、返して、返して。うるせえな、じゃ言い直す、使わせてもらった、あんがとよ。なんだかね、やっぱり、あんがとよで済めば、警察いらんって言うよ。ああ警察だと、じゃ何か、おめえ、俺が石鹸盗んだとでも言うのか、え。でも減ってる、ぼくの石鹸、石鹸が減ってるお、どうして、どうして、もしかして魔法の石鹸。分かった分かった、もうおめえの石鹸二度と使わねから、あばよ。

それから次に、おう蛸よ、きさま近頃ノイローゼなんだってな、と来たら、なんだかね、やっぱり、ノイローゼって何ですか。おっやべ、行き成し来やがった、なんか悪いもんでも食ったんか。悪いもんって何ですか、何ですか、何ですか。そう興奮すんなよ、なあ仲良くやろうぜ兄弟。兄弟なんかいません、兄弟兄弟何ですか。おお分かった分かった、そうやって一人で喋ってる。

次に、よう蛸ちゃん、一杯やろうぜ、花見だ花見、と来る。そしたら、なんだかね、

やっぱり、一杯ってどんだけですか、駅前のかけそば一杯、それとも目一杯、花見って何が一体面白いんですか。はあ、何訳の分かんねえこと言ってんだよ。ぎゃーっ。どうした。怖いよ、桜の木の下には死人がいるってよ、満月の下にはほら狼男だ、助けてーっ。とばたーんと地面に倒れて死んだ振り。あーあ、蛸とうとうご臨終かい、ご愁傷様、ひとり死んでろ、蛸野郎。

とまあ、こんな感じで日々努力精進。その甲斐あって、みんなから疎ましがられ、遂に夢の丘公園の人付き合いから見事解放されたとき、まずは目出度し目出度し。こうして昼間はせっせとバイトに励み、夜はのんびりと公園の片隅で一人気楽にロンリネス。大都会東京の孤独が似合う男、矢吹丈にも負けない、その男の名は田古八男であった、じゃん。

でバイト代は入っても出費は極僅かだから、実は贅沢な悩みなんだけど金が余って余ってしょうがない。それに現金なんぞ所持していたところで、盗まれるのが落ち。だったらどうすっべ。そうだ、こういう時こそ世話になった雪別離のはるさんに恩返ししよう。そう思い立ったが吉日、ぼくも大都会東京で出世したよと大法螺吹いて、はるさん宛てに仕送り開始。月十万円程を現金書留で送ったよ。

そんなこんなで、あっという間の三十代。年月は夢幻と流れ去り、気付いたら三十八。思えば一番楽しい季節、これが青春ってやつだったかも。

ところがところが、それまでの重労働、無理して肉体労働続けて来たのと、加えて普段からの不衛生極まりない暮らしが祟ってか、物言わぬ体が或る日突然言うことを聞かなくなり、がたがたがたつとガタが来て、バタンキュー。バイトどころの騒ぎじゃない。ふーふー唸って一日中絶対安静モードに突入と相成ったとき。

ところが更に悪いことに見事普段の行い、付き合いの悪さが祟ってか、夢の丘公園の誰一人として相手にしてくれない。見向きもされず、どうせあのばかの狂言、猿芝居だよ。いいから放っとけ放っとけ、あんなやつ、で終わり。ざまあ見ろ、これも自業自得、お望み通りひとりぼっちにしといて上げようぜ。

そんなバハマ、絶体絶命のピンチではあるけれど、そこまで言われたらこっちも男の意地、だーれにもたよんねーよ。いろいろあったけど良くまあここまで生きてこれた、もう何も未練はないし、いつ死んだっていい。そんなお得意の開き直りで心安らかに死を待つことに。さ、このまま、ここ新宿は夢の丘公園の片隅で、三十八歳という、この年齢だってかなりあやしいけど、短いのか長いのか定かでない、半端な人生を今全うしようとしています、ちゃんちゃん。

でもまじやばい。お金も底を突いて、食べものは買えないし、ごみ箱を漁るだけの体力も気力も残っていない。ところが、なんだかね、やっぱり、世の中にはいい人って呼ばれる人たちが本当にいるもんで、所謂ボランティアとかNGOっていうの。そういう人たちがいて、ここ夢の丘公園にもパトロールとか炊き出しとか来てくれるじゃない、うんうん。でその中の一人でNGO『新宿ヒューマンライフ』の三上さんが、はたとぼくの異常に気付いてくれて。

どうしたんですか。いや、いいんだよ、ぼくのことなんか気にしないで。どうせ、もう死んでく身だし、何も思い残すこたないから。そしたら三上さん、駄目ですよ、諦めちゃ、ファイト田古さん。なんて励まし始めるんだ、参ったね実際。若いっていいいな

んて、三歳位しか変わらない筈なんだけどね、ついほろっと来てしまいそうになった位だよ。あっ、そう言えば三上さんと着ぐるみマンさんて、確か同い年なんだよね、ってどうでもいいか。

病院行きましょうよ。嫌だ、ぼくは医者と坊主は大嫌いなの。そんなところ行く位なら、野垂れ死にした方が遥かにマシだよって、ぼくも頑固者、てこでも動かない。そこで三上さん、新宿ヒューマンライフのみんなと話し合い、その結果、NGO名義で安アパート借りるから、そこに移りませんかというの。

ええっ、でも悪いよ。赤の他人のみなさんの世話になるなんて。それに家賃だって払えねえしと断るんだけど、三上さん目をうるうるさせながら、田古さん、ここでこんな生活してたら治るものも治らない、本当に死んじゃいますよ。ねえ、家賃のことだってバイト出来るようになるまでは、ぼくたちが何とかしますからって、熱い三上さんのハートにじんじんと打たれ、ぼくにもうるうるが伝染して、分かった、きみって本当にいい人なんだなあ。きみを信じるよって、その場の乗りでアパートの件、つい同意してしまったんだ。

(一・三) 青葉莊

(一・三) 青葉荘

てな訳でなんだかね、やっぱり、ずっと世話になった夢の丘公園を引き払い、遂にぼくはアパート、その名も『青葉荘』で暮らし始めた。荷物なんて少ないし、夢の丘公園から徒歩二十分だから、引越しも楽チン。三上さんたちの名義だから、田古って表札も付けられないし郵便ポストもいーらないと。直ぐにアパートの畳の上にごろんと横になって、ダンボール被って寝ようとしたら、三上さん、それじゃなんだからと布団まで世話してくれた。何じゃこりゃ、こんな気持ちええもんがあったんだよなあ、とすっかり忘れていた布団の味。

ああ有難い、仏様みたいな人ですね。三上さん、この御恩は決して忘れませんし、働けるようになったら、身を粉にして立て替えてもらった費用は必ず返済しますから、何て言う、いんですよ、いつでも。それよっか無理せず気長に治しましょうねって。ああ、その有難い御言葉を胸に、環境の改善も功を奏したか、ぼくは驚異的回復を見せてね、短期間でまたバイトが出来るまでになったのさ。それに早く三上さんにお金を返さなきゃって願いが通じたのか、思わぬところからぼーんと大金が舞い込むことに。

というのも雪別離のはるさんの息子さんから連絡があって。ん、連絡ってもぼくは夢の丘公園に住んでいたんだから、連絡の取りようもない筈だけど、そこははるさん宛てに送った現金書留。差出人のぼくの連絡先、幾ら何でも夢の丘公園てのは不味かろうと勝手に新宿区の自立支援センター『希望の翼』の住所を使わせてもらった訳。

そしたらそこに連絡が入って、何でもはるさんが寿命を迎えて御臨終。その際遺言で、ぼくにお金を返してくれて残したらしい。実ははるさん、ぼくの送金に一切手を付けずそのまま貯めといてくれてたそうで、何ともうるうる有難い。お陰でどばーっと何百万の金が出て、そんな額になっていたとは夢にも思わずだけど、戻って来たの。

そこで一気に三上さんに借金返して、それでもまだまだお釣り。しっかり貯金ときましようね。はい。三上さんに口座作ってもらい、銀行に預けた。あーあ、これでぼくも貨幣制度の鎖につながれちゃったって訳さ。でもまあ文明生活するからには、多少の犠牲はやむを得ませんってか、現代人は辛いよ。

ちょうどこの頃、おふたり、やすおさんと着ぐるみマンさんとが、ぼくと入れ違いに夢の丘公園で生活を始めたんだね、うんうん。

でいよいよぼくも、遂に四十代に突入しちゃうんだ、参ったよ。なんだかね、やっぱり、こーんなに長生きするなんて。まさかご冗談でしょ、薄幸だから早死にするとばかり思ってたのに、まったく。とか何とか愚痴ったところで仕方がない。バイトしてもいいんだけど、しばらくは我が青葉荘の部屋でごろごろ。一日中、ラジオばかり聴いていましたね、お金にも余裕ありましたし、身の危険に曝されることもありませんでしたか

ら、はい。何て言うと、のんびり独身貴族、極楽生活みたく思われそうだけど、心ん中は何となくエンプティ。

野宿生活のあのびりびりした緊張感もなければ、ハングリグリグリ精神もない。失った記憶も戻らないままだし、何するでもなく、ただ年がら年中ぼけーっ。今更夢の丘公園行っても、ぼくなど誰も相手にしてくれる筈もない。三上さんはちょくちょく顔出してくれたけど。割りと綺麗にしてるんですねって、褒めてくれたりとか。やることないから、小まめに部屋掃除してたもんで、はい。じゃボランティアやってみませんか、なんてお誘いも受けたけど、それも今ひとつ気が乗らなくて、そのうちねって。たまには気分転換、外出した方がいいですよ。うん、それは分かってんだけど、引きこもっちゃうと、出不精になっちゃってね。ん、そうですか。無気力の塊りみたいなぼくを前に、流石の三上さんも思案顔。ま、散歩でもして、徐々に慣らして行きましょうよ。

おう、散歩ねえ。悪くないかあ、ラジオ片手に、そだな。ってんで何気なく始めた散歩。ぶらぶらご近所を徘徊して、少しずつ距離を広げてって、夢の丘公園、ビル街、新宿駅。それから歓楽街まで足を延ばして、日本でも最大級のネオン街、夜の新宿ネオン町三丁目を凄い人込みに押し潰されそうになりながら、ひとりぼっちで歩いたんだ。

うん、でもなんだかね、やっぱり、いいなあ、この感じ。孤独なぼくにぴったりと合ってる気がしてさ。ひとりぼっちロンリー気分で、うんとさびしい癖にそれでいてなぜかやさしい。この大都会の人込みが妙に落ち着くのはなぜなんだろう。それに、それに凄いなんだよ。えっ、何がって。いやほんと凄いなだから。だから何がさ。うん、涙だよ。えっ、涙。言ったら、ぼくには見えるんだって。人知れず流す涙や、心の中でだけ零す涙が、ネオン街のそこいら中無数にきらきらと煌めいているんだよ。群衆の波人中、表通り、裏通り、風俗店やラヴホの薄暗い部屋の窓辺に明滅してんのが、見えるんだ。ああ、みんな笑ってる癖に本当は泣きたい気持ちで一杯なんだなあって、だからぼくには分かる。うわ、すげえーっ、流石これが大都会新宿ネオン町三丁目なんだなあ。でもここは、涙で灯るネオン街なんだよ、ぼく以外だあれも知らないけれど、確かにここは涙の海なんだよ、やっぱり……。

そうやって絶え間ない人通りの中にながら、丸でぼつんと銀河のまん中にでも突っ立っているかの如くひとりぼっちで興奮しているぼくの耳に、ネオン街の通りの向こうから何かが聴こえて来たんだ。何だろうってノイズの中に耳を傾けると、確かにそれは聴こえて来た、You Are So Beautiful……って。どきっ、はあ何だ、これ。それは歌、しかも英語の歌だ。何だろう、BGM、どっかの店かなんかのスピーカーから流れて来んのか、いや違うみたい、人の声、生の。あっ誰かが唄っているんだ、そこで、今ぼくの直ぐそばで、唄っているらしい。

って思ったら、丸で重力にでも引き寄せられるみたいにぼくは、そっちの方角に行かずにいられない。そこには小さな人ばかりが出来ている。ぼくも仲間に加わる、覗き込む、誰が唄っているんだろう。そこには、そう、おんぼろのギター爪弾き唄う、あなた、やすおさんがいたね。

You Are So Beautiful……、何だ、これは。その歌はぼくにとって、妙に懐かしくてならない。懐かしい、それは実に久し振りの感情だった。そりゃそうさ、記憶を失っているぼくが、懐かしいなんておかしい話じゃないか、そうだろう。一体どうなってんだって、

その時のぼくの混乱振りといったらない。ぼくは継るように、その歌を口遊むやすおさんの顔をじっと見詰めたね。そしたらやすおさんは、にこっと微笑んでくれた。丸でぼくひとりに向かって唄い掛けるように、丸で遙か昔からぼくたち友だちだったみたいだね。

You Are So Beautiful……、その瞬間、びびびびびとぼくの体中に電流が走ったんだ。比喩でなく本物の電気ショック、びびびびび……You Are So Beautiful……。それから、どうしたと思う。うん、ぼくの唇が勝手に動き出して、気付いたらぼくも唄っていたんだよ、やすおさんの歌に合わせて。ね、凄いだろ。なぜって、思い出したからさ、その歌を、You Are So Beautifulを。多分この歌なら、たとえ数千万回生まれ変わっても思い出せる、そんな気がしてならない。でも、思い出したのは歌だけじゃなかった。この歌を口遊んでゆくうち、ぼくはぼくはね、少しずつ、うん、段々と思い出して来たんだ。何を、そりゃ、失った記憶のすべてをさ。

うわーっ、まじでって、叫び出したい気持ちで一杯だった。でも本当にそうしたって誰も変な目で見たりなんかはしない場所だと分かっていたけど、ぼくは黙って突っ立って、やすおさんの歌を聴いていた。短い歌だから直ぐに終わって、やすおさんは次の曲の準備。その間ぼくは、じっと思い出していた。目を瞑り、周りのことなんか一切気にせずにね。思い出していたんだ、何を。夢国島のことを、美砂、星砂のことをね。さとうきび畑を駆け抜ける潮風、青い海、白い砂浜、打ち寄せる波また波、美砂と抱き合った夜の海の潮騒……。

やすおさんの歌が再び耳に届く。今度は、Lonely I'm Mr.Lonely……、ふう、かっこいい、やすおさんって最高、なんて思いながら、ってその時はまだやすおさんの名前知らなかったけど、歌に聴き入っていると、何処からともなくひとりの変てこな人物が現れ、唄うやすおさんの前で曲に合わせて踊り出したね。その人物は痩せた口笛でメロディ吹きながら、風変りな恰好でって、ま簡単に言えば着ぐるみを着て、くるくるくるると軽妙にスリリングに、そしてにこにこしながら踊ってた。その人こそ、着ぐるみマンさんだったね。

ぼくはぼくで甦った記憶が頭ん中と、体の隅から隅まで駆け巡っていたから、びんびんびんびんと体が自然に動き出して、気付いたらぼくも踊っていた。そんなぼくに一瞬着ぐるみマンさんびくっとしたけど、直ぐにぼくを仲間に入れ、ふたりで一緒に踊ったね、Lonely I'm Mr.Lonely……、くるくるくるると、ふたりして踊り狂ったね。曲が終わると、ぴたっとポーズを決めてダンスを終えた着ぐるみマンさんは、そのままがぼつとぼくに抱き付いて来たね。ううっ、背中いてえ。熱く痛い抱擁に、ぼくも感激、しばし肩を叩き合うふたりだった。

やすおさんも寄って来て三人で肩抱き合い、何だか訳分かんないけど、笑い合ったね。周りの人たちは何事かとみんな吃驚してたっけ。その時からぼくたち三人は仲間、カンパニー。ぼく四十歳、やすおさんが二十四歳、着ぐるみマンさん三十七歳のこと、それは衝撃的出会いだったね。

何処住んでんの。あ、俺たち、夢の丘公園で知ってる、あそこいんの。え、えっ、OB、ぼくOB。OB。だから、ぼくもあそこ住んでたの。はあ、嘘だろ。嘘違う、田古嘘吐かないあるよ。まじ、じゃすげ偶然じゃん。なんだかね、やっぱり、今は墮落して青葉荘なんてアパートに住んちゃってるけど。へえアパート、それも凄いね、公園暮らし

から脱出出来たんだ、良かったじゃん。ああ、まあね、今度遊び来てよ。そっちこそな。うん行く行く、絶対行く。

でも不思議に思ったことは、さっきからお喋りするのはいやすおさんばかりで、着ぐるみマンさんは黙ってにこにこ笑ってるだけだったね。おや、無口な人なのかななんて思ってた。名前、何ていうの。俺、やすお。それから着ぐるみマンさんはどうすんだろって見てたら、行き成しメモ帳にボールペン取り出して『おいらは、着ぐるみマンだな』とさらさらさらっと綴り、それを見せてくれたね。へえ、やっぱりお喋りはなし。

でぼくの番。名乗ろうとして、一瞬口をつぐむ。やばい、どっちにしよう。思い出しほやほやの本名の方か、それともはるさんに名乗って以来ずっとお世話になって来た偽名にするか。で、うん、やっぱりこっちにしとこうってんで、田古八男です、宜しく、と自己紹介した訳。御免、嘔吐いて。でもぼくの人生そのものが、半分嘘みたいなもんだから許して。

じゃまたな。うん、また会いましょう。再会を誓い、やすおさん、着ぐるみマンさんのふたりと別れネオン街を後にして、ひとりとはとぼ青葉荘へと帰る道すがら、なんだかね、やっぱり、珍しく一生懸命ぼくが考えていたのは、勿論甦った記憶のこと。島のこと、美砂、星砂のことばかりが、ぐるぐる、ぐるぐる頭の中を駆け巡る。

どうしよう、島に帰りたい、ああ帰りたい。You Are So Beautiful……、唇はどうしようもなくこの歌を口遊んでいる。帰ろうと思えば、お金はある。だったら何も迷うことはないじゃないか。さ、今直ぐにでも、と心ははやる。でも、でもと何かが心を引き止める。今更、そう今更もう遅い、もう手遅れなんじゃない。でも、だって。だってもへったくれもねつつうの。もうあれから何年経ってると思ってんだよ、島を出てから。ええと、ざっと十二年、いやもっとかな。だろ、十年一昔つつうだろが。

でも。だからでもじゃねって、もうみんな昔のことなんだよ。もう時既に遅しなんだってば。でも、でも、でも。ああ、だから聞き分けのねえ男だなあ、おめは。考えてみろや、いいか、すべてがみんな、おめが島にいたあの頃のまんまな訳ないじゃん。星砂だってもう大きくなってんだろうし、美砂だって、そうだよ美砂。あいつだってさ、今でもおめをずっと待っていてくれるかどうか、分かんねえだろ。いやむしろ娘盛り、女盛りの頃だ。おめのことなんざさっさと忘れて、もう別の男と再婚、してっかも知んねえじゃん。

再婚……、がーん、まさか。でも考えてみたら、その可能性はあるある限りなくあるかあ、やっぱし。しょぼん。もし、もしも本当にそうなら……、ぼくは死にたい。ま死ぬのは置いて、もしそうなら今更どの面下げて、のこのこと帰れるってんだよ。いい迷惑じゃん、美砂だってどうしたらいいか、あいつを困らせるだけなんじゃねえの、まったく。星砂だって困るよな、行き成し昔の父親が現れて、ふたりもお父さんがいたってよ、だろ。うん、そだな。参った参った、どうすりゃいいんだ、これじゃ帰れないよ。あーあ、こんなことなら記憶なんか思い出すんじゃないかった。記憶喪失のままにいた方が良かったんだよ。げえ、でもそれってすげ、悲しいなあ。You Are So Beautiful……、この涙で一杯に光り輝く新宿の夜の中で、今ぼくの瞳は涙の海さ。ぼくの名は、Mr.Lonely……。

青葉荘に着いた時はもう真夜中。ふーっとため息吐いて、だったらこのままでもいいじゃないか、今更思い出したところで何もいいことなんかありゃしないんだったら、忘れたまんまでさ。こうして今迄と何も変わることもなく記憶喪失男でいることにしたぼくだっ

たどさ、ちゃんちゃん。

そうはいつでも、なんだかね、やっぱり、辛くて堪らない。ひとりで部屋の中に閉じこもっていると、気が変になりそうだって、えっ、もう変だって、まあね。だから気を紛らす為、自然足は夢の丘公園へと向かう。やすおさん、着ぐるみマンさん、いるかなあってね。いた、いた、ふたりとも昼間は公園にいるんだね。

やあ。おう。着ぐるみマンさんは声は発せず手を振って。良く来たねえ、まあ、座って座って。うん。夢の丘公園の風に吹かれながら、三人で肩並べのんびりと。どうしたの。うん、まあ、いろいろとあってね。ああ、みんな、いろいろあるさ。着ぐるみマンさんもやっぱり黙って頷いていたね。

何日かふたりと顔を合わせ、夜はネオン街でやすおさんの弾き語りを聴いて時を過ごした。やすおさんは所謂ストリートミュージシャンで、着ぐるみマンさんは、やすおさんの歌に合わせて踊るストリートダンサーだね。着ぐるみマンさんは本当は喋れるし聴こえもするけど、訳あってメモ帳で会話してるんだよね。その訳はやすおさんもぼくも知らないけど。着ぐるみマンさんは特にバイトとかしてないけど、やすおさんは夜のネオン街で風俗店の看板持ちをしているんだよね。店の名は『エデンの東』、入れ替わりの激しいネオン町三丁目にあつて老舗のヘルス。

随分と親しくなったところで、なんだかね、やっぱり、夢の丘公園で酒盛りしながら、ふたりにはいろいろと昔話を聴いてもらったね。うん、うん、頷きながら、島に帰れず自棄になってるぼくを、ふたりで慰め励ましてくれたね。ぼくも誰かに話したことで随分と気が楽になったし。

お陰でぼくは少しずつ立ち直り、じっとしてるより何かやった方がいいってことで、以前のバイトも再開した。加えて夜は、だって夜ひとりぼっちで青葉荘にいるのなんて耐え切れない、やすおさんのバイトを交替でやらせてもらうことにしたね。エデンの東の看板持ち。

ネオン街の通りのまん中で、片方の耳にイヤホン挿しラジオ聴きながら、重い看板を持って突っ立っていると、いろんなものが見えて来たんだ。通りを歩く人たちの様子、風俗店の入ったビルの様子とかね。でもそれにも増してやっぱり、見える見えるって、何が。ん、みんなの涙が見えるんだよ。風俗店の女の子たちも、従業員、客引きの男たちもお客も、みんな心ん中は涙で一杯なんだよ。ぶすっとしてたり、厚化粧だったり、笑ったりしている癖にさ、参ったね。

だからそんな人たちが、看板持ちのぼくなんかたまに声を掛けて来る時、ぼくは陽気に笑い返す。ま、人それぞれ、いろいろあるけどさあって。やっぱみんな大変なんだなあ、それぞれ何か背負ったり引きずったりしてるんだなあって思い知らされると、ぼくも自分のことばかりで落ち込んでちゃ駄目だなんて励まされる。だからこのバイトやり出して良かったって思うんだ、辛いことは確かに辛いけどね。

で看板持ちのぼくに声掛けて来るその中のひとりに、エデンの東で働く雪さんがいたんだ。思い返せば初めて会った夜、雪さんは店から出て来て、ぼくの隣りでハイライトに火を点け、大変ですねって。その時三十代の初め頃かな、雪さん。そばでハイライト吸われんのは嫌だったけど、雪さんは何となく許せちゃって。それからちょくちょく顔合わせて、話すようにもなって、気付いたら、恋。は、何っ。だから、恋、こ、い。

えええ、まじで、それは初耳、あの雪さんと。うん、なんだかね、やっぱり。っても、お互い本気の恋じゃなし、雪さんは雪さんでなんか事情ありそうだし、ぼくはぼくで島に帰れない、美砂にも星砂にも会えない、そんな寂しさとかあるじゃない。だから、なんだかね、やっぱり、言わば大人の恋ってやつですか。はあ、あほか。御免、つい調子乗り過ぎ。

でも互いを慰め合うっていうの、忘れもしない、年が明けた今年の元旦、寂しそうな雪さんの様子についぼくから誘った、新宿ネオン町三丁目五番街のラヴホテル『海猫』。何だか海の音でも聴こえて来そうなとこでさ、海猫のネオンの文字もまだ暮れない繁華街の空気の中で震えていたっけ。でもラヴホ行ったのは、その一回切り。だって……、その後直ぐ駄目になっちゃったから、雪さんとぼく。

何がいけなかったのか、上手く思い付かない。強いて言えばやっぱりお互い、自分の過去を引きずり過ぎていたってことかな。でも実際雪さんのことを本当にぼくは好きだったのかどうか、良く分からない。そして今でも好きなのか。そだな、俺にも分かんねえよって。うん、そうだね。でも、ま、いいか。そのうち分かるさ、そのうちね、きっと……。

とまあ、これが詰まんないぼくの半生の思い出語りでござい。さあ、辛気臭い話はこれ位にして、飲も飲も。飲んで唄って踊り明かして、やなことは忘れようぜ、なんだかね、やっぱり。

(二) 娘

(二) 娘

これは松堂星砂が二十二歳の誕生日の夜に、新宿ネオン町三丁目にある風俗店エデンの東の風俗嬢、雪に語った思い出話である。

(二・一) 夢国島

(二・一) 夢国島

ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……って生まれた時から、海の音がしていた。さわさわわーって、さとうきび畑を駆ける潮風も生まれたばかりのわたしの頬を撫でていってね。

わたしの田舎、夢国島なの。そう、たこさんと一緒、吃驚でしょ……、うん。今日八月六日生まれ、凄い暑い朝だったらしい。ふーふー唸りながら、汗だくで産んでくれたんだって、お母さんが二十一歳の時。

お母さんの名前が美砂、美しい砂で、わたしが星の砂って書いて星砂。島の海辺のきらきらと光る星の砂のようになって欲しいって願いを込めて、付けてくれたんだって、おとうさんが。おとうさん……、うん、実はたこさん。えっ、嘘でしょ、冗談じゃなくてって。うん、ほんとにほんと。御免なさい、わたしもさっき知ったばかりだから……。

おとうさん、ずっと島にいるつもりだったけど、さとうきび畑で働きながら。でも畑が駄目になっちゃって、それで仕方なくおとうさん島離れて、ずっと海に出た切りだったんだって。

おとうさんが海に出たの、わたしが二歳の時からだから、何にも覚えてなくて、おとうさんのこと、わたし。おとうさんの写真も見ただことなかったし。それで全然気が付かなかったの、ほんとばかみたい、今日まで気付かなかったから。うん、仕方ないよって、そうだね。気にしない気にしない、うん、そうだね。大丈夫、ほんとに。

しばらくは仕送りとかしてくれてたみたいなんだけど、おとうさん。でも船の事故かなんかあったらしくて、行方不明になったって連絡が乗っていたマグロ船から入ったのが、お母さんが二十四、わたし三歳の時で、それから後はもう音沙汰なし。

お母さんずっと待っていて、死ぬまで待ち続けるつもりでいたんだけど、おとうさん帰って来るの信じて。いつもお母さんが海辺で一日中待っていたの、覚えてる。わたしを背中におぶったり、ふたり並んで遠い水平線眺めながら。

そんな時いつもお母さん唄ってくれた、You Are So Beautiful……って。おとうさんの大好きな歌だったんだって。その歌聴くとわたしいつも直ぐに眠ってしまうらしくて、それはぐっすりと幸せそうな寝顔して。何でかっていうと、わたしが生まれたその時から、島にいる間ずっとおとうさんが子守唄代わりに唄ってくれてたからだよ、きっと、ってお母さん。ああそうかあって、でも全然覚えてない。

でも結局おとうさん、帰って来なかった。おとうさんいないままそれから六年が経ち、お母さんだってまだ若かったし、おとうさんいないの星ちゃんも不憫だろうって島のみんなも心配してくれたから、お母さんあんまり気乗りしなかったけど一旦離婚の手続きをして、再婚することにしたの。お母さん三十歳、わたしが九歳の時、周りに勧められるまま、相手は松堂勝。おとうさんと同い年、幼馴染みだって。今のお父さんがこの人。

その時母もわたしも松堂の姓に変わったの、だから松堂星砂が今のわたしの名前。翌年松堂のお父さんとお母さんの間に子どもが出来て、弟、海人(うみと)が生まれたの。これで松堂家は四人家族。だからこの時もう……、夢国島にはおとうさんの帰れる場所は無くなってしまったの。だって洸鎌美砂も洸鎌星砂も、もう何処にもいないのだから……。うん、洸鎌ってたこさんの本当の姓。御免なさい。(と星砂は涙を流す。)

小学校、中学校までは島にある学校に通い、でも島には高校なかったから、中学を卒業したわたしは島を離れ、沖縄市の松堂の親戚の家に下宿しながら高校に通った。入って来る情報量が島とは比べ物にならない位多くて最初は戸惑ったけど、慣れて来ると歌手とダンサーを夢見るようになり、華やかな芸能界と東京に憧れたの。

毎日大好きなミュージカルのビデオを見て、ため息を零していた。一番好きな歌は、Elaine PaigeのMemory。お母さんも大好きなの。この歌をバックに、眩しいスポットライトのステージで踊るのがわたしの夢、だった。芸能スクール、うん、沖縄にもあるある。でもそんなとこ通う余裕ないから、兎に角少しでもお金貯めなきゃって、高校の間ずっとケーキ屋さんでバイトしてた。

高一の時、渡辺瞬って三年生と付き合っ、その人地元では有名な会社のお坊ちゃんなんだけど、卒業式の日初めて一晩を共にした。二年したらわたしも東京行くから待っててねって約束して、彼東京の大学に行っちゃった。だから高二、高三の間は、ずっと遠距離恋愛でメールと電話だけ。大学休みの間は帰って来ればいいのに、ちっとも帰って来なかった。やっぱり東京の方が面白いのかな、なんて嫉妬しつつ、あーあ早くわたしも東京行きたいなあってずっと思ってた。

だから高校卒業したら、すっかりもう東京行くつもりでいたんだけど、高三になったら家族ともめちゃった、東京に行くか地元に残るか。大学なんて無理だから就職して東京行くつもりでいたのに、みんなから反対されて。お母さんなんか泣いて縋り付いて引き止めるの、あんなとこ行ったら暴行されるとか、事件に巻き込まれて殺されてしまふとか、何処の国の話って感じ。

でも、お父さんがいなくなって今度はあんたまでいなくなったら、お母さん死ぬ程寂しいって言われて。その一言で堪んなくなって……。ずっとこっちにしようって決心したの。うん分かった、何処にも行かないから安心して。ただどいざ地元に残るとなるとそれはそれで大変で、ちょうど不況だったから就職難で結局仕事決まらないまま高校を卒業。

仕方ないから下宿を続けて、ケーキ屋さんでバイトしながら仕事探したけど見付からない。流石にそんなわたしを可哀想に思ったのかお母さん、あの時は引き止めて御免ね、今更遅いかも知れないけど、何だったら東京行ってみるって。お母さん申し訳なさそうに謝るから、わたしもどう答えていいか分からなくて。適当に、じゃちょっと東京見物でもして来るかなあなんて答えたら、あんた、夢あるんでしょって。知ってたみたい、お母さん。

うん、夢、そうだった、わたしの夢。悔いが残らないように、しばらく向こうで夢を追い掛けてみたら。しばらく夢を、うん、そうだね、じゃ……。三年位。三年。うん、三年間だけ東京で頑張ってみようかな。そうよ、頑張って、でもお金はあるの。大丈夫、バイト代貯めてるから何とかかなと思う。宛ては、宛てはあるの。うん、それなら高校の先

輩で渡辺さんて人いるから、その人頼って行ってみる。そう、じゃ良かった。でもなんかあったら直ぐ電話頂戴。嫌になったら、いつだって帰って来ていいんだから、ね。うん、分かった、有難う。

(二・二) 東京

(二・二) 東京

こうして十九歳の誕生日、東京に出て来たの。二十二歳の誕生日までの三年間だけ、東京で暮らす約束で。重たいスーツケースを引きずりながら、鹿児島まで飛行機、それから博多まで出て新幹線。初めて降りた東京は、東京駅のホームだった。

まず初めて見る大都会の人の多さに丸で大きな河を見ているようで圧倒され、しばらく呆然と立ち尽くしていた。気を取り直し、その足で住所を頼りに、警察にも聞いて、何とか辿り着いた渡辺瞬の住む日暮里のマンション。でも行き成りそこで蹊いたの。

わたしばかりだから、最初に電話しとけば良かったのに、突然訪ねて驚かしてやろうなんて思ったの。ドアを叩いて、誰ってドアを開けた瞬、わたしを見るなり啞然。何でお前ここの訳みみたいな顔で、しばしわたしの顔と荷物を交互に見詰めてた。それから、何の用、なんて冷たい態度で言うの。あれっ、意外な反応にわたしもどうしようなんて焦っちゃって。そしたら、何してんのって部屋の中から女が現れて、うん彼女。あいつもう彼女つくってたの。ええっ、て今度はわたしの方が啞然。でも結局部屋にも入れてくれず、そのまま体良く追っ払われちゃった。

どうしよう、見知らぬ東京の路上にひとりぼっち、重たいスーツケースを抱え、文字通り路頭に迷ったわたし。やばい、何処に行けばいいんだろう。不安で心配で涙出そうで、お母さんに泣き付こうって無我夢中で近くの公衆電話ボックスに駆け込んだの。今からそっち帰るからって、冷たい受話器を握り締め、テレホンカード挿し込んで、ダイヤル、でも……、咄嗟に受話器を置いたわたし。お母さんに心配掛けたくないって思って。

とりあえずその日は上野のビジネスホテルに泊まって、明日帰ることにしたの。折角東京出て来たのにたった一日で帰るなんて勿体ないけど、頼れる人もいないし宛てだって何もないんだから仕方ないよねって諦めて。

でも、朝起きたら、急に気が変わったの。目が覚めて窓を開けたら、東京のノイズが聴こえて来てね、人波とか駅前のざわめき。それがとっても活気があって、窓から見下ろす東京の朝の景色についつい見惚れちゃって。わあ、ここが東京なんだ、凄いなあって。わたし今東京にいるのに、このまま何もせずに帰っちゃうなんて勿体ないよ絶対。折角来たんだから、もう少しこっちで頑張ってみようかなあって、そんな気持ちになってたの。

とりあえずホテルを一泊延ばして、じゃどうしようって一生懸命考えて、寮付きのバイトを見付けることにしたの。早速上野の街に出て、商店街の店頭においてある求人ペーパーをめくれば、あるある、流石東京、迷う位の求人が載ってた。でも寮完備となるとそれなりに職種も限られる。でも贅沢言ってる場合じゃないと、履歴書を用意し駄目元で応募したのが警備員のアルバイト。電話して即面接。

上野駅近くにある『アメ横警備保障』という会社。十八歳以上なら年令学歴資格不問、未経験OK。女性も可だよ、おばちゃん、おばあちゃんだって頑張ってるし、あんたなら

若くてぴちぴちしてるから問題なし。何、沖繩だって、だったら暑いのも平気だろ。よし、決まりって即決、採用。良かった、何とかなるもんだなあって一安心。

直ぐに鶯谷駅そばの寮に、相部屋だったけどま仕方ないかと移り住んだ。健康診断を受け、入社に必要な書類を揃え、この時島の役所から証明書を取り寄せる為お母さんに電話で依頼。研修を済ませたら、早速次の日から道路工事の現場に派遣されちゃった。

実際やってみるとやっぱり大変。週五日猛暑の炎天下でふらふらになりながら、長袖の制服で一日中突っ立って汗びっしょり、足は痛くなるし日焼けはするしで、もう泣きそう。声小さいぞとか、ミスしたら怒鳴られるし、車に轢かれる危険だってあるし。仕事終わって寮帰ったら、疲労でもうバタンキュー。でも慣れて来ると、だいぶ楽になったけど。

寮の相部屋の人は、立川さんという独身のおばさん。やさしい人で凄く親切にしてもらったの。ね、ふたりでアパート借りて一緒に暮らさない、なんて折角誘ってもらったんだけど、そのうち田舎帰るからって断った。

だからアメ横警備保障、そんな不満とかないし東京で初めて雇ってくれたとこだから、ずっと続けても良かったんだけど、うん。日焼けで顔はまっ黒になるし、欠員出ると休みの日でも急に呼び出されたり、あと若い女だからセクハラみたいなこともあるしね。だから一年間働いてお金貯めて、二十歳になったら辞めちゃった。

次に、アメ横警備保障にいる間に渋谷の居酒屋チェーン『和太郎』のバイトを見つけて、そこの寮に引っ越した。個室だったからそこ、今度はひとりでのんびり出来るぞおとか思ったけど、甘かった。仕事がきついのは警備員と同じだけど、こっちは更に残業が多くて深夜まで働かされて、寮に帰ったらやっぱりバタンキュー。

建物の中だから雨風とか暑い寒いも関係ないし、店内には若い女の子もたくさんいてその点は良かったんだけど、酔った客からのセクハラもあるし、女の客とか気取ってて軽蔑したような目で人のこと見るし、嫌な思いも結構したよ。カッコ良さそうなサラリーマンでも酔っ払うとだらしなくなったり、愚痴ったり。そんな姿見ると、あーあかっこ悪い、でもみんなそれなりに苦労してんのかなとか思って。

うん、警備員やってた時も感じたけど、東京なんていっても華やかなのはほんの一部だけで、あとはただ人が多くて騒々しくて、ごみごみしてるだけなんだなあとか、華やかなほんの一握りの人の陰で、立川さんとかわたしみたいな地味な仕事してる人間がいて、この東京を支えているんじゃないのかななんて思ったりしてね。東京出て来たら、それこそいろんなチャンスがそこいら中に転がってて、何とかなるみたいなものって、本当甘かったなあって痛感した。そんな訳ないよね、やっぱり。

毎晩仕事に疲れ果て、くたくたになって深夜寮に帰ってもひとりぼっちだし、あとはただ寝るだけ。今頃立川さんどうしてるかな、立ちっぱなしの仕事だから寒くなると膝が痛くなるとか零してたけど、今頃膝疼いてないかなあなんてふと思ったりしてね、天涯孤独の立川さん。

休みの日は店の子たちと、渋谷とか原宿、新宿とか遊びに行っって、わいわいはしゃいで騒いで。東京ディズニーランドにも連れてってもらったよ、あんまり楽しくなかったけど人ばかり多くて。ああ楽しかったね、明日からまた嫌なバイトだね、なんて笑い合っって、でもそれでお終い。寮に帰ってひとりになると、無性に空しさが込み上げて来た。

わたし毎日何やってるんだろう、何の為に東京に来たんだっけって頭抱えて悩んで。自分から何か始めなきゃ何にも始まらないんだよって分かっていても、何から何をどう始めたらいいのか分からないまま、どんどん時間だけが夢のように超特急で過ぎてゆくから。このままじゃいけないって焦ってもがいて、でもやっぱり日々に流されてゆくだけ。お店に出たら、にこにこ、にこにこ、いらっしゃいませ、有難う御座いました。毎日毎晩、ぺこぺこ、ぺこぺこ頭下げて愛想笑いして、ほんとばかみたいなのわたしの毎日だった。

そうやって、ひとりの部屋で思い詰めていると息が詰まるから、毎月仕送りする度、お母さんに電話したの。元気のないわたしの声分かるのか、お母さん、大丈夫、嫌なら帰って来ていいんだよって。その声聴くと思わず泣きそうになるけど、大丈夫だよって笑い返す。でも本当は帰りたくて帰りたくて。

夢国島、あの島の砂浜に寝っ転がって一日中水平線を見ていたい。海が見たい、見たい、見たいって胸が張り裂けそうになって。でもそんな時受話器の向こうから幽かに海の音が聴こえて来るの、ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……って。さとうきび畑を駆け抜ける風の音も、さわさわさわーって聴こえて来る気がするから。だからもう少し、こっちで頑張ってみようかなって思いとどまった。

でも和太郎は結局半年で辞めちゃった。なぜかというところ……。

(二・三) パンドラ

(二・三) パンドラ

和太郎を辞める前、お正月に渋谷ハチ公前をひとりでぼんやりと歩いていた時、ちょっとすいませんって、やさしそうなサラリーマン風の男性に声掛けられたの。どうせナンパだろうって、しかとして行こうとしたら、あなたは神様を信じますか、だって。何だナンパじゃなくて宗教の勧誘、やっぱり行こうってしたら、今度は、あなたの夢は何ですかって聞いて来るの。

夢、吃驚して振り向いたわたしの前に駆け寄って来たかと思うとその人続けて、アイドルですか、それとも女優、グラドル、歌手、あなたがなりたいのは何。ってわたしの顔じっと見詰めながら聞くの。えっ、もしかしてこの人芸能プロダクションのスカウトか何かかなって、試しに、歌手になりたいんですって返事してみたの。それに出来たら踊りもやりたいんです、わたしって。

そしたらその人、ぱっと目を輝かせて、良かった、丁度ぼくもきみみたいな子探してたんだよって。でもこうして街角に立っていても、なかなか才能ある子いなくてね。才能。うん、そしたら今きみがぼくの目の前を通り掛かった。一目見ただけで、びびびっと来たよ。びびびっと。あの子絶対才能あるぞって。わたしに才能。これはもう芸能の神様の思し召しに違いない、そう思ってさっきつい、神様を信じますかなんて、聞いてしまった訳。

訳って、でも、そうなんだ、なんか凄ーいってわたし舞い上がっちゃった。嘘、わたしに才能、ほんとかな。でも全然嘘吐いてるように見えなかったから、信じ込んだわたし。これってもしかして、チャンス。もしそうなら、わたしも神様信じちゃう。

ぼく、こういう者です、って渡された名刺には『烏賊川企画プロダクション 取締役 烏賊川志郎』。へえ、やっぱり芸能プロダクションの人、しかも取締役だって凄ーい。ますます興奮のわたし。ねえ、うち来なよ、面倒見るから。面倒。直ぐにメジャーデビューって訳にはいかないけど、レッスン受けてさステップアップしながらオーディション受けて……。メジャーデビュー、レッスン、オーディション、嘘でしょって舞い上がる気持ちを抑えつつ、はい。ね、一緒に輝くスターの星を目指そうよ。スターの星、言葉重複してる気もしないでもないけど、気にしない気にしない。はい、勿論喜んで、こちらこそ宜しくお願いまーす。

のこのこ烏賊川さんの後についてって、気付いたら渋谷駅直ぐそば、雑居ビルの中にある事務所の椅子に座っていたわたし。目の前には烏賊川さんの奥さん。押しの強い関西弁のおばさんで、わたしはその人の言いなり。今何処住んでんの。バイト先の寮です。ならマンションうちで世話するから引っ越しといで。えっ、でもそんな行き成り。不安になるわたし。心配せんでええて、それからバイトももう辞め、時間勿体ないし。でも生活費が。そやからうちとこで面倒見る言うてるやない、分からん子やな。はあ、でも

なんか不安で。何言うてるの、あんたスターやで。これからスターの星を……。またスターの星だ。うちらと目指すんちゃうの。

はい、そうですけど。けど、何。いいんですか、本当に。いいんですかて、いいに決まってるやない、そやからさっきから一所懸命話してるんやろ。でも、なんか……。そないうちらのこと信用でけへんの。いえ。そやったら、この話なかったことにするで、それでええの、星ちゃん。

星ちゃんって。如何にも人懐こそうな烏賊川の奥さん。わたしは激しくかぶりを振って、それは困ります。そやろ、うちらな、ほんま星ちゃんにスターになってもらいたいねん、分かってくれる、な、星ちゃん。ぐっとわたしの手を握り締め、にこっと笑みを浮かべる奥さん。はい、分かりました。完全に信用した訳ではないけど、烏賊川さんだけなら兎も角、女である奥さんがいるし、大丈夫かなあって、早速烏賊川さんの用意してくれた渋谷駅近くのワンルームマンションに引っ越し。同時に和太郎も辞めちゃった。引っ越しって言っても荷物なんか大してないし、もしいざとなったらスーツケースひとつで逃げ出せばいいんだからと、安易に考えていたわたし。

ところが相手は一枚も二枚も上手だった。引っ越しが一段落して事務所に行くと、行き成りマンションの費用の話。面倒見る言うてもな、悪いけど敷金礼金、月々の家賃は自費で頼むわ。はあ、それ話違うじゃないですかってまっ赤な顔して反論するわたしを制して、烏賊川の奥さん。そんな大きな声出さんと、大した額やなし、こんなもん。な、あんた、これから大スターなるんやろ、みみっちこと言いっこなし。でも、わたし払えませんが。そやから出世払いでええねん。出世払い。そ、あんたがスターになるまで、うちらで立て替えといたげるさかい。立て替え。ん、そしょそしょ。

そんなこと言われても、スターになれる保証なんて何処にもないのに。なんかやばいかもと一気に不安に陥るわたしに、更に追い討ちを掛ける烏賊川の奥さん。実はな、レッスン料とかオーディションのエントリー代とか、何かと細々した費用がいんねん。ええっ、そうなんですか。ま、いつもはプロダクション持ちなんやけど、実はな。はい。今うちとこ大きな新人ふたり売り出そうしてて、そっちの方で資金が目一杯なんや。は、はい。済まんけどちょっとの間だけ、立て替えてくれへん、頼むわ。ええっ、そんな無理です。かぶりを振るわたし。

すると深刻そうな顔して、烏賊川の奥さん。弱ったな、ほなら星ちゃんの話、駄目になってまう、どないしょ。えっ、それも困るんですけど……。幾ら位なんですか。百万。えっ、そんなに、やっぱり無理、じゃわたし潔く諦めます。ちょっと待って、半分でも出せへん。無理無理とかぶりを振るわたし。じゃ三分の一は、としつこい烏賊川の奥さん。三分の一、三分の一かあ……。貯金をはたけば出せない金額ではないけどと迷うわたし。どうしよう、でも折角のチャンスなんだしと一大決心。分かりました、じゃ三十万なら出せます。へ、ほんまか。じっとわたしを見詰める奥さん。おおきに、助かるわ、残りはこっちで何とかするからな。こうして貯金全部を烏賊川企画プロダクションに納めたわたし。

いよいよレッスン初日。烏賊川さんに連れていかれたのは貸しスタジオみたいな所。ピアノの前にどうやら先生らしき中年の男の人が座っている。でも生徒はわたしひとりだけ。で行き成り先生、じゃあんたの得意な曲唄ってみてって面倒臭そうな口調で。あ

んたって、なんか感じ悪い人って思いつつ、じゃ Memory を唄います。って言ったら、何、それ、誰の。Elaine Paige、ミュージカルの。知らん、そんなの。はあっ。如何にも不機嫌そうに、伴奏出来んからアカペラな、はい、どうぞ。アカペラ、しかも、はい、どうぞって如何にも投げやり。でも聴いてもらえるだけいいかって思い直して、わたし一生懸命唄ったの。ところが先生、苛々した顔で、駄目駄目、全然駄目じゃんってぶつくさ文句言ってるの。烏賊川さんに、何この子、全然使えないよ、才能有るとか全然嘘じゃん、ないない、欠片もないよって怒ってるし。

で、それを聴いた烏賊川さん、今迄あんなにやさしかった人が見る見る恐い顔になって、わたしを睨み付けるの。しかも、おい、お前ってわたしをお前呼ばわり。お前が歌上手い、わたし才能ありますって言ったから連れて来てやったのに、どういうことだよって凄い剣幕で怒鳴り出すから、わたしも吃驚して、そんなこと言ってません、歌手になりたいとは言いましたけどって懸命に返事、その時わたしもう涙目。でも烏賊川さん、全然相手にしてくれない。

それどころか、もうヤクザの脅し。どうすんだよお前、全部パーじゃねかよ。パーって。だから才能なきマスターになんかなれっこねえだろ、うわーっ参った、参った。どうしたんですか。だから、お前に投資した大金どうしてくれんだよ。そんなこと言われたって……わたし何にも悪いことしてないじゃないですか。訳分かんないけど、兎に角涙ながらに訴えるわたし。してんじゃねえかよ、こうやって。何をですか。もうびりまくりだったけど、わたしも必死に食い下がったの。

でも、言い争ってても埒明かないと思ったのか、烏賊川さんじゃない、ヤクザまがいのペテン師烏賊川は、いいから事務所戻って話つけるぞって、わたしの腕をつかまえ無理矢理連れて行こうとする。この時やっとわたし騙されてたって気付いたから、気付くの遅かったけど、嫌ですって必死に抵抗。嫌です、わたしもう辞めます、こんなの嫌、何もなかったことにして下さい、もう嫌、離して、わたし帰りますから。帰るって何処帰んだよ。いいから離してよ、もう警察呼ぶわよ。

そしたらペテン師烏賊川は、呼べるもんなら呼んでみろって凄む。はっ何でそんなに強気なの。こっちはお前にちゃんと貸しがあんだろ。貸し、はて。だから、立て替えたマンションの費用だよ。あっしまった、やられた。でも三十万払いましたよね。あれはレッスン料だろ。そうだった、がーん。それもお前が才能ないってんで、今全部パーになったろが。

じゃどうすればいいんですか。だからマンションの費用返せ。返せって幾ら。百万。百万、そんなの返せません。返せませんじゃ済まねんだよ。だったら今直ぐマンション出ていきます、それでいいでしょ。だーめ。でも、ないものはありませんから。そしたら烏賊川、ドスの利いた声でこう言ったの。だったら、体で返せ。はあーっ、最初っからそれが狙いだったのね……。

烏賊川夫婦の正体、それは、プロダクションの取締役なんて大嘘、渋谷道玄坂にある風俗店、ファッションヘルス『パンドラ』の経営者だったの。普通の仕事しながら返しますからって言っても駄目。利子たこ付くから、いつまで経っても返せへん。兎に角うちで働き、嫌、それだけは死んでも嫌。

でも、逃げたら殺すぞって脅かされ、今更住むとこもないから、泣く泣くそのマンショ

ンに住み続け、パンドラで働く破目に。それが雪の降り頻る二月、立春の夜。マンションは見張られてるし店の中だって同じ。電話も一切禁止だから、お母さんに電話することも出来なかった。殆ど監禁状態。もし逃げ出そうなんてしたら、つかまえられて殴られる。だから恐くて恐くて死ぬことも考えたけど、お母さんのこと思ったらとても死ねない。仕方なく、パンドラで働いたの。でも客の前で裸になって、ただ人形みたいにじっとしてただけ。口も利かないし、泣きそうな嫌そうな顔してた。

東京なんて嫌、もう懲り懲り。人間なんて大嫌い。もうこうなったら、さっさと百万返して島に帰ろうって、それだけが唯一の望みだった。そうやって何とか八月までの半年続けたの。そしてようやく利子も含めて全部返し切ったから、よし、これでもうお終いね。じゃわたし出ていくから、マンションもこんな店も。はい、お世話になりました、さようなら。

ところが烏賊川の女房、まだあかん。何で。マンションの方は確かに済んだけど、お店の方の借りがまだ残ってるやん。何それ、ぽかーんとするわたし。そやからお店で働く風俗嬢としての登録料やろ、それに個室代。何、個室代って。そやからお客さん接待する時のショバ代やない、あほか、あんた。はあ、何があほよ、こっちは無理矢理働かされてんでしょ、冗談じゃないわよ、何がショバ代。兎に角はろうてもらわな、こっから一歩も出す訳いかん。そんなこと言ってたらわたし、いつまで経ってもこっから抜け出せないじゃない。そらそや、今頃気付いたん、ほんまあほやな、あんた。えーっ、もういい加減にしてよ……。

駄目だこりゃと遂に気持ちが切れたわたしは、八月五日、店が一番忙しい真夜中、もうどうなってもいいと、発作的に店を飛び出したの。そのままふらーっと夜の街を宛てもなく歩き続けた。

何処をどう歩いたか、どの位歩き続けたか、誰か追って来る者はいないのか、そんな一切を何も考えず、擦れ違う人に助けを求めることも忘れ、交番も素通り。ただもう夢遊病者のようにひたすら歩き続け、気付いたらわたし、新宿のネオン街まで来ていたの。

目の前は、凄い人波。真夏の都会の夜のむせ返す程の熱気、痛い程に眩しいネオンライトの波また波、眩暈がして倒れてしまいそうな喧騒の海。その中でぼんやりと突っ立っているわたしの耳に、けれど何かが聴こえて来たの、確かに懐かしい何かが。懐かしい、それは歌だった。歌、わたしの大好きな、わたしの夢、Memory……。

引き寄せられるようにわたしは、その歌のする方角へと歩き出した。そこは幾千の人が行き交うネオン街の通り。そこには人通りの中にでんと座り込んで、ギター爪弾きながら唄うひとりの男の人の姿が。一歩また一歩わたしはその人のそばに近付いてゆき……、そのまま歌を聴いていたかったけれど、歩き疲れふらふらだったわたしは、とうとうその人の目の前で倒れ込んだ。

驚いたその人は急いで、唄うのを止めギターを路上に置くと、わたしの体をそっと抱き起こし、わたしに問い掛ける、大丈夫。その人の汗臭いにおいとその人のまっ黒に日焼けした腕に抱かれ、その人の目を見詰めながら、わたしは弱々しくこう答えた、助けて……。周りは絶えることのない新宿ネオン街の人波。うん、そう。これが、やすおさんとの出会いだったの。

星砂が雪に語った思い出話は、これでお終い。以降、星砂とやすおが出会った後の話へと続くのである。

(三) ふたり

(三) ふたり

場所は、新宿ネオン町三丁目のネオン街。日付けと時刻は八月五日から日付けが替わったばかりの八月六日午前一時であり、それは星砂二十一歳の誕生日であり、かつ星砂三年目の東京の始まりでもある。

その星砂に「助けて……」と縋り付かれたストリートミュージシャンのやすお三十歳は、如何なる理由があろうとも絶対にこの娘を助けるぞと心に誓うのである。と言っても事情が分からなければ、助けようもない。

「一体どうしたんだ。しっかりしろ、きみ」

問うやすおに、息も絶え絶えに答える星砂。

「悪い人たちに騙されて、逃げて来たんです」

「何っ、良し分かった」

ますます暑いじゃない熱い正義感に燃えるやすお。場所柄若い娘が被害に遭うトラブルは日常茶飯事、お茶の子さいさいの慣れっこである。兎に角先ずは何処か安全な場所に匿い、療養させねば。生憎相棒のストリートダンサー着ぐるみマン四十三歳は、一足先に夢の丘公園に帰宅して既にぐーすかぴーと眠りの中。俺ひとりでやるっきゃねえべと気合いを入れ直すやすお。

「歩けるか」

うんと頷き立ち上がる星砂。さて何処へ連れて行くべなどと迷うことなくやすおが端から思い浮かべた場所は唯一つ、じゃーん、田古の住む青葉荘である。だって、あそこっきゃねえべ。そりゃそうだ、何たってやすおの仲間うちで鍵付きかつ雨風凌ぐ強靱な屋根付きの住空間に暮らすは、田古ひとり。

ギターをケースに収め肩に担ぐと、ふらふらと今にも倒れそうな星砂の肩を抱きながら、やすおは一路青葉荘目指し歩き出す。ネオン街を出てガードレール下をくぐりJR新宿駅西口方面に出て、ビル街、自らの住む夢の丘公園をも立ち寄らず通過して、更にせっせせと歩き続けると、遂に青葉荘の前。途中警戒し、追っ手などいないかと幾度となく振り返るも、その気配はなし。ふう、良かった。

いざアパート一階の田古の部屋の前に立ち、ドアをどンドン叩こうとして深夜であることを思い出し、はっとして手を止める。その代わり試しにそっとドアノブを回してみる。すると案の定やっぱし、不用心にも施錠なし。ありゃりゃおっちゃん、まったく大都会新宿だってえのに危ねえよ、まったく。などとぼやきながら、星砂を伴い部屋の中に侵入するとドアを閉じ、パチッ、しっかと施錠するやすおであった。これでほっと一安心。

中はまっ暗、すやすや眠る田古の寝息が聴こえるばかり。なぜか扇風機も回さず、蒸し風呂状態。星砂に囁くようにやすお。

「あっちいな、まったく。喉渴いてっだろ、水道の水しかねえけど、飲むか」

頷く星砂、水道の蛇口を捻り、ごくごくごくっ。

「腹も減ってんだろ。すまねな、生憎何にもねえんだ、ここ」

申し訳なさそなやすおに、かぶりを振る星砂。

「大丈夫です」

「そっか、じゃ今夜はおせえから、もうここで寝るべ。雑魚寝になっちゃうけど、このまま朝を待つとしようぜ」

やすおに促され、畳の上にはしゃがんで体育座り、膝小僧抱える星砂である。

「俺起きてっから、安心して眠りな。大丈夫、俺がきみを守るから」

力強いやすおの言葉に「はい」と頷く星砂。

「明日朝になったら、そこの田古のおっちゃんに頼んで、何か食いもん買ってもらおうぜ」

「たこ」

「ああ、田古のおっちゃんの部屋だから蛸部屋、なーんてな」

やすおの下らない駄洒落に、星砂が少しだけ笑みを零す、どれ程振りの笑顔だろう。釣られて笑い出すやすお。

「ま、実際ちょっと変てこなおっさんだけど、すっげえいい人だから。さ、もういいから寝な」

うんと無言で頷く星砂。沈黙が蛸部屋に落ちる。

夜が明ける。何事もなく朝を迎えた星砂とやすおはまだ畳の上で汗だくで熟睡中。田古四十六歳だけがひとり目を覚まし、何事かとじっとふたりを眺めている。ふたりとも暑かろうと気を遣い、扇風機を点ける。うんうんうーんと唸る扇風機の羽根の音に、ふつと目を覚ましたのは星砂。吃驚した飛び魚のように跳ね起きる。

その時、星砂と目と目が合った田古の中にじわっと広がる胸騒ぎ。なんだかね、やっぱり、何なんだ、この切なさ。けれど恋心とは明らかに違うんだよ。そりゃそうさ、今更このぼくがこんな小娘に……。

互いに言葉を発しそびれてしまい、言い訳がましく黙っているふたり。沈黙に耐えかね視線を逸らし、部屋全体を見渡す星砂。一言で言えばそこは殺風景、殆ど何もない空っぽの部屋。それは夢の丘公園の時代から田古の荷物が殆ど増えていないことを物語る。これじゃわたしの部屋と変わらない、アメ横警備保障と和太郎の寮、それから烏賊川に住まわされたマンションを思い出し、しみじみと親近感に浸る星砂。この人が、たこのおっちゃん。この人もいい人そう良かった。服装もなんか地味っていうか、公園とかに住んでる人っぽいし。と星砂が思う程に田古の恰好もまた夢の丘公園時代と変わらないでいる。でも何て話し掛けていいか、言葉が見付からない。戸惑いつつ、ちらちらと田古を見る星砂。

扇風機の風に紛れ、星砂の体臭が田古の鼻に届く。くんくん、くんくん、思わず嗅いでしまう。若い娘など訪れよう筈もないおんぼろアパートの部屋の中、心なし緊張してか田古の方もぎこちなさげ。しかしくんくん、くんくん、星砂の発するこの匂い、何処か懐かしくてならない。いや懐かしいどころでなく、この匂い、なんだかね、やっぱり、こりゃ夢国島の海の匂いなんだよ。でも何で。狐につままれた顔で、これまた星砂を見

詰める田古である。

こりゃ実際もしかして、いやまさか、でもなんだかね、なんだかね、やっぱり……。片時も忘れやしない、と言っても記憶喪失の間は忘れてたけど、昔その腕に抱き締めたる皺くちの我が娘の顔が、田古の脳裏に甦る。その面影がなぜかびたーっと今日の前の見知らぬ娘と一致して。ああ、もしかして、この娘、星砂……。なんだかね、やっぱり。でも確信などあろう筈もない。そりゃ当たり前、何たって星砂とは二歳の時生き別れて以来なんだから。

つつい田古が鋭い視線を向けるから、緊張に汗まみれ直立不動の星砂。しまった、恐がってるかも。やばいね、何か話し掛けなきゃ、田古の方も焦りまくり。そこへ待たせたねとばかり、遅ればせながら目を覚ますやすお。

「ふわーっ、ねっみいな、まじで。おっと、どうしたふたりとも、そんな深刻そうな顔しちゃって。じゃなかった、いけね、実はなおちゃん……」

これこれこういう訳なんざと、田古の耳に昨夜からの経緯をさらりさらさらっと説明するやすお。

「はあ、成る程ね、やすおさん。って言いたいところ、何だかね良く分からないけど、とりあえずぼくはバイト行くからさ。帰ってからまたゆっくり聴かせてもらうよ。部屋は好きに使ってくれていいからね」

そう言い残すと飯代を渡し、ふたりを置いて青葉荘の部屋を後にする田古。この時、田古の「やすおさん」という言葉から、やすおの名前を知る星砂である。

星砂をひとり部屋に残してゆくのは心配と、やすおは星砂を連れて食いものを買いに近くのコンビニへ。道すがら、星砂から烏賊川やらパンドラやらの話を聴く。

「そりゃひでえな、俺なんざぜってい許さねえ。人の大事な夢食いもんにしやがって。ったく、まんまキャッチセールスじゃんよ、気付けんだぞ今度から」

はい、と無言で頷く星砂。

「しかし良く頑張ったな、半年も」

いいえ、と星砂、今度はかぶりを振る、でも涙目。

ところが突然ふたりの前に立ちはだかる、強面の男三人。実は烏賊川の手下共、パンドラから逃げ出した星砂を昨夜から捜し回っていたのである。

「きゃーっ」と悲鳴を上げる星砂。

「どうした。おっ、もしかしてこいつ等か」

やすおに向かって男のひとりが叫ぶ。おー、あんちゃん、その娘返してもらおうか。何だどてめえら、でも良く見付けたな。そりゃそうさ、これこそ我らパンドラ悪のネットワークの威力、何処へ逃げたって無駄なんだよ。なー程ね、じゃ俺がまとめて相手してやるかって言いたいところ、ちと人数が多過ぎる。ここは一先ず逃げるが勝ちと、星砂の手を引っ張って猛スピードで逃げ出すやすお。しかし多勢に無勢、かつ連中走るのも速いと来ている。直ぐに追い付かれ、ふたりがやすおを叩きのめし、もうひとりが星砂をつかまえる。哀れ星砂は再びパンドラへ連れ戻され、こてんぱんにやられたやすおは血だらけになりながら、何とか夢の丘公園へと帰り着く。

しかしこれで引き下がってらんないのが、ストリートミュージシャン魂の塊りみたいなやすお。夕暮れの夢の丘公園で、一日の戦いを終え続々と公園に帰還する戦士いや仲

間たちに星砂のことを語り、どうしたもんかと一同にて頭を捻る。

何だと、そりゃひでえ、ぜってえ許せねえな。おし、みんなで押し掛けようぜ。そうだ、そうだ、そうすべ。それなら俺っちも一肌脱がせてもらおう。ぼくも、おいらも行く行く。あたいだって、わたしも連れてってよ。良しじゃ決まり、みんなで行くべ。おーっ。そこへ田古も参上する、バイトから我が家青葉荘に戻ってみればもぬけの殻。胸騒ぎ、こりゃなんかあったに違いないってんで、飛んで来たという訳。

「そうだ、おっちゃん」とやすお。

「なんだかね、やっぱり」

「ありったけの金用意してくんねえか」

「金、なんだかね、やっぱり、よっし任してよ。直ぐに合流するから先に行行って」

生憎着ぐるみマンは風邪でぶっ倒れている為、無理すんなと欠席。

総勢十名、夢の丘公園の同志はいざ渋谷道玄坂に巢食う悪の館パンドラ目指して大行進とござい。

こちらはそのパンドラ、連れ戻された星砂の運命や如何に。激怒した烏賊川たちは、星砂を店の一室に監禁し、服を剥ぎ取りお仕置き。あんた、そんな勝手な真似すんやったら、今夜から本番の客相手してもらうで、ええな。いや、恐怖におののく星砂。バシーツ、バシーツとしなる鞭が、星砂の柔肌にミミズを這わせる。

烏賊川の女房の命を受けたひとりの男が現れる。ええんですか、ほんまに。ええから、この小娘に思う存分男の体を教えたらんかい。は、それでは遠慮なく。男が自分のシャツをがぼっと脱げば、そこには鍛え上げた肉体美。AV男優の如く、傷心の星砂に容赦なく襲い掛かる。きゃーっ、止めて、嫌、舌噛んで死ぬわよ。死ぬるもんなら死んでみ、嘲笑う烏賊川の女房。星砂必死の抵抗も空しく、男は好き勝手星砂を弄ぶ。星砂はぐっしょりと涙に濡れながら、本気で自分の舌を噛み切ろうとするけれど、その時はっと浮かぶ母美砂の面影は勿論のこと、なぜか今朝対面したばかりのたこのおっちゃんの顔までもが脳裏をよぎって、死ぬに死ねない思いに駆られ諦める。御免ね、星砂、もう死にたい……。そのまま気絶する星砂。

その時、どどどどーっとパンドラの正面入り口に押し寄せる、我らが夢の丘公園の面々。田古もしか顔と顔を連ねている。なんだ、お前ら。烏賊川夫婦並びに店の若い衆と睨み合い。さっき連れてった女の子を返せ、とやすお。はあ、何言ってんだ、おめえ。しらばっくれる烏賊川。これじゃ埒明かねえと、実力で店内に乱入。見回すと壁に店の女の子のサンプル写真、その中にあるある星砂の顔写真。無理矢理撮られたのか、引きつった笑顔が不憫でならない。間違いねえ、ここだ、と確信を持つやすお。星砂の写真を指差し、だからこの子だってえの、とっとと返せ。

しかし烏賊川はしかと。うー、くせーと鼻を摘み、営業妨害だ、早く出てけ、警察呼ぶぞ。とは言っても烏賊川も後ろめたいから正直警察は呼びたくない。そこら辺を察知してやすお、おーっ上等じゃねえか、呼びたきゃ呼んでくれ、俺ら一向に構わねから、と啖呵を切る。その方が話早いんじゃないの、な、烏賊川さんよ。しかし我ら夢の丘公園軍団とて、決して警察を信用している訳ではない。相手は国家権力、いつなんどき公園

から出てけと攻撃されるやも知れない。

共に警察は敬遠したい夢の丘公園軍団とパンドラ側。しばし睨み合い、揉み合いが続
き、来店客はどん引きでさっさと逃げてゆく。焦る烏賊川。やすおはどかっ
と床にあぐらをかいて、大見得を切る。なあ烏賊川さんよ、俺ら見ての通り
の人間だ、いつ死んだって構わねえ。でもなあ、若い娘さんの大事な人生
が目の前で台無しになんのだきゃ黙って見過ごす訳にはいかねえ性分
なんよ。さあ、あの子を返すか、俺らをひとり残らずぶっ殺すか、ど
っちにすんだ、おい、おっさん。

そうだ、そうだ、殺すんなら殺してみろと残りの夢の丘公園軍団も、威勢
良くずらーと床に座り込む。パンドラの若い衆が必死で殴る蹴るも石のよ
うに動かない、インドのガンジー宜しく無抵抗主義。やすおなど、額が
切れて顔中血だらけ。流石の烏賊川もびびりまくり、声を震わせ、駄目
なもんは駄目なんだよ。何でだ。あの娘は店に借金があるんだよ。借金。
そうだ、その返済が終わるまでは、この店で働いてもらわにゃなんねえ
んだよ、分かったか、このタコ共。

借金とか返済とか言われちゃ引き下がるしかねえだろお前ら、と夢の丘
公園軍団を甘く見る烏賊川。しかしここで待ってました大統領とばかりに、
我らが田古の登場、じゃーん。なんだかね、やっぱり、なにになに、田古
共だ。人の悪口言うて鬼が笑うていうよ。それはさて置き、その借金お
幾らですか。はあ、幾らだと。丸で如何にも返済でもしようって口振
りじゃんか、え、あんた。田古の全身を舐めるように見回しながら薄ら
笑いの烏賊川。そりゃそうだ、田古の恰好ときたら黴と皺だらけのスヌ
ーピーのTシャツ、薄汚れた黄土色のバミューダパンツに穴だらけの紺
のスニーカー。どう見ても夢の丘公園軍団の一員としか思えない。

聴いて驚けよ、百万、どうだ百万円だ。手も足も出ねえだろ、この貧乏
たれが。しかしささかも動じない田古。どっしりと構え、なんだかね、や
っぱり、それを返したら彼女は自由になれるのかい。はあ、まだ言っ
てやがる。ああ勿論だ、返せるもんならな。武士に二言はないって
いうよ、と念を押す田古。ああ、と頷く烏賊川。

それでは、と田古がバミューダパンツの尻のポケットから取り出した
るはケツの汗が滲んだ銀行の封筒。はい、これ、と烏賊川の目の前に差
し出す。何だ、これ。でもどっしりと分厚い。まさか……。どうしたの、
諭吉さんの枚数確かめないのかい。けっ、分かったよ。渋々封筒を受
け取る烏賊川。確かに百万、でも玩具か偽札じゃねえだろうな。ま
さかと田古は余裕の苦笑い。

烏賊川に案内させ、田古は星砂のいる個室へ。ドアを開けるとそこには、
哀れにもまだ気絶し全裸のままマットの上に横たわる星砂の姿が。涙ぐ
みながら星砂に服を着せると、田古はよっこらしよと星砂をおんぶ。
なんだかね、やっぱり、それでは確かに連れていきますよ。後は無
言でパンドラを出てゆく田古。その背中に付いて、帰路に就く夢の
丘公園軍団。

途中、マンションから星砂の服やら荷物を詰め込んだスーツケースを
運んで来たやすおと合流。戦いすんで日が暮れて、というかもう真夜中
であり、星砂の二十一歳の誕生日、八月六日はこうして誰にも知ら
れることなく過ぎてゆくのである。

星砂をおぶった田古とスーツケースのやすお、ふたりを先頭に我がス
イートホーム夢の丘公園へと無事帰還する戦士たち。公園に到着す
ると、お疲れ様でした、みんな揃っ

て乾杯。今夜はおっちゃんの奢りだよ、だからみんな遠慮しないで飲んで食って唄ってくれーっと、ちょっとした真夏の夜の宴会である。

でも田古とやすおはみんなの輪を早々に抜け出し、青葉荘へと急ぐ。

「重たいだろ、代わろうか」

やすおの言葉にけれどかぶりを振ってにっこり、最後まで星砂をおんぶし通す田古。背中の星砂からはやっぱり、夢国島の海の匂いがする気がしてならない。

「なんだかね、やっぱり、今夜は有難う」

なぜ田古が自分に礼を述べるのか、まだその訳を知らないやすおである。

パンドラで気絶してから、まだ一度も意識を取り戻すことのない星砂。無事青葉荘に辿り着くと田古はそのまま星砂を横にする、田古愛用の布団の上に。目を瞑った星砂を見守りながら、

「なあ、おっちゃん。しばらくこの子、ここで面倒見てやってくんねえか」

懇願するやすおに、ああ、分かっていると黙って頷く田古。一応烏賊川とのけりは付いたとはいえ、相手が相手だけに油断は出来ない。そこでふたりは相談し、星砂がひとり切りにならないよう必ず誰かが付き添うことで意見が一致。その為田古はしばらくの間、日中のバイトをお休みすることに。

結局星砂は一度たりとも目覚めることなく、一夜を過ごす。絶望からか、それともショック、疲労、悲しみ或いは恐怖からなのか、ただただ深い眠りを貪る星砂である。

(三·一) 八月、You Are SoBeautiful

(三・一) 八月、You Are SoBeautiful

八月七日、朝である。眩しい日差しにはっと目を覚ます星砂。目の前には、やすおと田古。星砂の目覚めに気付いてほっと一安心、目と目を合わせ無言で顔き合うふたり。

「腹減ったろ、それとも風呂にするかい」

第一声はやすお。

けれど、ここは何処、と不思議そうに部屋を見回す星砂。無理もない、目覚めればパンドラの悪夢がまた始まるとばかり思っていたから。なぜパンドラじゃないの、烏賊川たちは何処、わたし、恐い……。

「あ、い、つ、ら、は」

恐る恐る口にする星砂。

「あいつらなんか、もういねえよ。ここはおっちゃんの部屋なんだから」

安心させようとやすおの声は唄い掛けるようにやさしい。

「おっちゃんの」

眩く星砂に向かって、黙って頷く田古。

「でもどうしてわたし、ここに」

「ああ、もう何にも心配いらねって。おっちゃんがな、昨夜びしーっと話付けてくれたんだから」

おっちゃんが、話付けて……。でもとても信じられない星砂、行き成り烏賊川たちが襲って来るんじゃないかとびくびくしている。

「ほら、荷物だってちゃんとここにあるし」

やすおの指差すそこには、確かに星砂のスーツケースが。あっ、その頬に俄かにぽつと赤みが差して、じっとスーツケースを見詰める星砂。止め処なく込み上げる涙を抑え切れない。

「な。さ遠慮しねえで、体べとべとして気持ちわりいだろ。シャワー浴びて来な」

うん、と頷き起き上がる星砂、やすおに案内され風呂場へ。安アパートの狭っ苦しいユニットバスではあるけれど、シャワー完備。さーっと体を洗い流す。

風呂から上がると、朝食が用意されている。質素ではあるけれど、空腹の星砂にはこれ以上ない御馳走。しかも子供の玩具のような小さな折り畳み式のテーブル、そこにはサンリオのマイメロディがプリントされていて、その上に炊き立ての御飯と味噌汁、漬物、お箸、お茶が三人分ぎっしりと並べられている。以前NGOの三上さんが揃えてくれたけどずっと使わず、台所の奥にしまっておいた炊飯器、調理道具類を使い、田古が料理したのである。

「なんだかね、やっぱり、頂きます」と田古。

「俺、こんな食事久し振り」とやすお。

星砂も頂きますと言いたかったけど上手く言えず、そのまま黙ってぱくつく。後は黙々と三人で食する。扇風機の音、窓は閉め切っている。それでも聴こえる蝉の声、近所や通り掛かる人々の話し声、足音、ノイズ……。

「なんだかね、やっぱり、御馳走様」と田古。

「ふーっ、美味かった」とやすおが言えば、今度は星砂も「御馳走様」と蚊の鳴く声ではあるけれど。その声のにこっと微笑んで、

「はい、御馳走様。いいからいいから」

後は手伝おうとする星砂を制し、ひとりで後片付けする田古。そんな田古の背中をぼんやりと見詰める星砂。

「何ならしばらく、ここいなよ。いいからいいから、な、おっちゃん」

すると台所から振り向いて、田古がにこっと指でOKサインかつウィンク。思わず吹き出しそうになる星砂。

「じゃ俺、また夜来っから。頼んだぜ、おっちゃん」

やすおがいなくなると、部屋にはふたりきり。しーんと沈黙が落ちる。星砂は冷静になって自分の置かれた状況を改めて考える。こんな見ず知らずのわたしに、どうしてこの人たちこんなに親切にしてくれるんだろう、赤の他人なのに。こんな大都会、東京のどまん中、新宿で……。夢でも見ている気がしてならない、まだ眠りの中を彷徨っているような。

田古はまだ背中向け、もたもたと後片付けの最中。たこのおっちゃん、この人一体どんな人なんだろう。ちょうど片付けを終え振り向いた田古と目が合って、にこっと笑って田古が話し掛ける。

「なんだかね、やっぱり、眠るといいよ」

「えっ」

「嫌な事は忘れるのが一番、忘れるなら寝るのが一番なのさ。実際、寝る子は育つっていうよ」

「あ、はい」

素直に頷く星砂。

田古に言われるまでもなく、今の星砂は兎に角眠りたい。死んだように眠り、すべてを忘れたい。パンドラでの半年間は正に悪夢だった、そして八月六日あのパンドラの夜のトラウマ。

「それじゃ、もう少し寝ます」

すると「OK」

「えっ」

再びOKサインでにこっとウィンクする田古、でももう星砂は驚かない。

田古の勧める布団を断り、ゴロンと畳の上に横になる星砂。真夏だからこれで充分、暑さも忘れ直ぐに眠りに落ちてゆく。その隣りでどしっと畳に腰を下ろし、田古は何するでもなくぼけっと柱に凭れている。いつもならラジオを聴くところ今は眠る星砂に遠慮して、その星砂の寝顔を眺めていると、それだけで充分楽しくていつまで見ても飽きないから不思議。

改めて我が部屋を見渡せば、余りにも殺風景。自分ひとりならこれで構わぬが、いつまでかは定かでないけれど仮にも若い娘が暮らすとなれば、もっと華が欲しい。何かないかとため息の田古。うーん、そうだ、華だから花にしよう。台所の奥から大きな透明のコップを取り出し、水を注ぐ。これで花瓶の準備はOK、さて何が良いか。

窓を開け隣近所を見回せば、有る有るお隣りさんの庭に向日葵の花。八月の太陽の下、風にそよそよ揺れているではないか。ごくり、生唾を呑み込んで武者震い。何で武者震い、そりゃあなた、勿論泥棒猫の花泥棒とござい。こそこそ忍び足、お隣りさんの庭に忍び込み、賑やかに咲いている中から一本、いやちと寂しいからせめて二、三本拝借というかパクリ。しめしめ成功、良い子は決して真似しちゃいけません悪しからず。とっとと部屋に戻ると、コップに挿してお見事、向日葵の三輪挿しの出来上がり、じゃーん。しばしひとりであつと見入っている田古である。

昼である。陽が強く射し込み、扇風機だけではとても追っ付かない。加えて窓は磨りガラス故、不要とばかりにカーテンはなし。はあ、室温はどんどん上昇、遂に、あつちーっと汗だらだらで目を覚ます星砂。

ぼーっとした頭で見回すと、例のマイメロディのテーブルの上に素麺、ふたり分。但し洒落た透明なガラス容器もなく、氷もなし。っていうかそもそも部屋には冷蔵庫がない、ま、いいか。だから入れ物として朝食時の茶碗と丼が兼用され、お汁はペットボトルに入った使い切りタイプ。

「なんだかね、やっぱり、食べないかい」

誘う田古に、うんと頷く星砂。食欲のない星砂には有難いメニュー。

ずるずるずると、ふたりの素麺をすする音が部屋に響く。他には扇風機の唸る音、朝から頑張ってくれている、いやもしかすると昨夜からずっとかも。扇風機の風力は弱、中、強の三段階。朝には弱だったのが、現在既に強のレベル。しかし音がうるさくなっただけで、暑さが和らがないのは気のせいかな。他には蟬の声、近所、通行人のお喋り、足音、ノイズも朝方と変わらない。チリンチリンと自転車の音がすれば、自動車のクラクション、それから急ブレーキ。青葉荘の前にしゃがんで休憩でもしているのか、さっきからふたりの老婆の会話が止まないでいる。お暑いですねえ。ええ、もう毎日大変。うちのおとっちゃんなんかパンツ一丁、恥ずかしかったらありゃしない。うちもおんなじ、男はそれでいいから羨ましいこと、おほほほほ。

そう言えば星砂に遠慮してか、田古は律儀にTシャツとバミューダパンツ。ふと星砂、窓を開け外の景色を見てみたいと願う。出来たら今自分がいるこの場所の風景、どんな町なのか、どんな人がいるのかを確かめ、この空間の空気を思い切り吸い込みたい、思いつき切り……。だけどやっぱりまだ駄目、八月六日あのパンドラの夜が甦り、星砂の心は貝のように閉じてゆく。だって、まだ怖い、まだわたし、人が、東京が、この世界のすべてが……。星砂の箸が止まる。

驚いて顔を上げる田古。ぶるぶる今にも泣き出しそうな星砂にけれど何もして上げられないと分かっているから、ただじっと唇を噛み締める。

「なんだかね、やっぱり……」

固まったまま、思い詰めたように畳を見下ろす星砂。

「ぼくなんか来月検査行くから、一緒に行かないかい」

「検査」

はっとする星砂、検査って……妊娠と病気、そうだった。恐る恐る微笑み掛ける田古。でも、ちゃんとしとかなきゃね、こればかりはやっぱり……。うんと頷く星砂、その瞬間堪えていた涙が溢れて来て、ぽたっと素麺の汁の上に落ちる、ぽたりと落ちる。

「You Are So Beautiful……」

唄い出す田古に、えっと顔を上げ田古を見詰める星砂。短い歌がやがて終わると、

「なんだかね、やっぱり、食べたらまた、おやすみ。寝る子は育つって」

うんと頷く星砂。

「歌は好きかい」

「えっ」

でも星砂、直ぐにううんとかぶりを振り、悲しげに俯く。本当は好き、大好きなのに、本当はわたしも唄いたいの、大好きなあの歌、Memory……。けれどただ星砂は唇を噛み締めるだけ。

再び横になる星砂。暑くて寝付けないけど、目を閉じているだけでも有難い。それに田古がさっき唄ったあの歌のことが、気になって仕方がない。どうしてたこさん、あの歌を知っているんだろう、そしてどうしてわたしに唄ってくれたのだろう。部屋の中ではただ扇風機が、田古と星砂の間を行ったり来たりしている。

夕方。蝉の声を掻き消して、夕立が首都圏を襲う。激しい雨音が窓ガラスを叩く。いつしか午睡を漂っていた星砂がはっと目を覚ますと、部屋の中は薄暗い。見ると、柱に寄り掛かって田古もよだれ垂らしながら眠っている。頼りないボディガードさん……。この時とばかり、じっと田古の寝顔を観察する。つつい笑っちゃう、その姿は丸で大きな図体の子供である。

無邪気なガキ大将を思わせる風貌、日焼けした彫りの深い顔、太い二本の眉毛は鼻の上の部分までも何故か毛深くて今にも一本につながってしまいそうだし、まっ直ぐに伸びた一重瞼は水平線を思わせ、鼻は小高い丘のようであり、絶えず五月の風に吹かれているような爽やかさ。あれっ、でも何となく見覚えがあるようなないような。ってどきっ、確かに似てる。誰に、わ、た、し、に。まさか、でも、どういうこと。どきどき、どきどき……。

むにゃむにゃむにゃ、そこへがぱっと目を覚ます田古。同時に空から、どどどどーんと雷が鳴る。加えてぴかーっと稲光。きゃーっ、夢中で田古に飛び付く星砂。ところが田古は、はっはっはっはっはーと豪快に笑い出す。

「なんだかね、やっぱり、平気、平気。雷さんは良い子には落ちないってよ」

良い子、また子供扱い。でも確かに親子程年が違う訳だし、仕方ないか。親子程、親子……。

はっはっはっはっはーっ、ぼんぼんぼんと星砂の肩を叩いて大喜びの田古。たこさんって、やっぱりちょっと変わった人。喋り方とか口癖とか変な感じだし、でもその癖わたしのことお見通しみたいなところあるし。でも、どきどき、どきどきっ……。このままたこさんの胸にしがみ付いていたい気もする。なぜだろう、妙にあったかい、いつまでもこのままで……。

夕立が嘘のように止み、いつしか夜の帳が新宿の街に降りる、東京は夜を迎える。星

砂は田古の胸から離れ、田古は部屋の灯りを点ける。

「なんだかね、やっぱり、晩御飯はまだ大丈夫かい」

うん、と頷く星砂。すると、

「やすおさんが持って来てくれるんだよ」

へえ、そうなんだ、そう言えばすっかりやすおのことを忘れていたことに気付く星砂。

夜である。とんとんとん、突如青葉荘のドアを叩く音がして、見る見る星砂の顔が青ざめ、恐怖におののく。たこさん、わたし、恐い……、息を呑み、縋り付くようにじっと田古を見詰める星砂。田古は、うんと頷きドアの前に立つ。念の為ドアスコープから覗き相手を確認、よしと頷いてドアを開ける。するとそこには、ピエロの着ぐるみを身にまとったひとりの人物が立っている、男か女かも定かでない。この人物こそ誰だろう、我らが着ぐるみマン、その人である。

ええっ、何この人。吃驚の星砂を尻目に、着ぐるみマンを招き入れる田古。履いてるブーツをよいこらしよと脱ぎ、部屋に上がると星砂の前に。

「なんだかね、やっぱり、こちら着ぐるみマンさん」

田古が星砂に紹介。着ぐるみマン、何それ。でも愛想良く星砂。

「あっ、初めまして」と挨拶。

なのに相手は無言、黙って頷くだけ。これが星砂と着ぐるみマンの出会いである。

「じゃ、なんだかね、やっぱり、ぼく、バイト行くんだ」と田古。

ええっ、そんな。ずっと一緒にいてくれるものとばかり思っていた星砂は、急に込み上げて来る寂しさを幼子のように抑え難い。でも田古はさっさと部屋を出てゆき、後には着ぐるみマンとふたり切り。

戸惑いの星砂にはお構いなし、部屋の隅にぺたっと座り込む着ぐるみマン。マンと言うからには男には違いない。それにしても暑くないのか、失礼とは思いながらもついじろじろと着ぐるみマンから目が離せない星砂。それでは流石の着ぐるみマンも落ち着かない。

そこで着ぐるみマン、お腹のポケットから何やら取り出すと、それはメモ帳とボールペン。さらさらさらっと何か書き込み、それを星砂に見せる。何々、そこには、

『おいらは着ぐるみマン、よろしくだな』

とは丸で女子高生の丸文字である。あっそうか、もしかして口が利けないのかも、この人じゃない着ぐるみマンさん。そう思う星砂に、その気持ちを察したかの如く大きくかぶりを振ると、着ぐるみマンまた一筆。

『この方が何かと、都合がいいんだな』

成る程、都合の都の文字の大きさが他の倍あるのが笑える。そこで星砂、渡されたメモ帳に、

『こちらこそ、よろしくお願ひします』

と丁寧な返事、その文字はけれど悲しい程に細く筆者の神経質さが窺われてならない。

気付いたら着ぐるみマンは居眠り、大きな頭がこっくりこっくり揺れている。だから釣られて星砂もうとうと、うとうと……。部屋の中はやっぱり扇風機の音だけ。それから蝉の声、隣近所のノイズが、現実と夢の間で切れ切れに木霊するばかり。

とんとんとんと再び部屋のドアをノックする音がして、はっとして目を覚ます星砂と

着ぐるみマン。やっぱり怯える星砂、けれど着ぐるみマンの方はびくっと体を揺らし、呑気に大欠伸。どっころしょ、のろのろと体を起こすのに時間を費やしていると、ドアの向こうからせつかな声で「俺、俺」とは、聴き覚えのあるやすおの声である。

着ぐるみマンが内鍵を開け、やすおを入れる。

「ん、じゃ交替な。ご苦労さん」

やすおに言われ、星砂に手を振り、さようなら、また明日と、そそくさと部屋を出てゆく着ぐるみマン。あれえ、もう行っちゃうの。またまた寂しさの塊りと化す星砂、でも気を取り直し手を振り返して、さようなら、有難う。

でも交替って、そうか、と星砂ははっとする。もしかしてみんな、たこさんとやすおさんと着ぐるみマンさんの三人が交代番子で自分をボディガードしてくれているのかも知れない、それだけでまた目がうるうるの星砂。如何にも百均で買いました的な柱時計を見ると、午後九時。もうそんな時刻なのか、とまたため息。

「腹減ってっだろ。晚饭買って来たから、食お食お」

何かと思えば、スーパーのレジ袋から取り出したるは唐揚げ弁当と焼き魚弁当。

「どっちがいい」

にこにこ顔で問うやすお。弁当をマイメロディのテーブルに並べ、

「じゃお茶入れます」と星砂。でも「勝手に使って大丈夫かな」と疑問符。

「平気、平気。そんなん、おっちゃん、ちっとも気にしねから」

やすおの返事に「うん」そうだねと頷き、お湯を沸かす星砂。今夜はやすおが焼き魚弁当で、星砂が唐揚げ弁当にあり付く。

むしゃむしゃ、むしゃっと美味そうにぱくつくやすおが羨ましくてならない。その隣りでもぐもぐもぐっと大人しく頬張る星砂。冷えた御飯でも美味、こんなことだけでもまた涙が溢れ出しそう。食後の爪楊枝を使いながら、やすお。

「明日は何がいい。リクエストあったら言ってよ、遠慮いらねし」

「はい」

「おっちゃん十二時まで帰んねえから」

「そんなに遅くまで」

「ああ、先寝ててもいいから」

はいと頷きながら星砂。

「たこさん、何やられてるんですか、バイト」

「ああ、昼間は工事現場だけど、今は俺と交替で看板持ち」

「看板持ち」

あ、やっべえと口ごもるやすお、そりゃそうだ、エデンの東はパンドラと同業者、そんな店の看板持ちなんて話ししたら、この子また嫌なこと思い出しまうじゃねえか、ほんとあほな俺。

でも意外に星砂はあっけらかんと、

「なんか面白そう」

「そうか」

今新宿ネオン街の人通りのまん中で、黙々とひとり看板持って突っ立っている田古の姿を思い浮かべる星砂。思いは、やすおと出会ったあの夜へと帰ってゆく。新宿ネオン

町三丁目の通りで、ギター爪弾き唄っていたやすお、しかも大好きな Memory……。

「やすおさん、いつも、あそこで唄ってるんですか」

「あ、ああ、そうとも。それが俺のライフワークだかんな」

ライフワーク、唄うことが……、やすおが神々しくてならない。

「歌は好きかい」

行き成り問うやすお。えっ、また、たこさんと同じ質問。思い切って今夜はうんと頷こうとしたけれど、やっぱり駄目。星砂の目には涙すら滲んでいる。

「あっ、御免。気にすんなよ、な」

沈黙が落ちる。

「ラジオでも聴きますか」と星砂。

ところが「おっちゃん持ってってるから、ラジオ」

あっ、そうなんだ。また新宿ネオン街の人通りの中、看板持った田古の姿が浮かんで来る。

「寝れば」とやすお。うん、そうすると頷き、星砂は畳の上にごろんと横になる。目を閉じれば、やっぱり聴こえて来る隣近所のノイズ。新宿、大都会、東京の、星砂が憧れた東京のノイズが絶えることなく……。

とんとんととドアが叩かれるより先に、田古の気配に気付いたやすおが、そっとドアを開ける。既に星砂は眠りの中、部屋は電気も消えてまっ暗。やすおの言った通り、柱時計の針はもう既に午前零時を回っている。流石にもう隣近所もしーんと静寂、時折り聴こえるのは足音か、酔っ払いの声。部屋の中は扇風機の唸り声、でも余りに常態化し過ぎて最早空気の一部である。実はドアの音で目が覚めた星砂、田古に挨拶すべきか迷ったけれど結局そのまま狸寝入り。いつしか再び寝入って、やすおがいつ部屋を出て行ったかさえ定かでない。

帰宅した田古は手に大きなレジ袋。何かと思えば、やすおと看板持ちを交替する前スーパーに寄って購入しておいた生活必需品、消耗品、それから薬局の女店員に選んでもらった生理用品などである。レジ袋を台所の隅にそっと置くと下着一丁になり、水道の蛇口を捻って音も立てず顔を洗う田古。後は星砂の寝顔を覗き込むでもなく、ただ何事もなかったように畳に寝転がる。やがてその呼吸も寝息へと変わり、このまま何事もなく無事朝まで扇風機だけが唸り続けると思いきや……。

真夏の夜の悪夢が、無情にも星砂に襲い掛かる、あの八月六日パンドラの夜の記憶が夢の中で星砂に立ちほだかる。どっしりと黒い男の影が、横たわる星砂の体に乗る石のように動かない。幾らもがけどもがけど押さえ付けられたまま、逃げられず金縛り。どいて、誰か助けて、たこさーん。

はっと飛び起きる星砂、体中汗びっしょり。時刻はまだ真夜中、丑三つ時。星砂の悲鳴で田古も目を覚ます。田古だけならまだしも、安アパート故悲鳴は筒抜け。うっせーぞ、何時だと思ってやがんだ、こんにゃろと隣りの部屋の住人がぼしぼしとスリッパで壁を叩けば、上階からもどんどんどんと床を叩く音が響く。

しかしそんなクレームも長くは続かない。青葉荘はやがてまた都会の真夜中の静寂へと沈没し、しーん。じっとこの時を待っていた田古は起き上がり、灯りは消したまま星砂の隣りへ。ごつごつした田古の指が星砂の頬の涙を拭う、なんだかね、やっぱりと囁

きながら。それから星砂の耳元に、そっと唄い掛ける。

「You Are So Beautiful……」

暗闇の中でしゃくり上げながら、田古を見詰める星砂。唄いながら頷き、微笑み掛ける田古。お休み、寝る子は育つっていうよ。うん……。

目を瞑る星砂、眠るように、夢見るように。田古の歌の向こうに、海の音が聴こえる。夢国島の夜の海辺の景色が広がり、星砂はまだ生まれたばかりの赤ん坊。赤ん坊の星砂をひとりの男が抱き締めている、それはそれは大事そうに。男は星砂に唄い掛ける、You Are So Beautiful……。おとうさん、わたしのおとうさん……。

恐る恐る目を開くと、そこには田古。磨りガラスの窓から差し込む街灯の僅かな光の中で、その時星砂が目にしたものは、星砂にも負けない位目に一杯の涙を浮かべた、田古の泣き顔である。

(三・二) 九月、ひなぎくのジェーン

(三・二) 九月、ひなぎくのジェーン

いつしか真夏の日々は流れて去って、気付けば九月。星砂と田古の微妙な共同生活も二ヶ月目。その後、心配したパンドラからの接触はなく、田古たちの心配は主に星砂の心の有り様へと移行する。

星砂が寝ている間枕元で、田古とやすおと着ぐるみマンがどうしたもんかとひそひそ話し合う。

「なあ病院連れてった方が良かねえか、おっちゃん」

けれど田古はかぶりを振って、

「心は薬じゃ治らないっていうよ」

着ぐるみマンも頷きながら、メモ帳で、

『心は心でなおすしか、ないんだな。だから、心なんだな』

「ん、訳分かんねけど。ま、そうかもな」

とやすおも頷き、やっぱりこのまま三人でじっと見守ってゆくことに。

まだひとり切りにするのは不安、よって引き続き田古は昼間のバイトを休んで星砂に寄り添う。その星砂は一日中青葉荘の部屋の中において、大半をごろんと横になって過ごしている。恐怖と不安によって今にも心が押し潰されそうで何もする気になれず、体を動かすのも億劫。なれどそれでも生きていねばならず、持て余した心と体を抱え、仕方なしごろんとしているといった具合。

肉体的な疲れは徐々に取れて、体調は回復傾向にあり、問題は心。田古、やすお、着ぐるみマン三人のやさしさに何とか応えたいと願えど、やっぱり駄目。どうしても恐れ。起きている間は聴き慣れない物音、足音、話し声に怯え、静けさに怯え、眠ろうとすると悪夢の予感に怯える。また恐い夢を見るのではないか、そして実際夢の中で八月六日パンドラの夜へと引きずり戻され、真夜中の悲鳴へと至るのである。その度に隣近所のクレームに耐えながら、田古は星砂の汗と涙を拭いてやり、星砂の手をぎゅっと痛い程に握り締めながら、そっと耳元で唄い掛ける。そっと「You Are So Beautiful……」

一晩中、再び星砂が眠りに就くまで。そんなことの繰り返しだった、ふたりの夜。

お陰で夜は充分に眠れず、だらしなく昼近くまで寝ているふたり。当然隣近所から良く思われる筈がない。深夜の星砂の悲鳴も、どうせ変態プレイかなんかだろ、それとも拉致監禁か、親子ほど年も違うっぽいし、あの変態おやじこんな貧乏アパートに若い女連れ込んでんじゃねえよ、まったく何考えてんだ、このタコ、となる。けれどそんなことは一切気にしないタコ否、田古である。

朝、というか目覚めた時には昼だった、そんな毎日の星砂と田古。目覚めればまだ残暑、よって蒸し暑い。扇風機の風を頼りに起き上がり、田古は汗を拭いながら台所で朝

食兼昼飯の仕度。マイメロディのテーブルに御飯、味噌汁、漬物、それから素麺。時折り野菜サラダが登場したり、卵かけ御飯だったり。相変わらず質素&ヘルシーメニューである。

「なんだかね、やっぱり、出来たよ、食べないかい」

星砂を起こす。んと頷く星砂はすっかり痩せて痛々しい。見上げれば、台所の花瓶代わりのコップにはコスモス。お彼岸の頃にはそれが彼岸花へと変わり、いずれも星砂の心を慰める。と言っても夢の丘公園からかっばらって来たのだが、星砂には勿論内緒。

ラジオを聴く、お彼岸の午後である。星砂が聴いているかどうかは定かでないが、少なくとも眠りの邪魔にはなっていないらしい。ニュースでは、いじめを苦しめた女子中学生が自殺したと告げている。磨りガラスの窓から入る日差しも今は、心なし柔らかい。蝉の声もすっかり途絶え、残暑から抜け出した街はもう秋の気配。

ニュース、天気予報の後、ラジオから流れて来た曲は、Americaの唄う、ひなぎくのジェーン。秋の憂愁にお似合いのしっとり切ないラヴソングであり、やすおのレパトリーの一部でもある。田古も知っているのか口遊み、何となくロンリー気分になっている。それが可笑しくて、知らない曲ではあるけれど星砂も釣られて思わずハミング……。かと思ったけれどやっぱり黙り込む、ただ唄う田古の横顔を眩しそうに見詰めながら。目と目が合って、照れ臭そうに笑い掛ける田古。

曲が終わると、ラジオをOFF。静寂、蝉の声もない。あんなに夏の間鳴いていた蝉たちは一体何処へ行ってしまったのか、不思議な気がしてならない星砂。なのに自分はこうして不完全燃焼のままここにいて、一体何をしているというのだろう、情けなさで一杯になる。

「なんだかね、やっぱり、そうだ明日、ぼくなんか検査行くんだ」

突然の田古の言葉。検査、びくっとする星砂。

「きみも一緒に行かないかい、暑さ寒さも彼岸までっていうよ」

そうだった。すっかり忘れていたけど、あれからもうひと月以上経過していたのだ、あの悪夢の八月六日パンドラの夜……。今はまだ外になんか出れない、外の世界が怖い。でも……愚図愚図してらんない、もし取り返しのつかないことになっていたら、そしたらたこさんにも迷惑が掛かる……。緊張が高まり、冷や汗と共に震え出す星砂。その手を握り締め、

「ぼくも一緒に行くから」

じっと星砂を見詰める田古に、泣きそうな顔でうんと頷く。

翌朝、ふたりは病院へ。でもまず第一の関門は部屋を出ること。田古が青葉荘の部屋のドアを開けると、そこには果てしない外の世界が広がっている。どきどき、どきどき……久しく出てゆくことのなかった世界が、今星砂の目の前に。眩しい秋の日差し、風が誘うように頬を撫でる。ごくん、生唾を呑み込み、思い切って飛び出す星砂。表で待っていた田古が、OKサインとウィンクで迎える。

田古の手に引かれ歩く星砂。でも折角外に出たというのに終始俯いたまま、周囲に目を向ける余裕もない。このひと月以上の間、ずっと部屋の内側から聴いていたすべての音が、今ストレートに耳に響いて来る。人々の声、会話、笑い声、足音、自転車のチリーンチリーン、車のクラクション、その他ノイズまたノイズ……。

流石東京新宿、どれ程歩いたか知れぬ間に既に病院の前。見上げると看板に『海亀病院 性病科』の文字。星砂に向かって頷く田古、心細げに頷き返す星砂。あらかじめ用意しておいた青葉荘の住所を記したメモ用紙を星砂に渡すと、病院のドアを開けふたり揃って中に入る。

数人の客が待っている、みな俯きがち。受付で検査を受けたい旨を田古が伝える。

「なんだかね、やっぱり、そう、この子とぼく」

順番が来て、田古と星砂と別々の部屋に呼ばれ検査開始、血液を取られ、うーっ、いてえ。結果は一週間後、但しH I V検査だけは性交渉後三ヶ月の経過が必要とのことで、また日を改めてとなる。

ふたり分の検査費用を払い、海亀病院を出ると、

「なんだかね、やっぱり、疲れたかい。残りはまた明日でもいいんだよ」と田古。

残りとは妊娠検査、でも星砂はかぶりを振る。折角ここまで来たんだし、嫌なことはとっとと済ませたい、それに結果も早く知りたい。

それではと、直ぐ目と鼻の先にある『珊瑚病院 産婦人科』の門を叩く。一緒に入ろうとする田古に、

「ひとりでいけるから」と星砂。

えっと吃驚しつつも田古は黙って頷き、表で待っていることに。田古の財布を受け取ると、星砂はひとりで病院の中へ、どきどき、どきどきっ……。中は女の客ばかり、田古を連れて来なくて良かったと星砂は胸を撫で下ろす。

いよいよ検査。検査中は辛い場面もあり、泣きたくなるのを必死で堪え星砂は耐える。結果、妊娠しておらず。良かったーっ心と心の底から大きなため息、と同時にぼろぼろと安堵の涙が頬を伝う。田古の財布から料金を支払うと、檻から解放された小鳥のように表へ飛び出す。早くたこさんに、結果を教えたい。

入り口の脇で待っていた田古を見付けるや、星砂は田古を真似してOKサインとウィンク。えっ、またまた吃驚しながらも田古も調子に乗って、ふたり揃ってOKサインとウィンク。ぼんぼんぼんぼん星砂の肩を叩き、歓喜に浸る田古である。

一週間後の午後、再度ふたり揃って海亀病院を訪ねると、検査結果はふたりとも異常なし。やったーっ、この時ばかりは星砂も忘れていた笑顔を滲ませ、田古と手に手を取って喜びを噛み締める。

「なんだかね、やっぱり、良かった良かった」

と青葉荘へ帰る道すがら、田古は星砂に何かご褒美を上げたくて仕方がない。

「折角だから何か好きなものでも買うかい。金は天下の回り物っていうよ」

お小遣いを渡そうとする田古に、しかしかぶりを振って遠慮する星砂。

ところがその時、星砂ははっと思ひ出す、母、美砂のことを。あっ、そうだ……。そう言えば全然電話してなかったよ、それに仕送りも。やっばい、みんな絶対心配してる、愚図愚図してる場合じゃないよ、さっさと電話しなきゃ。そこで星砂は思い直し、ここは田古の好意に甘えることに。

早速目に付いたコンビニ、サンクスファミリー略してサンファミ『新宿夢の丘公園前店』に飛び込む星砂。名前からして夢の丘公園の目の前にあるその店で、テレカを購入することに。これが星砂にとっては実に久しぶりの買い物、緊張したけどレジのおばさ

んが愛想の良いお人好しふう親切丁寧、お陰で千円のテレカ二枚を無事購入。サンファミを出ると星砂は田古のこともつい忘れ、夢の丘公園内にある公衆電話ボックスへダッシュ。

受話器を上げ、テレカを挿入、ちゃんと覚えていた夢国島の電話番号をプッシュ、呼び出し音……、ガチャ。慌てて喋る星砂。

「あっ、もしもし、わたし」

されど相手はしばし沈黙……。その後「星砂」と恐る恐る母美砂の声。

「うん、わたし」

答える星砂。すると、

「やだ、どうしてたのよ、あんた、もう……」

感極まって、声を詰まらせる美砂である。そりゃそうだ、何しろ半年以上音沙汰なしだった星砂からの突然の電話。その間、これじゃ父の洸鎌とおんなじだよ、あの子まで行方不明って。まったくふたりして人生まで似てんだから、流石父娘と呆れるやら、心配やらで、どうすりゃいいかと夜も眠れずにいた美砂なのだから。

一方星砂の方も受話器を握り締め、母に釣られてどっと号泣。心配した田古がボックスの外からじっと覗き込む程。

「御免、お母さん」

「何してたのよ、今迄。ずっと心配してたのよ」

「うん、ちょっと……」

パンドラのことなんて絶対に言えない、田古の世話になっていることも今はまだ。余計な心配はさせたくない。

「ずっと仕事が忙しくて」

「本当」

「うん。御免ね、仕送りも出来なくて」

「そんなこといいのよ、それよか本当に大丈夫なの、あんた。そんなに大変だったら、ねえ」

「うん」

「こっち、帰って来てもいいのよ」

帰って……。心揺れ動く星砂。そうだ、このまま島に帰っちゃお、嫌なことみんな忘れて。一旦はそう思い、けれど直ぐに思い直す。だって今のままじゃ絶対帰れない、だって、甦る八月六日パンドラの夜の記憶……。

「ううん、大丈夫。何とかやってるから」

「そーお……ならいいけど」

「そっちは、みんな元気」

「元気よ。こっちのことは何にも心配しなくていいから」

「うん、じゃ良かった……まだちょっとお金なくて」

「だからいいのよ、仕送りなんか気にしなくて」

「うん、ほんと御免ね」

「あんたこそほんとに平気なの」

「平気、平気だって、ほんとに。じゃまた電話するから」

「うん、じゃ。でもほんと良かった無事で」

「うん、じゃね」ガチャン。

公衆電話ボックスを飛び出すと、今度は公園のベンチで待っていた田古に抱き付く星砂。

「有難う」

「なんだかね、やっぱり」

星砂の肩をぼんぼんと叩きながら、ま、兎に角良かったと胸を撫で下ろす田古。これが立ち直るいいきっかけになってくれればと思いつつ。見上げると空はもう夕映え、空中を泳ぐように赤とんぼがスイスイと飛び回る。田古と星砂の回りを飛んでいる。

夜が訪れ、青葉荘の部屋には例によって着ぐるみマンがやって来る。田古はネオン街の看板持ちのバイトへ。着ぐるみマンとの時間はいつも静か、会話はみんなメモ帳とボールペンだし、そもそもこれといって話すこともない。着ぐるみマンは畳にどかっと座ってぼけっと欠伸しているか、もしくは黙々とメモ帳に向かって夢中で何かを綴っている。そんな様子をただ見ているだけで、心和む星砂。でも田古が出ていった後、直ぐにやすおがやって来るから、着ぐるみマンとの時間は極僅かである。

そのやすおが青葉荘にやって来たら、夕食の時間。着ぐるみマンはさっさと、じゃあ、まただなど手を振って立ち去る。一緒に食べようよと誘っても、いいからいいからと奥床しい着ぐるみマン。さて夕食、ずっとやすおが買って来る、と言っても代金は田古持ち、スーパーのお弁当だったけど、勿体無いからと御飯だけは星砂が炊くようになった。やすおはおかずを買って来るだけ。

やすおも実は基本無口な男、唄うことだけが人生のすべてである。本当はギター爪弾き唄いたいけど、夜の青葉荘の部屋の中でやる訳にもいかない。ちょっと小声で鼻唄を口遊む程度。そんなやすおが今夜口遊んだのが、ひなぎくのジェーン。以前聴いたのを思い出し、星砂がぼそっと、

「その曲、この前ラジオで……」

へえ、歌興味なかったんじゃないかねえの、ま、いいか。

「いい曲だろ、気に入った」

すると星砂は俯いたまま「はい」

なーんだ、やっぱこの子歌好きなんじゃないよ。

「なら、教えてあげよか」

えっ、戸惑う星砂、でもこわごわ、うんと頷く。ほら、ほんとは歌好きな癖に、ったく。可笑しくてならないやすおはくすくす笑いたいのを堪えながら、英語の歌詞をメモ用紙に書いて星砂に渡す。

「いいかい」

ゆっくりと、唄って聴かせるやすお。

覚えの良い星砂は直ぐにやすおの声に合わせて唄い出し、気付いたらふたりでデュエット。

「上手いじゃん、やるね」

とやすおは吃驚。アパートだから大きな声では唄えないけど、それでも星砂は嬉しくてならない。

「まじ、ふたりで組んで唄おうぜ」

「無理ですよ」

頬を真っ赤にしてかぶりを振りながら、やすおがくれた歌詞のメモを大切ににとっておく星砂である。

田古が看板持ちのバイトから帰って来るのは決まって真夜中。午前零時を回っているから、星砂はいつも眠っているか眠った振りをしている。やすおはそっと部屋を去り、田古はちょちょこっと水道で顔を洗うと、直ぐに畳の上にごろん。九月も下旬になると十分に涼しく、パジャマは長袖にしたし、毛布も欲しいところ。田古は新しい毛布を星砂に買い与え、自分は古いのに包まって満足げ。

夜明け前、星砂がパンドラの夢にうなされはっと目を覚ますと、いつも虫の音と田古の寝息が聴こえ、時折り激しく降る雨の音もしていた。

(三·三) 十月、Jesse

(三・三) 十月、Jesse

少しずつ秋も深まり十月、夏の間あんなにお世話になった扇風機も、いつのまにか押し入れの隅で今は大人しくしている。田古との暮らしも三ヶ月目、肉体的にはもう疲労は取れ、心配していた妊娠、性病の不安もなくなったことから精神的にも落ち着いて来る星砂。とは言ってもまだあの八月六日パンドラの夜の傷は残っており、外に出たり、人と接するのはまだまだ怖い。特に強面の男や、意地悪そうなおばさん、関西弁も駄目。直ぐに烏賊川たちを思い出し、拒絶反応と共に恐怖の為全身が震え出してしまふ。頻度こそ低くなったものの、まだ悪夢にもうなされる。

従って引き続きまだ日中のバイトをお休みして星砂を見守る田古。星砂にとって田古はまったくの赤の他人、と星砂は信じている、であり、しかもおっさん。ずっと部屋にふたり切りでいれば、息苦しさやもしかしたら襲われるんじゃないかなんて恐怖感も覚えそうなものであるが、至って平気。丸で空気のように一緒にいて違和感がないし、硬くなったり緊張したりもない。それどころかほんわかとやさしくて、更には切なさを覚えたり胸が痛んだり。あれーっ、まさかこんなおっさんに恋するなんて有り得ない筈だけど……と、ちょっと心配な位の星砂である。

それでも流石に三ヶ月目ともなれば、疑問も禁じ得ない。やすお、着ぐるみマン、そして部屋を提供し金銭面でも無償にて援助してくれる田古。なぜ彼らはそんなに自分なんかの為に親身になってくれるのか。確かに大都会東京に出て来た田舎娘、近くに身寄りなどないし、烏賊川たちに騙され有り金全部むしり取られて無一文ともなれば、誰しも多少は同情してくれるもの。でも赤の他人なのだから、そんな善意も精々一ヶ月位が限度ではないか。普通なら体調を取り戻した時点で、もういいんじゃない、とっとと出てってよ、となる筈。なのに何も言わずただ当たり前のように援助を続けてくれる田古、その見返りに星砂の体を求めて来ることもないし、女中代わりにこき使うこともない。役人でもなければボランティアでもないのに、なぜだろう。でも幾ら考えても分からない。ただ純粋にいい人たちだからと思う以外には……。

朝、そんな星砂の気持ちを知ってか知らずでか、田古は陽気に笑って、
「なんだかね、やっぱり、どう、調子良さそうかい。もし宛てが有るんなら、遠慮せず出ていってもいいんじゃない、こんなとこ。かわいい子には旅をさせろっていうよ」

それを聴いて吃驚、えっと田古を見詰める星砂。

台所にはコップに挿した可憐なデンファレが。流石に夢の丘公園にもご近所の庭にもない、珍しく花屋さんで買って来た花である。マイメロディのテーブルには相変わらず質素に御飯と味噌汁。ラジオからはニュース、幼い頃星砂も憧れた元アイドル歌手が覚醒剤を使ったとか使わなかったとかで逮捕されたと伝えている。

味噌汁の中の具は豆腐と葱。田古の適当な切り方のせいで、豆腐の大きさはばらばら、葱だってばらばら。思わず吹き出す星砂、でも味は煮干しの出汁で最高。吸っているうち涙が出そうになる。わたし宛てなんか何処にもない、島に帰るにしたって旅費ないし、どうしよう。今にも泣き出しそうな星砂に、

「なんだかね、やっぱり、冗談、冗談。こんなところで良けりゃ、好きなだけいていいのさ」と笑う田古。

ニュースが終わるとラジオからは音楽が流れて来る。Janis I anの Jesse。スローバラードに朝食の箸を止め、うっとり耳を傾ける田古、ついでに唄い出す。この曲もまたやすおのレパートリーである。

午後、久し振りに部屋から飛び出し、夢の丘公園まで歩くふたり。街はもうすっかり秋の彩り、そこいら中落葉、枯れ葉が舞っている。星砂は公園内の公衆電話ボックスに入って、島の美砂に電話を掛ける。

「もしもし、わたし……うん、元気してるよ、だから大丈夫……」

電話の向こうからは、幽かに海の音が聴こえる気がしてならない。今はもうすっかり秋、人影のない午後の海辺にただ波だけが打ち寄せる。ただ波音だけが、絶えることなくいつまでも、いつまでも……。ふと星砂は思う、たこさんにもこの海を聴かせて上げたいと。電話ボックスの外、秋風に吹かれながらベンチに腰掛ける田古を呼び込み、受話器を渡して。お母さん、今この人の世話になってるから、大丈夫なんだよって、田古のことを美砂に紹介してしまいたい程の星砂である。そんなこと、出来る筈もないと分かっているけれど。

「じゃ、また……うん、電話するから」

ガチャン。受話器を置いて電話ボックスを出ると、田古が手を振っている。落葉と枯れ葉と西日の中で、笑っている田古。

夜、着ぐるみマンがやって来る、田古はバイトへ。毎晩顔を合わせて三ヶ月目ともなれば、メモ帳でのやり取りとはいえ、着ぐるみマンのこともそれなりに分かって来る。

『生まれは青森だな。青森の雪別離という寂れた港町なんだな。訳あって逃げるように、こっちに流れきてもう十一年。今は夢の丘公園で細々と暮らしているだな』

えっ、夢の丘公園で暮らしている、どきっ。そうだったんだ、やっぱり……。ショックではあるけれど、薄々そんな気もしていた星砂である。ではやすおさんも。着ぐるみマンはメモ帳を続ける。

『その方が気楽でいいだな』

着ぐるみの恰好をしているのにも、それなりの訳はあるようだが、多くは語らない着ぐるみマン。

『新宿駅前の木馬百貨店の屋上で、アンパンマンショーのバイトをやっているだな。毎週日曜日、よかったら見に来るだな』

あっ、バイト。やっぱりみんな働いているんだ。うん、行くと頷く星砂。

『夢の丘公園で暮らしていると、日常の移り変わりを敏感に肌で感じるだな』

うん。

『四季の変化、一日の変化、何かがみんな少しずつ微妙に変化していくだな。夢の丘公園もこの地球もやっぱりひとつの命みたいに、みんな生きて、息をしているんだな』

うん、うん。

『夜明け前、嘘のように静かな公園の地べたで目が覚めると、いつも遠い雪別離の町の海の音が聴こえてくる気がしてならないんだな』

うん、『そうだね』とメモ帳で答えながら、自分も夢国島の海を思い出し、ちょっと泣きそうな顔の星砂である。みんな同じなんだね、もしかしたら着ぐるみマンさんも今着ぐるみの中で泣きそうな顔しているのかも知れない。

やすおが青葉荘に来て、着ぐるみマンが出てゆくと、早速やすおに Jesse を教えてもらう。歌詞をメモ用紙に書いてもらい一緒に口遊ぶ。青葉荘の中だからやっぱり囁くような声だけど、それでも唄う喜びを噛み締める星砂。

やすおもまた、東京の人ではない。

「北海道、雪結晶 (ゆきむすび) って時化た港町でさ。中学出てしばらく地元で働いてたんだけど、いろいろとあってな。そいでこっち出て来たって訳」

「そうなんだ」

「かれこれもう十三年になるかな。今は夢の丘公園で暮らしてっけど、ま、そのうちな、一花咲かして……」

と頭掻き掻き苦笑いのやすお。

そうか、やっぱりやすおさんも夢の丘公園にいるんだ。もしと星砂は思う、もしたこさんのこの部屋がもっと広がったなら、やさしいたこさんのこと、きっとみんなで住めるのに。でも、もしたこさんのこの部屋がなかったら、今頃わたしも夢の丘公園で暮らしているのかな。そんな自分の姿など想像も出来ない、けれど現実に暮らしているやすおと着ぐるみマンを思うと、胸が詰まる。

「どうした」と心配そうにやすお。

「何でもない」

「ならいいけど」

「やすおさんも田舎の海、思い出すことある」

問う星砂。海、

「ああ」

と遠くを見詰めるふうのやすお、それから

「まあな」と寂しげに答える。

「ネオン街にいと、いつも思い出しまうんだ」

「ネオン街」

「ああ、ネオン街」

「どうして」

「何でだろな、夜、ネオン街の人込みの中にいると、無性に海の音が聴きたくなるんだ」

無性に、ネオン街の人込みの中にいると……。行ってみたいと思う星砂、自分も夜のネオン街に、その中に身を置いて海を思い出したい。

日曜の夜、その夜は秋雨前線の爆発的活動によって、東京は記録的大雨に襲われる。交通機関は麻痺、エデンの東を始めとする新宿の風俗店も軒並み臨時休業となる。そこで普段は揃わない四人、星砂、田古、やすお、着ぐるみマンが一堂に会し、青葉荘にてささやかなる晚餐会を催すことに。

狭いおんぼろアパートのこと、普段は騒げないが、今夜は激しい雨音がお喋りの声を掻き消してくれるから、遠慮はいらない。とって全員揃ったからと、大騒ぎするような連中でもない。星砂のこしらえた料理を囲み、黙々と食する四人。それでも星砂はみんながいることが、ただそれだけで嬉しくてならない。

「なんだかね、やっぱり、美味っていうよ」

「まじ、うめーっ」

着ぐるみマンもメモ帳で『美味いだな』

星砂も涙堪えて、鼻すすりながら「有難う」

ここでやすおから星砂に、何気ない一言、

「そいやまだ、名前聞いてなかったけか」

あっ、そいやそうだねと、一同沈黙し互いに顔を見合わせる。その通りだなどと着ぐるみマンが頷けば、星砂も、

「あっ、確かにそうだね」

と不思議がる。なのに田古だけが妙に焦り顔。

「何だかんだで、いろいろとあったからなあ」

腕組みして、しみじみと零すのはやすお。

でも都会的っちゃ東京っばい。だって名も知らぬ者同士が何の因果かめぐり会い、この大都会の片隅でひっそりと肩寄せ合い助け合い、かばい合いながら黙々と生きているのだから。田古、やすお、着ぐるみマンの三人を見ていると、ついそんな感慨に耽ってしまう星砂である。

で星砂改めてみんなの前で、ごっほん、今更ながらと照れながらの自己紹介。

「挨拶遅れてすいません。わたし、松堂……」

ところが突然田古が大声を発し、

「あ、なんだかね、やっぱり、松堂、いい名前っていうよ、ん、分かった分かった」

驚いたやすおが、

「どうした、おっちゃん」と心配すれば、

「あれえ、ノイローゼの発作かな、急に眩暈がして来たんだよ」

と田古は深刻な表情。

「そりゃ大変だ、寝た方がいいんじゃない」

「うん、そうする。じゃ松ちゃん、お先に失礼するよ」

「たこさん、大丈夫」

心配する星砂ににこっと微笑み、田古はさっさと畳の上にごろん。

「じゃ、おっちゃんが言った、まっちゃんでもいいか。な、まっちゃん」

「うん」

やすおの言葉に頷く星砂。着ぐるみマンも頷いて、早速メモ帳に『まっちゃん』と記す。それを見た星砂、

『松ちゃん、松堂の松』とメモ帳に書いて訂正。それを見たやすおと着ぐるみマン、ああ成程そういう字ねと、頷き合う。

田古が目を瞑り狸寝入りしている間に、星砂の自己紹介の続き。

「田舎は沖縄の夢国島っていう島で……」

ところが今度は、やすおが話の腰を折る。

「お、それってどっかで聴いた覚えが。なあ、夢国島って」

同意を求めて着ぐるみマンに目をやるやすお。着ぐるみマンは首を傾げるばかり。

「本当ですか」と星砂。思い出したやすおが、

「ああ何だ、おっちゃんの田舎じゃん」

ところが寝ていた筈の田古、がぼっと起き上がったかと思うと血相を変え、

「何言ってるの、やすおさん、違うよ、勘違いしないでよ」

と言下に否定。

「何だ起きてたの。でも、そうだったっけ、わりい、わりい」

とやすおが頭掻き掻き謝れど、それには無返答で、珍しく不機嫌そうにさっさと狸寝入りに戻る田古である。

晚餐も終焉を告げ、降り続く雨の中、相合傘で夢の丘公園へと帰るやすおと着ぐるみマン。道すがら、普段と違う今夜の田古の態度に話が及ぶふたり。

「おっちゃん、何であんな向きになったんだ、さっき」

問うやすおに、考え込み、それからメモ帳で答える着ぐるみマン。

『松ちゃんに、同郷だと知られなくなかったんだな』

「何で、田舎の話とか出来んじゃん。親近感湧くし」

『いろいろと、触れられたくないこともあるんだな』

「ああ、そうか。成る程ね、確かにそうかもな」

納得するやすお。これにて、以降田古の前では夢国島の話はタブーとするふたりである。

やすおと着ぐるみマンが去った後、青葉荘の部屋はいつものように田古と星砂のふたり切りに戻る。晚餐の後片付けとシャワーを済ませ、星砂もさっさと就寝。いつ止むともなく降り続く雨の中、田古は寝付けそうにない。星砂の寝息を聴きながら、ぼんやりと天井を見詰めるばかり。やっぱりそうか、そうだったか、何かの間違いであればと……、星砂が我が娘であること確信に至る田古。しかも松堂って。直ぐにあの幼馴染みの松堂勝を思い出さずにいられない、まさか、あいつと……。そうか、兎に角やっぱり美砂、あいつ再婚してたんだ。でも無理もない、あいつを責める訳にはいかないんだから。わりいのはこっち、なんだかね、やっぱり……。

と同時に田古は、絶対に自分の正体を星砂に気付かれてはならないと心に誓う。星砂、美砂、そして松堂、遠い夢国島の日々が鮮やかに甦り、田古の胸を締め付ける。ああ、これでもうあの島には帰れなくなってしまった。ああ、人生って何て儚い……。もう何もかもお終いだ。みんなもう昔のことなのか、もうみんな過ぎ去った美しい夢幻に過ぎないのか。身悶えつつ、すべてを諦めようともがく田古である。

(三·四) 十一月、A House Is Not a Home

(三・四) 十一月、A House Is Not aHome

星砂が田古の部屋に来て、四ヶ月目。星砂が実の娘であると確信した田古は、今迄以上に星砂のことが心配でならない。パンドラの奴らだって百パーセント星砂を連れ戻しに来ないとは断言出来ない。従って田古は継続して昼間のバイトを休み、星砂を守ることに全身全霊を傾ける覚悟、悲壮感の中で溺れそうな位である。

青葉荘には何事もなかったように、いつもの朝が訪れる。質素な朝食、台所のコップにはぶっきら棒に背高泡立草が飾られている。秋も深まり、涼しさどころかいよいよ寒さが押し寄せて来る季節であるが、部屋の外から聴こえるノイズは変わらない。人々の足音、挨拶、他愛ないお喋り、自転車の急ブレーキ、車のクラクション等々。

星砂の方は星砂で、いろいろと考え出す時期でもある。親切に甘え、いつまでもみんなの世話になっている訳にもいかない、そろそろ身の振り方を決めねば。かと言って相変わらず宛てもなければ、金もない。お金、うん、やっぱり働くしかないけど、お金なかったら島にだって帰れないんだし。どうしよう、初心に帰って寮付きのバイトを探すしかないか……。

気を利かせて、駅前の求人ペーパーを持って来てくれたり、履歴書を買って来てくれたり田古。でも履歴書用の写真は自分で撮りに行かないといけないし、応募するとなると公衆電話……、ふう面倒臭そうと、具体的にイメージしてみる。まず応募の電話、それから面接、それからもし仕事が決まれば職場に出て、あっ寮だから引っ越ししないといけないし、個室だとまだひとりで暮らす自信ない、かと言って相部屋は良い人ならいいけど変な人だったら……。などと考えていくうち気が滅入って、あっもう今日は駄目、また明日から頑張りゃいいやと不貞寝してしまう。そうやって一日また一日と先延ばししていくうち、気付いたら一週間、二週間、カレンダーの日にちだけが過ぎてゆく星砂の今日この頃。

だからつい苛々したり、頭抱えて、考える人状態。そんな星砂を見るに見かねて、田古がやさしく言葉を掛ける。

「なんだかね、やっぱり、焦らない、焦らない。慌てる何とかはもらいが少ないっていうよ」

「でも、もう十一月だし」

「まだ十一月じゃないか」

必死に慰める田古。でもかぶりを振って、田古にも負けない神経質ぴりぴり娘の星砂は叫ぶ。

「でもわたしなんか何の役にも立たないし、最低の屑なのよ。こんな奴、とっとと死ねばいいのに」

「何言うんだい」

「みんなに迷惑掛けてばっかだし、わたしなんか、生まれて来なければ良かったのよ」

「そんなこと言っちゃ駄目、産んでくれたお母さんに悪いだろ」

「お母さん……」

ふたりとも泣きそうな顔で見詰め合う。

「でもわたし、お父さんいないし……。わたしね、お父さん行方不明なの」

あっと、星砂を見詰める田古。しばし沈黙の後、

「なんだかね、やっぱり、お父さんだって、きっと何処かで、きみのことをちゃんと見守っていてくれてるよ」

「そうかな」

少し落ち着く星砂。

「そうさ」

力強く頷く田古。うんと星砂も頷き返す。

「年内一杯はいいんじゃない、仕事。それに、あ、そうだ、それにまだ検査残ってたよ」

検査、そっか、確かに残ってたね、と星砂も思い出す。

早速ふたりは翌日朝から、海亀病院へとH I V検査に出掛ける。直ぐに結果が分かり、ふたりとも問題なし。「ふう、良かった」

と手に手を取って喜び合うふたり。これで肉体面での心配はすべて解消。ずっと仕事探しのことばかり考えて悶々としていたから、久し振りに気分が晴れて心に無限の青空が広がる星砂である。

帰り道夢の丘公園に立ち寄ると、先ずは公衆電話ボックスに入って、島の美砂に電話。と思ったけれど、テレカの残りが少ない。やばいと公園前のサンファミに駆け込み、田古からもらったお小遣いで新しいテレカを購入。美砂との電話では、

「久し振りにあんた、元気そうで安心した」と美砂。

流石母親、電話口とはいえ星砂がずっと沈んでいたのを、ちゃんと見抜いていたらしい。

電話を終え、田古のいるベンチへ。時刻はもうお昼。

「なんだかね、やっぱり、今日はお昼、どっか外で食べないかい」

「だったらお弁当買って、ここで食べようよ」

「おお、ナイスだね。そうしよう、そうしよう」

と頷く田古、はい決まり。そこで田古は星砂に財布を渡し、お弁当の買い物を星砂ひとりで行かせることに。でも星砂はあっさりとスーパーでの買い物を見事クリア。

夢の丘公園のベンチに腰掛け、田古が焼き魚&唐揚げ弁当、星砂はオムライスに野菜サラダ、それにペットボトルのお茶。風は少し木枯らし気味で肌寒いけど、日差しは暖かく木漏れ陽もきらきらと眩しくて気持ちがいい。時折り落葉枯れ葉、砂ぼこりが舞うけど、ふたりは気にせずむしゃむしゃと平らげ、はい、御馳走様。

食事の後、改めて夢の丘公園を見渡す星砂。そうだ、ここでやすおさんと着ぐるみマンさんが生活しているんだ。夢の丘公園は新宿のビル街に隣接している区民公園であり、公園内を一周するのも徒歩数十分を要する程広大である。敷地内には一通りの遊具は勿論、花畑、噴水、広場、公民館まで有り、桜を始めとする樹木も数限りなく植

えられている。区民は勿論、近隣オフィスの労働者、サラリーマン、サラリーウーマンが集う憩いの場である。その中の一角に公園で暮らす住民たちの集落とも呼ぶべきコーナーがあり、樹木に寄り添うように幾つものテントと大きな荷物とが並んでおり、時折りNGO、ボランティアによる炊き出しや救護活動が行われている。

ふたりベンチでのんびりしている間に、もう昼下がり。田古の携帯するラジオからニュースが流れ、株が暴落したとかでこれから景気が悪化すると伝えている。

「なんだかね、やっぱり、そろそろ帰るかい」

「うん」

「でも外出ると、気持ち良くないかい」

田古の言葉に、うんと頷く星砂。そこで恐る恐る提案する田古。

「どうだい、これから毎日、散歩してみるのも悪くないっていうよ」

えっ、毎日散歩、どきどき、どきどきっ、散歩かあ……。じっと星砂を見詰める田古の顔。

「うん、頑張ってみようかな」と微笑み返す星砂。

ふう、やったあと、我が事のように喜ぶ田古は、久し振りのOKサインとウィンク。

それからふたりは毎日、晴れた日も雨の日も風の日も散歩し、散歩の範囲も少しずつ広がってゆく。夢の丘公園、ビル街、そして新宿駅前まで。こうして少しずつ外の世界に慣れてゆく星砂である。但し駅の反対側、即ち繁華街、歓楽街、ネオン街へはまだ行けない。ネオン街の景色、匂いが、八月六日パンドラの夜のトラウマを星砂の胸に呼び覚ますから。ネオン街を前にして、星砂の足はすくみ立ち止まる。

「なんだかね、やっぱり、無理しなくていいんだよ」

そして新宿駅へと引き返す、そんな日々が続く。

JR新宿駅地下道、改札の前で、しばし行き交う人の波を眺める。流石大都会新宿、丸で洪水のような人の波、人の多さであり、ぼやぼやしていると突き飛ばされ、飲み込まれ、押し流されてしまう。田古が星砂の耳に囁く。

「なんだかね、やっぱり、ほら目を瞑ってごらん、海の音がしないかい」

えっ海の音、そんなばかなと思いつつも、言われるまま目を閉じてみる星砂。けれどやっぱり海の音など聴こえない、というかそもそも聴こえる筈がない。幾ら星砂でも新宿に海がないこと位知っている。耳に聴こえるのは絶え間ないノイズばかり、足音、喧騒、人々の声、ざわめき。確かにそれらがずっと続いているから、潮騒のように聴こえなくもないが、星砂にとって海の音といえば夢国島のそれだから、ちょっと違う気がしてならない。

でもたこさんには聴こえるらしい。ま、それならそれでいいじゃない、たこさんがそう言うんなら、と星砂は目を開ける。ところが隣りの田古を見て唾然、えっ何で。なぜならその時、田古の目から涙が溢れていたから。どうしたの、と尋ねようとして黙り込む星砂。

そう言えば、やすおさんがなんか言ってたっけ、たこさんのこと。人の涙が見えるとか何とか。それでもらい泣きしてしまうようで、泣いてる姿をちよくちよく見掛けるかも知れないけど、気にすんなど。ふーん、もしかしてこのことかな。でも流石に目の前で泣かれたら、やっぱり心配してしまう。

ところが田古はお構いなし、気取ったふうで星砂に語り掛ける。

「なんだかね、やっぱり、きみには聴こえないかい。だから、ここは海なんだよやっぱり、たくさんの人の涙でできた」

はあ、訳分かんないけど、頷いてみせる星砂である。

新宿駅から夢の丘公園へと引き返し、ベンチに腰を下ろすふたり。そこへ一匹の猫が「みゃーお」と寄って来る、痩せた黒の野良猫。流石に広大な公園だけあって、暮らす野良猫の数も半端ではない。「みゃーお、みゃーお」と黒猫は星砂に懐いて来る。

「なんだかね、やっぱり、気に入られたみたいだよ」

にこにこ笑う田古に、

「そうみたい」

と笑い返す星砂。黒猫はちゃっかりと星砂の膝に乗り、気持ち良さそうに大欠伸、そのまま午後のうたた寝へ。ありゃりゃと星砂と田古も釣られて、こっくり、こっくり、みんなしてベンチで午睡。

昼寝から覚めて、星砂は黒猫に名前を付ける。クロとかにするかと思えば、星砂が黒猫に向かって呼んだ名前は「雪雄」。どきっとする田古。呼ばれた雪雄は目を覚まし再びふにゃーっと大欠伸、星砂の膝から飛び降りると「みゃーお」とふたりに別れを告げ、何処へともなく消えてゆく。

「また遊ぼうね、雪雄」

元気に手を振る星砂。田古は雪雄という名前には知らん振りで、星砂と一緒に黒猫の雪雄を見送っている。

日が暮れてもふたりはそのまま夢の丘公園で過ごし、着ぐるみマンを待つ。そのうち着ぐるみマンがやって来て選手交代、田古はネオン街へ。しばらく着ぐるみマンとふたりでいると、今度はやすおがやって来る。それで着ぐるみマンは御役御免、公園内のマイホームへと帰ってゆく。やすおと星砂は公園のベンチで、お弁当の晩御飯。

青葉荘の部屋の中と違って、夢の丘公園では着ぐるみマンもやすおも自由気まま、のんびりゆったりしている感じ。着ぐるみマンは痩せた口笛で好きな映画音楽を奏でたり、くるくるくると踊ったり。やすおはやすおでギター爪弾き、がんがん唄っている。星砂も今迄やすおに教わった歌をやすおのギターと共に思い切り唄う。

「あ、ついでだから、ギターもやる」

「えっ、まじ」

「まじ、まじ」

とにたにたしながらギターの練習に誘うやすお。

「でも、出来るかな」

「簡単、簡単、超簡単。コードさえ覚えりゃいいんだよ、後は自己流」

こうしてやすお先生によるギターのレッスンも開始。

早速今夜の曲は、A House Is Not a Home。その歌にちなんで、星砂に向かって屁理屈を垂れるやすお。

「だから俺らはさ、ホームレスじゃないんだな」

「はい」

「言うなれば、ハウスレスってやつ」

「ハウスレス」

「そ、建物としての家はあっても、心がホームレスなやつらは、この世にごまんとい
んだよ」

「そっか……、確かにそうだね」

頷いて、自分もホームレスだと感じる星砂。でも青葉荘、今のわたしにはたこさんの
いる青葉荘がある……。

朝には青葉荘の前の路上にも霜が降り、寒さも少しずつ増してゆくこの季節。星砂の
為にと、田古は布団一式を購入。夢の丘公園の暮らしも厳しさを増し、そろそろ冬の足
音が近付いて来る頃である。

(三·五) 十二月、On TheRadio

(三・五) 十二月、On TheRadio

田古と星砂の共同生活も五ヶ月目。日々の散歩の効果か精神面での回復は著しく、夜中の悪夢を除けば、もう普通に生活出来んじゃないという所までこぎつけた星砂である。それでも油断は禁物と今月も昼間のバイトをお休みして、星砂の暮らしに寄り添う田古。

東京の街はもうすっかり冬景色。田古は押し入れに仕舞っておいた電気ストーブを星砂に与え、自分はひたすら毛布に包まって過ごす。朝はそのストーブを囲んで朝食、炊き立て御飯と味噌汁の温もりが有難い。台所にはコップに花を飾る代わりに小さな白いシクラメンの鉢植え、清潔なその白さが星砂の心を慰める。

寒さの中、それでもふたりは散歩の習慣を怠らない。とは言っても夢の丘公園は寒いから、新宿駅前の木馬百貨店に入り浸り。レストラン街で昼食を取り、大型書店で立ち読み。それから星砂としては一步前進、駅の反対側にも足を延ばし、昼間ならネオン街でも歩けるようになる。

夢の丘公園では、黒猫の雪雄と遊ぶ。星砂が雪雄と戯れている間、田古は専らラジオ。ところがクリスマス前の或る日、渋谷は道玄坂の雑居ビルが火災で全焼したと、午後のニュースが告げる。そのビルとは、何とパンドラの入っていたビルではないか。詰まり、あの烏賊川たちの店が燃えて灰になっちゃまったという訳。ええっ、まじかよーっ、吃驚仰天。でもたとえどんな相手だろうと他人の不幸など喜べない田古は、心から胸を痛める。だけど、しまった、星砂に聴かれちゃ不味い。慌てて星砂を見ると、その時星砂は寒かろうに雪雄を抱いてこっくりこっくり、ベンチでお昼寝。ふう、良かった。折角パンドラのことを忘れつつあるのだからと、胸を撫で下ろす田古である。

そんな田古の気も知らず、星砂はくしゃみと共に目覚め、ふにゃーと雪雄と欠伸の合唱。それから公衆電話ボックスに入って、夢国島の美砂にひと月に一回の遠距離電話。「……うん、元気してるから……大丈夫だって。でも寒いかな、こっちはやっぱり……風邪、ううん引いてないよ。周りにあったかい人たち、えっ……そう、周りにいい人たちがいてくれるから、平気……うん、そうそう……分かってる。じゃまた電話するから」ガチャン。

クリスマスイヴの午後、着ぐるみマンに前からずっと誘われていたアンパンマンショーへと、田古と共に出掛ける星砂。場所は木馬百貨店屋上。ショーの直前、ステージの観客席で談笑する三人、勿論着ぐるみマンのメモ帳にて。

『ダンスはおいらの命だな』

着ぐるみマンがダンスへの熱い思いを、星砂にぶつける。けれど星砂はまだ、ダンスへの情熱を取り戻せない。

いよいよアンパンマンショーの始まり。歌と踊り、主題歌に乗ってアンパンマンを始めとする着ぐるみたちがステージの上で所狭しと踊りまくる。止まないちびっ子たちの歓声と拍手。でも、と星砂。

「着ぐるみマンさんの姿が見えないよ、どうしたのかな」

そこで田古はにっこり。

「なんだかね、やっぱり、そりゃそうさ。着ぐるみマンなんてキャラクター、いないんだよ」

「あっ、そーか。ぼっかみたいわたし」

ではどのキャラクターに扮しているのやらと、きょろきょろステージを見回してみる。

「ほら、あそこ、あそこ」

と田古が指差す先には、じゃーん、バイキンマン。ええっ、バイキンマンなんだ、着ぐるみマンさんがバイキンマンだなんて。なんかショックと、吹き出す星砂。

さ、着ぐるみたちによる寸劇の始まり始まり、勧善懲悪の王道ストーリーである。意地悪なバイキンマンが後もう一步で世界征服というところ、それを阻止せんと立ちはだかるのは、傷だらけの我らが正義の味方アンパンマン。ちびっ子たちの声援を背に、宿敵強敵着ぐるみマンじゃないバイキンマンと相對する。

俄かに形勢逆転、あっれーっ、哀れバイキンマンは予定通り、アンパンマンにこてんぱんにやっつけられ、アンパンマンの足下にひれ伏すのであった、ちゃんちゃん。どうかどうかお許し下さいませませ、アンパンマンにぺこりぺこりと平謝り。かっちわりーぜ、バイキンマンこと着ぐるみマン。でも、みんな苦勞してるんだね、と目頭が熱くなる星砂。『ダンスはおいらの命だな』先程のメモ帳の着ぐるみマンの文字が思い出され、胸が詰まる。

さてステージが終わるとバイキンマンの恰好のまんま、着ぐるみマンがふたりの前に現れ『メリークリスマス』とメモ帳に記す。それから星砂にクリスマスプレゼント。

「うそーっ」と吃驚の星砂に、いいから、いいからとにこっと頷くバイキンマンの着ぐるみマン。何かと思えば、アンパンマン特製のクリスマスケーキ。

「うわあ、有難う」

感謝感激の星砂。木馬百貨店の屋上を吹き抜ける木枯らしが、哀愁一杯のバイキンマンの背中の羽根を震わせて、新宿の街はもう夕暮れ時。さあ引き上げようかと田古が星砂の肩を叩き、バイキンマンじゃない着ぐるみマンの着替えを待って、とぼとぼと三人で夢の丘公園へ帰ったとさ。

翌日はいよいよクリスマス。けれど残念ながら夜になっても、東京の空に雪は舞い落ちて来ない。ただ寒いばかりの夜となり、それでも夢の丘公園の夜空には満天の冬の星座群。ああ、何てきれいなんだろう、夢国島の海辺で見た冬の星空を思い出す星砂。そんな星砂の隣りには、ロマンチックとは程遠い田古と着ぐるみマンというおっさんふたり。

「じゃ、やすおさんと交替して来るから」

いつものようにネオン街目指し、ひとり歩き出す田古。ところがその背中に、

「待って」

と呼び止めたのは、星砂の声。

「わたしも行きたい」

えっ、思わず顔を見合わせる着ぐるみマンと田古。

「なんだかね、やっぱり、でも夜のネオン街だよ」

「分かっている。でも……、なんだかね、やっぱり、クリスマスだし」

照れ臭そうに答える星砂。ええっ、再び顔を見合わせる田古と着ぐるみマン。星砂が田古の口癖を真似するなんて、これが初めてだな。

「言っちゃった……。御免、でも一度でいいから言ってみたかったの」

「なんだかね、やっぱり、いいんじゃない」

と頭掻き掻き苦笑い、でも何だか嬉しそうな田古である。

こうして星砂は、田古、着ぐるみマンと共に新宿駅を抜け、商店街を抜け、いよいよ新宿ネオン町三丁目、夜のネオン街へ。そこは荒れ狂う海のような人波が行き交う、日本最大の歓楽街。どきどき、どきどきっ、ネオンの海が見えて来る。どきどき、どきどきっ、悪戯に高鳴る星砂の鼓動。その時喧騒に混じって、田古のラジオから音楽が流れて来る。曲は Donna Summer の On The Radio。

ネオン街の入り口で立ち止まる星砂。

「無理しないでいいんだよ」

心配そうに振り返る田古と着ぐるみマン。うんと頷きながら、星砂はふたりに追い付く。それから星砂は田古の右手をつかまえ、ぎゅっと握り締める。どきどき、どきどきっ、星砂の緊張が田古にも伝わって来る。武者震い、じゃ、行くよと田古は星砂の顔を見詰めながら、星砂の手をぎゅっと握り返す。うん、田古の背中に付いて歩き出す星砂。着ぐるみマンも後から付いて来る。目指すはネオン街のまん中、嵐のような群衆の中で唯ひとりぼっち、エデンの東の看板を持って突っ立っているやすお。

やすおはエデンの東の看板持ちをしながら、同時に知り合いの結婚相談所『シクラメン』のパンフレットも配っている。なぜそんなことをしているのか、理由は、独身で寂しい思いをしているネオン街を通過する男女に幸せになってもらいたいという願いから。そのシクラメンは、新宿のビル街の中にある、地上三十階建ての東京摩天楼ビルの最上階に入っている。

ネオン街のちかちか瞬くネオンの波また波は、遙か宇宙の果てまでも続くかのようなのである。真冬、クリスマスの夜だというのに渦巻く欲望のエネルギーのせいか、むせる程の熱気。絶え間ない足音、喚声、奇声、ノイズまたノイズ。爆竹、クラクション、救急車或いはパトカーのサイレンも聴こえて来る。見上げれば、立ち並ぶ雑居ビルの看板に、風俗店のネオンサインの文字が酔っ払ったように泳いでいる。その中にパンドラの文字を無意識に捜している星砂、八月六日パンドラの夜のトラウマが今また星砂に襲い来る……どきどき、どきどきっ……。

やっぱり、怖い。やっぱり、嫌。やっぱり来なきゃ良かった。どうしよう、誰か助けて、引き返したい、目を瞑り、耳を塞ぎ、このまま逃げ出したい。帰りたいよ、青葉荘へ……。その時、聴き覚えのある声が星砂を呼ぶ。

「松ちゃーーん」

確かにやすおの声。やすおがエデンの東の看板を左右に振り回しながら、星砂を呼んでいるのである。

「来たんだ、松ちゃん」

田古から手を離し、星砂はやすおに向かって大きく手を振り返す。

「やすおさーん。わたし、来ちゃった」

星砂の脳裏に、あの夜が鮮やかに甦る。パンドラを逃げ出し、ここまで辿り着いたあの夜、この場所でギター爪弾き唄っていたやすおの姿、あの時聴いた Memory……。星砂の頬に七色のネオンが映り、ネオンライトの中で星砂が笑っている。

看板持ちを田古と選手交替すると、やすおは路上に転がしといたギター抱え、星砂と着ぐるみマンの前へ。

「休憩しようぜ」

ふたりを誘い通りの角のコンビニに入ると、晩御飯のお握りとパン及びペットボトルのお茶を購入。裏通りに移動し、三人でしゃがみ込み食事。

「うめえな」と問うやすおに、うんと頷く星砂。

腹ごしらえを済ませたやすおは再びネオン街に戻り、通りのまん中にて一んと座り込む。流石ストリートミュージシャン、腹が据わっているし、寒さすら気にならないようである。早速ギター爪弾き唄い出す、目の前を通り過ぎる人波に唄い掛けるように。足を止める人、耳を傾ける人、完全しかとの人、反応は千差万別。通りの端からその様子をじっと黙って見ている星砂、近くには看板持ちの田古もいる。

着ぐるみマンに手を引かれ、やすおの直ぐ目の前まで来る星砂、やすおの歌に合わせ、いつしか口遊んでいる。隣の着ぐるみマンはといえば体うずうず、もう踊り出したくて仕方がない、そんな様子。でも星砂のボディガードとして、じっと我慢で星砂の隣りに立っている。

一頻り唄い終わったやすおに、星砂が問い掛ける。

「やすおさん、どうして唄うの」

澄ました顔で、やすおは答える。

「俺の命だからさ」

うんうんと着ぐるみマンも頷いているから、ふたりとも何だかばかみたいと唇噛み締めながら、無性に泣き出したい気分の星砂である。

結局南極クリスマスの晩、田古の看板持ちが終わる二十四時までやすおたちとネオン街にいた星砂。十二月の寒さも何のその、やすおはまだ唄っている。着ぐるみマンも踊りたいふうではあるが、流石にもう眠い。

「なんだかね、やっぱり、もう少しいるか」

問う田古に、うんと頷く星砂。やすおが唄っているのは、さっきラジオで流れていた On The Radio。

そう言えば看板持ちをしている時も、たこさんってずっとイヤホンでラジオを聴いていたっけ。どうしてそんなにいつもラジオばかり聴いているのだろう、たこさん。思い切って尋ねてみる星砂。すると、

「なんだかね、やっぱり、ぼくなんか実際、昔好きだった人のことを思い出すからなのさ」

昔、昔っていつ頃のことなんだろう、星砂は知る筈もない田古の過去に思いを馳せる。

たこさんってどんな恋をしたんだろう、家族はいないのだろうか、どうして独身でいるんだろう。今更ながら田古のことについて、何も知らない自分を思い知らされる星砂。尤も独身なのは、やすおも着ぐるみマンも同じだけれど。

「ラジオを聴いていると、今も、なんだかね、やっぱり、その人とつながっている気がするんだよ」

そう語る田古の目には、薄っすらと涙。

あっ、まただ、と星砂は思う。このネオン街の人の海の中で、今たくさんの人の涙が見えているんだろうな、たこさん。その時ふと一瞬、夢国島の海と母美砂のことが浮かんで来た星砂である。

(三・六) 一月、 LovingYou

(三・六) 一月、LovingYou

大晦日、除夜の鐘の音も聴き、無事年を越した星砂と田古。いよいよ六ヶ月目の共同生活の始まりである。師走にも増して寒さは厳しくなるも、相変わらず電気ストーブと毛布だけで頑張っているふたり。

星砂に人並みの正月気分を味わってもらいたいと、元旦の朝はやすおと着ぐるみマンを招いて、少し遅い年越しそばを振舞う田古。

「おめでとうございます」

星砂が改まって挨拶すれば「お、そうだな」とやすお、『今年もよろしくだな』と着ぐるみマン。田古も照れ臭そうに、

「なんだかね、やっぱり、みんなで迎える正月も、たまには悪くないもんだよ」

気付けば痩せていた星砂の頬っぺたも今はふっくら、出会った八月の頃より健康的で、その回復振りは見違える程。寒さの為に枯れてしまったシクラメンに代わり、台所にはコップに挿した梅の花が。大方また夢の丘公園からかっぱらって来たのだろうと容易に想像は付くが、田古を憎めない三人。

食事の後は初詣、明治神宮まで歩いて出掛ける一行。しかし神様を拝みに来たのか人の背中を拝みに来たのか、分からない位の混雑振りというか盛況振り。人波に揉まれ、揉みくちやにされ、四人はもううんざりへとへと。あーあ、これじゃ神様も大忙しで新春から大変だあな、まったくと、夢の丘公園に戻りベンチに座ってやっと一服。星砂は公衆電話ボックスに入って、島に電話。

「もしもし、わたし……うん、明けましておめでとう……そう、じゃ良かった……こっちも何とかやってるから……大丈夫だって……うんうん、じゃカード切れそうだから、もう……はいはい、またね」

ガチャン。

正月休みが明けると、東京の巷も直ぐに普段の活気を取り戻す。初詣にて、実は密かにバイトが見付かりますようにと祈っていた星砂も、今年こそはと迅速に行動を起こす。まずは求人ペーパーをゲット。働き出すには確かにまだ不安一杯、だけどそうそう田古の世話にもなっていられない。まずはテレカ代、食費、光熱費など自分の生活費だけでも稼いで、田古の負担を減らしたい。それに八月から今迄の分も、返せるものなら少しずつ返済してゆきたい。田古のことだから、

「なんだかね、やっぱり、貸したんじゃないくてさ、上げたんだけど、ぼく」

なんて言いそうだけど。そして夢国島への帰郷の旅費も貯めなければ……、という訳で本気モードの星砂である。

そこへグッドタイミング、やすおからバイトの話が舞い込んで来る。というのも実は顔の広いやすおに、去年から田古が頼んでおいたのである。どんなバイトかと言えば、

じゃーん、コンビニ。しかも星砂の顔馴染み、あのサンファミ新宿夢の丘公園前店だという。ええっ、あそこ、まーじと星砂も田古も吃驚。でもやすおさんと一体如何な御関係と問えば、何でも店主がストリートミュージシャンやすおの大ファンであるらしい。

まじかよって軽い乗りで早速面接、で問題なし、即採用。時間帯、まずは昼から夕方まででお願いします、で両者合意。やったーと張り切る星砂は、明日からでも大丈夫ですと元気一杯。田古はといえば嬉しいのは嬉しいけれど、勿論心配でもある。本当は今月から昼間のバイトを復活させるつもりでいた田古だけれど急遽キャンセルし、引き続き星砂を見守ることに。

本当ならサンファミ店内で、星砂のそばにくっ付いていたいところだけれど、そんな訳にもいかない。従って働く星砂を、夢の丘公園からじっと見守るのみである。公園のベンチに座ったり、落ち着かず立ち上がったたり、そわそわしながら一時も目を離さず、サンファミ店内の星砂を観察する田古は、他人から見れば怪しい変なおっさんである。

バイト初日の星砂は汗一杯、緊張しながら兎に角先ずは仕事を覚えるのに懸命。レジの操作は複雑怪奇、支払い方法にも現金、カードがあり、ポイントカードだってある。単なる買い物でなく、公共料金の支払いだったり、宅配便の依頼、あとネット注文の受け取りとか。唐揚げ、コロケ、おでんなんかの調理もあるし、商品管理、掃除もやんなきゃ。忙しいし、とろくてレジの時間がかかると即客から文句言われるし。ふう、コンビニのバイトも楽じゃないなあ、何たって五ヶ月以上働いてなかったし。で何とかかんとか若さで初日を乗り切った星砂。

そんな訳で最初の一週間は慣れ覚えるので精一杯、客の顔を見る余裕もなければ、公園から見守ってくれてる田古の存在すら忘れてしまう程。ミスしないように、お客さんを待たせないように、ただひたすらレジをこなすのみ。でも慣れると緊張やお釣りを渡す時の指の震えもなくなって来るし、絶えず人と接するから対人恐怖症のいい治療にもなりそう。若いから覚えも早いし、胸に『研修生』の札を付けているから「頑張ってね」と声を掛けてくれるやさしいお客さんもいて、そんな時は無上の喜びを噛み締めずにはられない。

星砂のバイトが始まっても、朝は変わらず青葉荘にて朝食、ふたりでのんびりと過ごし、それから少し早めの昼食を取って、ふたり揃って夢の丘公園へと出掛ける。公園に着いたら星砂はサンファミへ、田古はそのまま公園に居残り。

週五日くたくたになるまで働く星砂と、そんな星砂の姿をはらはらどきどきしながらじっと見守っている田古。星砂の健気な姿がいじらしくて、バイトが終わって公園に戻って来る星砂に駆け寄り、

「なんだかね、やっぱり、お疲れさん」

とやさしくぼんと肩を叩く。星砂も、

「うん、でもやっぱり働くって気持ちいいね」

と疲れた顔で微笑み返す。

慣れて来れば疲労も減る。最初はバイトが終わったらへとへとで何も出来なかったのが、近頃では夕方夢の丘公園で雪雄と遊べるまでになった星砂。寒さに震える雪雄の体をごしごと撫でてあっためて上げる。それから田古と着ぐるみマンと共に、やすおのいるネオン街へ。言葉には出さねどもやすおも着ぐるみマンも、星砂がバイトを始めた

ことに大喜び。

夜のネオン街では、看板持ちの田古、通りで唄うやすおと踊る着ぐるみマンを見ている星砂。寒いのにみんな頑張ってるなあと感心する星砂であるけれど、その本人とて真冬の街角にずっと突っ立っているのだから大したもの。

田古は相変わらずラジオを聴きながらの看板持ち。今夜のラジオのニュースは、年末から正月に掛けて起きた少女の監禁事件を報じている。ふう、星砂に聴かれなくて良かったと胸を撫で下ろす田古。今も昔もまことに悲しい事件ばかりが起こる世の中である。

裏通りでビルの陰にしゃがみ込んで、晩御飯の弁当を食べるやすおと星砂。でも寒い、がたがた震えながらの食事はペットボトルのお茶だけが唯一の救い。食後、そのまま歌とギターの実習。

「松ちゃんは筋がいいから、どんどん教えてやっからな」

と歌詞にコードを付したメモ用紙を渡すやすお。

「うん、有難う」

と星砂もにっこり。飲み込みの早い星砂は、ひと月で一曲マスターしてしまう。今月は Minnie Riperton の Loving You。

「いつ松ちゃんがどっか行っちゃってもいいように、俺らと歩いた日々の記念にさ」

と、歌を教える理由を星砂に語るやすお。星砂と出会ったあの晩から既に、星砂との日々の終わりを予感していたやすおなのかも知れない。

でも兎に角寒い、指がかじかむ、思うように指が動かない。指のみならず歯も震え、全身の肉も骨も震える。極寒の中のギター修行は正に難行苦行、まことに辛く指にふーふー息を吹き掛けながら、やっとの思いでこなしている星砂。

「やすおさんは寒くないの」

問う星砂に、やすおも頷いて、

「そりゃさみいさ。でも気合いだよ、気合い」

「気合い」

「そう、寒さも忘れる位歌に集中すんだよ、松ちゃん」

白い息吐き吐き、大声で笑うやすお。はあ、わたしにはとても真似出来ないと、苦笑いの星砂。

「でもほら、おっちゃんのお陰で助かってんだ」

とやすおは田古からもらったホッカイロを、星砂にも分け与える。

「うん、あったかい」

ネオン街の表通りに戻って、群衆の中で唄うやすお、踊る着ぐるみマンを見ている星砂。と、その隣りに突然もわもわっと立ち込める白い煙、何かと思えば、ハイライトの煙である。いつしかひとつの影、ひとりの女が星砂の横に突っ立っている。

「こんばんは」

如何にもハイライト吸いまくりのしゃがれたハスキーボイスで、女は星砂に話し掛ける。びくっとして、恐る恐る女の顔を見る星砂。女は厚化粧、ひと目で風俗の女だと察しがつく、年の頃は三十代。続けて女、棘のある声で、

「あなた、田古さんのお知り合い」

とべったり塗られた口紅が歪むその顔に笑みはなく、怯えたように小さくはいと頷く

ばかりの星砂である。

星砂と女のツーショットに気付いた、田古、やすお、着ぐるみマン。みんな、女が誰かを知っている、詰まりみんなの御知り合い。田古なんぞ看板持ったまま、どぎまぎ、そわそわ。何しろ相手は風俗嬢、星砂がまたパンドラのことを思い出しはしないかと心配で仕方がない。やすおも同様に思ったか、ちょっとやべえかなと歌を中断し、慌ててふたりの中に割って入る。

「おー、雪ちゃん、どったの」

雪ちゃん、そうこの女こそ誰だろう、エデンの東で働く風俗嬢の雪である。

「俺らの知り合いだから、平気、平気」

と星砂を落ち着かせるやすお。けれどそんなやすおなどお構いなし、続けて星砂に詰問の雪。

「田古さんとは、どんなご関係」

ありゃりゃ、毒たっぷりじゃん、今夜の雪ちゃん。で咄嗟に思い付いた出鱈目を口にするやすお。

「この子、松ちゃんって言って、おっちゃんの遠い親戚なんよ。上京して来たばかりで、今おっちゃんとか世話になってんの。な、松ちゃん」

振られて、あっ、はいと頷く星砂、遠い親戚……、ま、いいか。それを聴いて、

「あーら、そうだったの。御免なさい、誤解しちゃって」

俄かに頬を緩める雪。

「そう言えば、何処となく似てるわね、田古さんと」

「そうか。ああ、そう言われて見れば、確かになあ」

とやすおも頷く。ええーっ、ちょっと、と少しショックの星砂。やっぱりたこさんとわたし顔似てるんだ、でも、それもま、いいかあ……。

「わたし雪。じゃ、宜しくね、松ちゃん」

微笑みを交し合う雪と星砂。ふう、良かったと胸を撫で下ろすやすお。でも女の直感、星砂は雪が田古に惚れていると見抜く。

「変わってるでしょ、田古さんて」

「でも、とってもやさしい人です」

「それだけが取り柄じゃない、あの人」

あの人……。雪の掠れたハスキーボイスの笑い声が通りに響く、けれどそれすら掻き消す程のネオン街の賑わい。

「それじゃ、行かなきゃ」

陽気に笑って、ネオンライト瞬く雑居ビルの中のエデンの東へと消えてゆく雪。後にはハイライトの匂いだけが残る。それすらもヒュルヒュルーと吹き過ぎる木枯らしに巻き込まれ跡形もなく消えてゆく。そうかやっぱり雪さん、風俗で働いてるんだ、とため息の星砂。とても他人事とは思えないから、胸が痛む。たこさんは雪さんのこと、どう思ってるんだろう。自分のことも忘れ、雪のことを思いやる星砂である。

やすおをひとりネオン街に残し、先ず着ぐるみマンが、ふにゃー、眠いだなあと夢の丘公園へと帰ってゆく。看板持ちのバイトを終えた田古も待っていた星砂とふたりで、青葉荘へと家路を辿る。見上げれば今にも雪が降り出しそうなそんな曇り空、盛り場を抜

ければ街はしーんと静かな真冬のミッドナイトである。

真夜中の青葉荘、折角寝入っている星砂の肩をとんとんと田古が叩く。なあーにと不機嫌そうに目を覚ますと、ほらと窓を指差す田古。見ると磨りガラスの窓の向こうに、白いものがゆっくりと落ちて来る。ひとつまたひとつ……、何だ、あれ、もしかして。田古を見詰める星砂、にこっと頷く田古。えっ、じゃやっぱり、雪……。

「なんだかね、やっぱり、初雪っていうよ」

小声でぼそっと囁く田古。

「は、つ、ゆ、き」

田古の言葉を繰り返しながら、星砂は窓辺に立ち窓を開ける。うわーっ、本当、雪だあ。舞い落ちる粉雪のひとつひとつが、街灯の光に当たってきらきらと煌めいている。

星砂にとって東京の雪は、一年目は殆ど降らず、二年目はそれなりに降ったけれど、烏賊川たちとのトラブルの頃で雪どころではなかった。今日の前に降る雪へと、そっと手を伸ばす星砂。掌で融ける雪の粒をじっと見詰めながら、

「きれい。東京にもこんなきれいな雪が降るんだね」

黙って頷く田古。

「お母さんにも、見せて上げたい」

幼子のように笑う星砂の顔が眩しくて、息が詰まる田古である。

(三・七) 二月、Still

(三・七) 二月、Still

時より雪も降る田古と星砂の暮らしも七ヶ月目。星砂はサンファミのバイトを順調に続けているが、まだ心配だから今月一杯はと、田古は昼間のバイトを休んで星砂を見守り続けることに。

寒さは一段と厳しくなるも、あと一ヶ月の辛抱だからと互いに互いを励まし合い、寒い朝の食事も、夜中の凍り付くよな眠りも、ひたすら耐える田古と星砂。それは夢の丘公園のやすおと着ぐるみマンの二人組も同様であり、あちらは更に厳しく毎日毎晩が生きる為の戦いに他ならない。因みに、冬の夜間だけでもやすおさんと着ぐるみマンさんにこの部屋で寝てもらってはどうか、自分はちっとも構わないからと、星砂が田古に提案したことがある。けれど田古も以前同様のことを考えたらしく御兩人に意思を確認したところ、あっさり断られたのだという。それでは仕方がなく、ただ頑張ると祈るしかない。

電気ストーブひとつが頼りの極寒の朝でも、温かい御飯と御味噌汁は救いである。台所にはまた夢の丘公園からぱくって来たのかコップに水仙が挿してあり、その甘い香りが殺風景な部屋にやさしく漂う。寒さの中にも時より春の予感にときめくふたりである。

二月三日節分の日、田古の誕生日でもあり今年四十七歳を迎える。が、そんなことを自分からべらべらと星砂に喋る田古では勿論ない。むしろ星砂には黙っておきたい、知られないまま何食わぬ顔で過ごしたい田古である。しかし残念ながら、やすおから星砂の耳に入ってしまう。

そこで日頃から世話になっているたこさんに何かプレゼントしたいと願うのは、当然のこと。サンファミの初めての給料が二十日に出る。誕生日当日には残念ながら間に合わないけど、今月中に何とかしたい星砂である。

それはそれとして星砂は思う、節分が誕生日の人って、確か知り合いで誰かいたような気がするんだけど。家族、親戚、友だち、島の人、あっ、松堂のお父さんだっけ……、違う。じゃ誰。うーん、ここまで出掛かってんだけど思い出せず、歯痒くてならない。

気になって気になって仕方がない星砂は、月一回の母美砂への電話で尋ねてみることに。その日は前日の晩から東京に雪が降り、夢の丘公園にも薄っすらと積もって、ベンチの上は綿菓子みたいな雪でまっ白。寒さの中で突っ立ってる田古を待たせ、公衆電話ボックスに入ると、ガラス窓は星砂の息で白く曇る。冷たい受話器を上げ、カード挿入、それからダイヤル……。

「もしもし、あ、わたし……うん、こっちは凄い寒い。でも二月だから仕方ないよ、もう少しの辛抱、うん……平気、平気、風邪なんか引いてないって……あ、そうなんだ、へえ……」

と美砂の長話に付き合う。

「分かった分かった、もうテレカ減っちゃうから……そいでね、うん、お母さん、うちの親戚とかで誰か、二月三日生まれの人っていなかったっけ……え、そう、二月三日」

すると美砂の返事は意外に素早い。

「何言ってるのよ、あんた。お父さんよ、あんたの」

「ええっ、おとうさん。あ、そうだったっけ」

「そうよ」

「やばい、すっかり忘れてた」

「もう。生きてたら今年で幾つになるか分かる」

「御免、分かんない」

「もう、思った通り。四十七歳よ、いい」

「四十七、うん、分かった。じゃ有難う」

ガチャン。

受話器を置いて、曇った公衆電話ボックスの窓ガラスを拭き消し、ぼんやりと外を眺める星砂。そこには田古が寒そうに震えている。そうか、おとうさんか……。へえ、そうなんだ、凄い偶然。たこさんとわたしのおとうさんって同い年、しかも誕生日まで一緒って……。たこさん……。

公衆電話ボックスの中でぼんやりしている星砂を心配してか、とんとん、とんとん田古が窓ガラスを叩く。それから、ほらっとベンチを指差す。そこには黒猫の雪雄が、積もったふわふわの雪の上で一匹ぼっちで戯れている。何してるの、あいつと、考え事を中断し公衆電話ボックスを飛び出す星砂。

しばし雪雄とじゃれ合った後、星砂はサンファミのバイトへ。田古は雪景色の夢の丘公園の中で、雪雄と共に寒さ堪えながら星砂を見守っている。その甲斐あってか、サンファミのレジでお客さんと常に接していくうち、対人恐怖症も改善の兆しが見え始め、確かに恐怖、緊張も弱まって来つつある星砂である。

無事サンファミ初の給料日二十日を迎え、バイトを終えた夕方銀行のATMでバイト代を下ろした星砂は、田古と共に新宿駅前の木馬百貨店へ。まさか自分へのプレゼント探しなんて夢にも思わない田古が遠くから見守る中、文具コーナーで絵葉書を探す。あった、沖縄の絵葉書セット。見ると十七枚セットの中にたった一枚だけ夢国島の海岸の写真が……。これだ、と星砂は迷わず購入、でもまだ田古には内緒。

翌朝、朝食の前に、バイト代の半分を入れた銀行袋を田古に差し出す星砂。吃驚した田古に、

「今迄借りた分の返済、まだ全部じゃないけど」

と照れ臭そうに笑う。ところが断固として受け取ろうとしない田古。

「なんだかね、やっぱり、ぼくなにか、貸した覚えがないからさ」

「でも」

困った星砂は一旦返済を諦め、それじゃあと木馬百貨店の包装紙で包まれリボンを飾った沖縄の絵葉書セットを差し出す。

「遅くなったけど、これ、誕生日プレゼント」

すると、ええっとこれまた吃驚仰天の田古、でも今度は絶句、返す言葉が見付から

ない。

「ハッピーバースディ、たーこさん」

にこっと微笑む星砂を前に、朝っぱらからうるうる、瞳の海に涙が一杯に溢れ出して止まらない。そりゃそうだ、生まれて初めて実の娘からもらう誕生日プレゼントだもの。まだ何も気付いていない星砂も、そんなに喜んでもらえるなんてと感謝感激のもらい泣き。子供を慰める母親の如く田古の肩を抱き寄せ、しばし抱擁のふたりである。その時、ラジオから流れ来るは、Commodores の Still。天気予報が今夜辺り、東京は大雪に見舞われるでしょう、なんて無責任に告げている。

涙の後、にこにここと絵葉書を一枚一枚大切に眺める田古。その中の一枚、夢国島の海岸の写真で目も指もびたっと止まる。それは夕映えの海辺、見ているだけで波の音が耳に響いて来て、潮風も頬を撫でてゆくようで堪らない。

夜、天気予報のお告げ通り激しく雪が降り続く中、それでも田古はいつも通りネオン街に出て、エデンの東の看板持ち。雪はどんどん降り頻り大雪となり、とうとうネオン街の通りに白く積もり出す。それでも田古は平気、なぜならその薄手のジャンパーの内ポケットには、星砂からもらった絵葉書セットがしっかりと収まっているから。

こんな夜に客なんぞ来る訳ねえぞと、何処の風俗店もネオンの灯を落として、臨時休業とっとと店じまい。そんな中それでも看板持ちを続ける田古と、やっぱり通りで唄うやすお。通りなんて雪を載せた傘差して、時よりぼつぼつと人が通り過ぎるだけ。やすおになんぞ見向きもしないとか見向きたくても困難で、ご苦労さん、はいさよーなら状態。まじかよ、あいつら頭いかれてんじゃね、と醒めた目で遠ざかる通行人諸氏。残っているのは、着ぐるみマンと星砂のふたり。

そこへハイヒールの音カタカタ、雪のアスファルトにつんのめりそうになりながらやって来たのは、エデンの東の雪。星砂の横に並び「さっむいね、松ちゃん」と肩震わせ、震える唇にはハイライト、震える指でマッチの火を点す。

「田古さんの目、なんか充血してない。風邪でも引いてんの」

心配する雪に、

「大丈夫みたいですよ」

とこれまた少し目の腫れた星砂が答える。

「そう、ならいいけど」

如何にも苦そうにハイライトの煙吐き出しながら「今夜はもう、商売上がったたり」

「ですね」

話すふたりの息が白く凍り付きながら、降り続く雪の中に消えてゆく。

「みんなまだいるの。もう帰った方がいいよ、わたしも帰るし」

「でもまだみんな、やってくみたいだから」

と答えつつも、確かに不安とか体がたがた震えて心臓も停止しそうでならない星砂。ビニール傘にも雪積もってるし、長靴もびちゃびちゃ冷たいし。このままだと雪に埋もれてしまいそうで、ほんと、みんなどうすんだろ……。

「ご苦労さん、じゃね」

ハイライト一本吸い終わると、再びハイヒールの音カタカタ、危なっかしい足取りで雪道を駅へと歩き出す雪。雪さん、雪、かあ。でもお店の名前なんだろうな。

さあて、みんなはどうすんの、と通りを見渡す星砂、でも三人ともまだ帰る気配なし。傘も差さずにいるから、みんなどんどん雪が積もって、今では立派な三体のスノーマン状態。流石にここまでと最初に音を上げたのはやすお。そりゃそうだ、指は千切れる程冷たいというか最早感覚ないし、鼻水ずーずー、くしゃみも出るわで歌どころの騒ぎじゃねっつうの。

「んじゃ、ラスト、もう一曲決めたら終わりな」

ってやすお。えっ、まだ唄う気なの、凄ーいと、目を丸くする星砂を尻目に、やすおが唄い出したのは Commodores の Still。

「今夜は流石にレッスンはなしな。また明日教えっから」

「いいよ、無理しなくて」

一面に雪が積もった誰もいないネオン街の通りは白いコンサートホール、ネオンライトのスポットライトが照らし出す。降り頻る雪の中に響くやすおの歌声、聴く星砂の方も寒さ堪えてこれまた必死。そこへ歌に合わせてオルゴール人形宜しく、くるくるくると踊り出したのは白い妖精ならぬ白い着ぐるみマン。その風景はさながら Raymond Briggs の The Snowman のイラストの世界である。しばし寒さも忘れ、わくわくどきどき、着ぐるみマンとやすおを見詰めている星砂。わたしもあの中に入ってゆけたら、どんなにいいだろう……。

歌が終わり、後は看板持ちの田古が終わるのを待つだけの三人。降り続く雪を眺めながら、

「今頃田舎の海も、雪で凍り付いてっだろなあ」

とやすおがしみじみ。すると着ぐるみマンも、

『おいらんとこの港でも、雪たちがなんにも言わずに、しゅっととけて海にかえっていきんだな』

と震えた文字で。そうだね、と黙って頷きながら、星砂も自分の海を思い出す、雪など落ちて来ない夢国島の海岸を。そうやって各々の心の海に思いを馳せる三人である。

さて田古は相変わらず耳にイヤホン挿しラジオ聴きながらの看板持ち。でも通り過ぎるのは最早雪と木枯らしだけ、通行人なんてだーれもない。田古の姿を見詰めながら、やすおに問う星砂。

「ねえ、どうして看板持ちなんてやってるの」

そうさなあっとやすおが答える。

「好きだからさ、ここに突っ立ってんのが、俺もおっちゃんも」

「好き」

「そうさ、ここに立ってっど、時々道に迷ったやつらがやって来んだな、実際。そいで俺らにこう聞いてくんだ。どうしたらこの東京砂漠から抜け出せますかってさ」

「へえ」

「だから、そんな俺とかおっちゃん、答える代わりにこう唄い掛けるんだ、You Are So Beautiful……ってね」

あっ、沈黙の星砂。

「だから、いつ誰が来てもいいように、俺らはいつもここでそんな誰かを待っていたいんだよ」

笑うやすおに、無言で微笑み返す星砂である。

午前零時、

「なんだかね、やっぱり、うへーっ、冬は寒いっていうよ」

と田古が合流し、やっと雪景色のネオン街を後にする四人。後二、三日もすれば、積もった雪など跡形もなく融け去る、ここは東京新宿、ネオン町三丁目である。

(三・八) 三月、Ribbon In TheSky

(三・八) 三月、Ribbon In TheSky

月が変わってもまだまだ寒さ厳しい八ヶ月目の田古と星砂の共同生活である。早くあったかくなるようにと、台所のコップには菜の花 from 夢の丘公園。

今月より朝食は早め、なぜなら田古が日中のバイトを再開したからであり、今迄のようにゆっくりと寝坊してられない。星砂が早起きして朝食を作る、そのついでに田古のお昼の弁当までこしらえる。お陰で田古はバイト先の工事現場で、仲間から冷やかされっぱなし。何だ、てめえ、愛妻弁当かよ。しばらく休んでたと思ったら、女こしらえやがって、この助平じじい。しかし田古は、

「なんだかね、やっぱり、愛娘弁当なんだよ」

とにこにこ笑うばかり。星砂も昼からサンファミのバイトだから、田古と星砂が一緒に過ごす時間はめっきりと減ってしまう。

自分がバイトの間星砂のことが心配な田古は、やすおと着ぐるみマンに星砂を見守ってもらうことに。ふたりは交替で朝から青葉荘に来たり、昼は夢の丘公園からサンファミの店内を眺めたり。でも星砂の様子は心配なさげ。田古との安定した暮らしの中で、星砂の気持ちも落ち着きを取り戻し、久しく悪夢も見ずに済んでいる。週五日コンビニのレジで多くの人と接していくうち、本来の陽気な星砂に戻って、今は笑顔一杯サンファミのお昼の顔となっている。

熱さ寒さも彼岸まで。夢の丘公園のベンチで黒猫の雪雄と遊んでいると、日一日と暖かくなってゆくの分かる。それだけで幸せ気分一杯の星砂、平穩無事っていいなあと雪雄と大欠伸の日々である。母への電話も忘れない。

「もしもし……ん、こっちも元気だよ……えっ、そうか、海人ももう六年生なんだ、はっやいね……うん、東京もだいぶ春らしくなって来たよ……桜、うん、咲いてる咲いてる、近くに夢の丘公園って桜の名所があって、すっごく綺麗だよ、みんなにも見せたい位……うん、じゃ、また電話するね」

それからガチャンと電話を切るまでの間、受話器の向こうから春の陽にきらきらと光る夢国島の海の音が、光の煌めきすら包み込みながら聴こえて来るようで、胸が熱くなる。あの海辺で、あの波音、潮騒の中で唄いたい。ギター爪弾き、やすおさんから教えてもらった、歌を唄いたい……。

『おいらのいなかの海はまだまだ冬だな、風も冷たく波も荒いな』

と着ぐるみマンが丸文字でメモ帳に記せば、やすおは、

「俺んこの海も、まだまださっみーよ」

と寒そうにぶるぶるっと震えてみせる。ようやく暖かくなった夢の丘公園のベンチで、そんなふたりと一緒に木漏れ陽に包まれる時、星砂はしみじみと春の有難さを感じずに

いられない。何しろ公園暮らしの中で必死に冬を乗り越えたふたりなのだから、その生の重さは自分などとは比較にならない超ヘビー級の重量。

しかし今年も冬の間、公園の仲間の幾人かが凍死したらしい。いずれも高齢者で、朝テントを覗いたら既に帰らぬ人となっていたという。着ぐるみマンもやすおもそんな中でこの冬を生きて来たのだと思うと、屋根があり壁がありストーブも毛布も布団もある自分の生活、そしてそんな生活をさせてくれる田古に対し感謝せずにはいられない星砂である。

日中のバイトを終えると、田古はもうくたくた。青葉荘に帰宅してシャワーを浴びたら、しばし休憩、それからラジオ片手に夜のネオン街へ。サンファミを終えた星砂は先にやすおたちとネオン街に来て、田古を迎える。

「おっちゃん、疲れてんだろ、大丈夫か。ここなら俺がぶっ通しでやったって構わねんだから、無理すんなよ」

そんなやすおの好意に時には、

「なんだかね、やっぱり、そいじゃ今夜はお言葉に甘えて帰らしてもらおうよ」

と引き上げることもあるけど、田古が看板持ちを休むことは滅多にない。エデンの東の看板に寄り掛かり、うつらうつらしながらも、ネオン街のまん中に突っ立っている。

そんな時にも田古の耳には、必ずラジオのイヤホンが。けれどラジオから流れ来るニュースは悲しい出来事ばかりである。例えば今夜などは『今日イラクで、戦争が始まりました』。なんだかね、やっぱり、と田古は思う。なんだかね、やっぱり、なんだかね、やっぱり、なんだかね、やっぱり……。殺されるのは市民ばかりだっていうよ。道理でもう春のお彼岸だったのに、今夜辺り東京の巷にゃやけに涙っぽい粉雪が、ちらほらと灰色の空から落ちて来るって訳さ。恐らくはこれが、名残り雪っていうよ。

ずっと冬の寒さで萎縮していたやすおと着ぐるみマンも、いよいよネオン街のメインストリートにて乗り乗りのパフォーマンスを展開する。やすおがシャウト、ロックを唄えば、着ぐるみマンも踊り狂う、ダンス、ダンス、レッツ、ダンス。激しいリズムに疲れたら、替わって今度はスローバラード。ムードたっぷり、着ぐるみマンもオルゴール人形宜しくロマンチックに踊り出す。曲は Stevie Wonder の Ribbon In The Sky。

流石春の陽気、通行人が物珍しげに足を止め眺めてゆく。時に歓声や拍手も起こり、着ぐるみマンと一緒に踊るギャルも出現、女子高生の記念撮影にも快く応じるやすおと着ぐるみマンである。でもま、殆どの人は無視してさっさと行ってしまうけど。

そんなふたりの様子をそばでじっと見ている星砂は、そわそわと落ち着かない。若い星砂がふたりのパフォーマンスに刺激を受けない訳がなく、自分の中に込み上げる情熱を抑えるのに精一杯。今更人前でなんか唄えないし踊れない、いや踊りたくなどないし、唄いたくもないんだから。そう必死で自分に言い聞かせようとするけれど、駄目。一旦は傷付き灰となった筈の星砂の夢が、今また熱くその胸の奥に甦ろうとしている。

唄いたい、わたしも。目の前にいるたくさんの人の前で、わたしも踊りたい……。そんな星砂の気持ちを敏感に察知したのは、やすおと着ぐるみマンである。一旦歌が終わると、やすおが星砂を手招き、

「松ちゃん、唄ってみるーっ」

えっ、どきどき、どきどきっ、どうしよう。絶え間なく続くネオン街の喧騒が、その

時一瞬星砂の中で沈黙する。でも、まだ決心がつかない。

「平気だってば、全然、へ、い、き」

やすおと着ぐるみマンに促され、渋々やすおの隣りに立つ星砂。やすおからギターを受け取ると、ふっとため息を零す。そんな星砂の姿に気付いた田古が、はっとして息を呑む。どきどき、どきどきっ、高鳴る星砂の鼓動。

「おっ、女の子じゃん」

物珍しげに通行人が足を止める、冷やかしの拍手が起こる。

どうしよう、星砂の指は緊張に震える。その様子に、やっぱり行き成しギター演奏は無理かとやすお。

「じゃ、今夜は唄うだけにすっか」

頷く星砂からギターを受け取り「何がいい」と星砂に問う。その時さっと思いついた曲は、Memory……。星砂は小さく答える。

「Memory」

でも喧騒の中、やすおの耳には届かない。

「何」

問い返すやすおに、じれったい星砂。だから……。でも思うように唇が動かない。

「じゃ、これは」

気を利かせ、やすおが弾き始めた、それは、You Are So Beautiful のイントロ。まいいか、うんと頷く星砂。そしてイントロから歌へ。ところがいざ唄おうとすると、やっぱり唇が動かない、無理よ、焦る星砂。気を利かせ再びイントロに戻るやすお。でも、やっぱり、駄目……。星砂の脳裏に今また甦る八月六日パンドラの夜の悲しみ、穏やかな夜の海辺に襲い来る嵐のように……。

「どうした」

「何だ、唄わないの」

さっきから待っていた通行人たちのブーイング。唇を噛み締め、じっと俯いたままの星砂、いつしか涙も込み上げて、

「御免なさい」

「いいんだよ」

かぶりを振って、星砂の肩に手を置くやすお、着ぐるみマンもやさしく寄り添う。

「何だ、詰まんね」

「行こう、行こう」

立ち止まっていた人だかりが動き出す。

「本当に、御免なさい」

「いいから、いいから、気にすんなって」

着ぐるみマンも『ドンマイだな』とメモ帳に書く。田古はというと勿論心配でならないけれど、今はじっと黙って看板持ちに徹している。その時ひとつの影がハイヒールのカタカタ音と共に、星砂の前に近付いて来る。

「久し振り、松ちゃん。元気してた」

さっきから通行人に紛れ、ずっと星砂を見ていた雪である。

やすおたちから離れ、星砂は雪と通りの端へ移動。相変わらずハイライトすぼすぼ

の雪。

「ねえ、聴いてよ、面白い客いて」

「うん」と頷きつつも、星砂としては余り好ましい話題ではない、なぜならパンドラ時代を思い出してしまいそうだから。でも雪に悪いと、無理して耳を傾ける。通りの中ではやすおと着ぐるみマンがパフォーマンスを再開、本当に元気だなあとふたりの姿を見詰める星砂。

「その人、わたしにプロポーズして来んの」

「ええっ」

「普通のサラリーマンみたいなんだけど、ずっと好きだったんです、結婚してくれませんかって。ださいよね」

「でも、本当に真面目だったら」

「そうなのよ。だから、わたしこんな仕事してる女だし、止めといた方がいいよって断ったの。そしたら」

「うん」

「目に涙浮かべちゃって、男泣き」

「ええっ、でもなんか可哀そう」

「これからも出来る限り、お店来ますって」

「本当に雪さんのことが好きなんですネ、その人」

はははっと照れ臭そうに苦笑いの雪。

「でも、過去形になっちゃった」

「過去形」

「うん。昨夜、恋人が出来ましたって挨拶されちゃった」

「あらら」

「大変お世話になりました、これも雪さんのお陰ですだって」

「でも良かったじゃないですか」

「うん、だからもうこんなとこ来ちゃ駄目だよって、忠告しといた」

こんなとこ……、じっと雪を見詰める星砂。

「ねえ」

「うん」

「さっきは、緊張しちゃったんだ、松ちゃん」

微笑む雪。

「あっ、はい」

「一杯いたからね、人。でも気にしない、気にしない」

はいと頷く星砂。

「唄うの、好きなんだ」

問う雪に、「うん」今は正直に答える。

「いいなあ、夢あって」

雪がため息混じりに零す。夢、夢かあ……。ハイライト揉み消して、

「じゃ、もう行かなきゃ」

微笑みとハイライトの匂いを残して、エデンの東へと消えてゆく雪。

田古の看板持ちが終わると、いつものように田古とふたりで青葉荘に帰る。さっき通りで唄えなかったことについて、田古は星砂に何も聞かない。とぼとぼと真夜中の夢の丘公園を横切れば、桜吹雪がふたりを包む、街はもうすっかり春である。

(三・九) 四月、New York State OfMind

(三・九) 四月、New York State OfMind

夢の丘公園の桜も満開、田古と星砂の共同生活も早九ヶ月目。流石にもう暖かく、冬の間ふたりを守ってくれた電気ストーブも今は押し入れの中で休息。

バイトを始めて三ヶ月、そろそろ青葉荘を出て自活出来ないものかと考える星砂。しかし相変わらず貯金はないからアパートを借りるのなんて無理、じゃバイトをやれる自信はついたから例によって寮付きのバイトを新たに探すか、でも折角サンファミに慣れて来たのに勿体ない、それに……。考えたら東京にいられるのも後四ヶ月、たったの四ヶ月しかなーい。だったらやっぱり、このままたこさんとこにいさせて欲しい星砂であり、何も言わなければ田古もそうさせてくれる筈である。

田古の日中のバイトも、星砂のコンビニも順調。朝早く星砂のこしらえた朝食を取り、星砂の作ったお弁当を持っていそいそと出掛ける田古。台所には桜の花が飾られており、夢の丘公園からかっばらって来たのは明白。

その夢の丘公園といえば、春の陽気と満開の桜のお陰で連日花見客が絶えず、その影響で星砂のサンファミも普段より忙しい。しかも昼間っから酔っ払い客が押し寄せるから、星砂はびくびく緊張気味。でもそんな時も公園のベンチからやすおか着ぐるみマンが交替で見守っていてくれるから、ほっと安心、星砂も何とか頑張れる。

サンファミのバイトが終われば、夕暮れの夢の丘公園で一休み。桜にばかり目がいくけれど、地には一面たんぼぼが咲いており、蝶々も忙しなく飛び交う。黒猫の雪雄の鼻息で大地を飛び立ったたんぼぼの種が春風に乗り、ふわりふんわり何処までも飛んでゆく。その危うさ儂さが何処か自分の姿とダブって心許なく、星砂は夢国島の海の音が聴きたくて、母美砂へと電話を掛ける。

「もしもし、わたし……すっかりあったかくなかったね……そうか、そっちはもう充分暖かかったね……みんな元気、うん……そう、良かった……ううん、何でもないよ、平気、平気だってば……ちょっとお母さんの声が聴きたくなっただけ……うん、楽しいよ、こっちも。毎日楽しいこと一杯あるから……そりゃ嫌なこともあるけど……」

受話器の向こうからは幽かに波の音が聴こえて来そうな、来なそうな。

「えっ……ああ、またその話。分かってる、分かってるってば。後四ヶ月でしょ、うん……大丈夫、ちゃんと帰るから……はいはい、じゃ、もう切るからね」

ガチャン。

放り投げるように公衆電話の受話器を置く星砂。あんた、ちゃんと帰ってくんではしょうね、などと美砂から釘を刺されたから、不機嫌でならない。

受話器を置いた後も公衆電話ボックスの中で、ぼけーっと物思いに耽る星砂。あーあ、たったの四ヶ月かあ……。美砂との約束の三年間、二十二歳の誕生日まではもうほんと

後残り僅かと迫っている。星砂が帰郷しても仕事に困らないように、今から知り合いに声掛けて探してもらうからねと美砂。もう、余計なことしないでいいのに……。ため息混じりの星砂の脳裏に浮かんで来るのは田古、と思いきや脳裏でなく、実際公衆電話ボックスの窓ガラスの向こうに田古がいる。あれっ、いつのまに、たこさん……。

夢の丘公園はもう日没前、田古はその胸に黒猫の雪雄を抱いて、星砂に向かって心配そうに小さく手を振っている。星砂が急いで外に出ると、

「なんだかね、やっぱり、どうかしたのかい、そんな浮かない顔しちゃって」と田古。だから慌てて星砂、

「ううん、何でもない」

と笑い返す。雪雄は田古から星砂に移動、星砂は気を紛らすように雪雄の頭を思いっ切り撫で撫で。それから雪雄をベンチに残し、星砂は田古と肩並べネオン街へと歩く。

後もう四ヶ月でたこさんとの暮らしが終わってしまうなんて、そう思うと胸が張り裂けそうでならない。それは八月六日パンドラの夜のトラウマさえ何処かへ吹っ飛ばしてしまう程の辛さ、切なさ、いとしさで星砂の胸に迫り来る。それ程までに、今や星砂にとって田古との暮らしは掛け替えのないものとなっているのである。しかし同時に、なぜだろうとも思う星砂、なぜ、たこさんとの別れがこんなにも辛く悲しいのだろう……。けれど今はまだその訳が上手く理解出来ない。まだ会って一年足らずだし、恋人でも何でも無い、ただの変なおっさんなのに。親子程も年が違うたこさんとわたし、親子程も……。

休日、その日は雲ひとつない晴天で澄み渡った空の青さに誘われ、ふたりは朝からある場所へと出掛けてゆく。星砂の達での希望から、そこは東京駅。新宿駅から中央線で一直線には向かわず、わざわざ山手線でちんたらと代々木、原宿、渋谷……遠回り。東京駅に着いて、プラットホームに佇み、初めて東京に足を下ろした日のことを思い出す星砂。わくわくどきどき、緊張と不安と期待と興奮の中、それでも確かに夢に憧れていたあの日、あの時。

あの日と変わらない人波、ノイズが今も目の前に溢れている。華やかで騒々しくて、それでいて孤独。何も変わらない東京の姿が今も確かにここに。ただ自分だけが変わってしまったのだと感じる星砂、自分の夢だけが潰えてしまったのだと。けれどそう決め付けるにはわたしまだ若過ぎるかも、とも思えて来る。だってみんな、やすおさんも着ぐるみマンさんも、そしてたこさんだって、みんな生き生きとして輝いているんだもん。少なくとも星砂にはそう思えてならない。

だからわたしだって、まだ。ねえ、そうでしょ、たこさん、ねえ……。新幹線をじっと眺めている後姿の田古に向かって、無言で問い掛ける。すると星砂の思いが届いたのか、突然振り返り目を輝かせながら無言のうちに微笑み返す田古。その肩に何処から飛んで来たのか、遙々地方の桜の名所から新幹線の屋根に乗かって揺られて来たのか、桜の花びらがきらきらと舞っている。たこさん、そう言えば、人の涙が見えるんだった。わたしにも見ればいいのに、この東京で暮らすたこさんの人の涙が。そしたらわたしも、少しは東京が好きになれるかも知れない……。胸が詰まり、泣き出しそうな星砂の顔。そんな星砂の肩をぽんと叩いて、田古。

「なんだかね、やっぱり、そろそろ、お昼の時間っていうよ」

「あ、そうだ」

道理で星砂のお腹もぐーっ。ふたりは駅弁を購入し、駅のベンチに腰掛けて昼食。その間もたくさんの人々が、ふたりの前をあわただしく通り過ぎる。

夜が訪れ、やすおと着ぐるみマンの待つネオン街へ。看板持ちをやすおと交替した田古の耳には、いつものようにラジオのイヤホン。ラジオから流れ来るニュースでは、消費税増税をすとかしないとか騒ぎ立てている。何でも先の総選挙で消費税アップ反対を公約に掲げて庶民の支持を集め大勝利した筈の現政府与党が、選挙が終わった途端手のひら返して国民をころっと裏切り、社会福祉の為消費税増税の必要性を訴えているという。なんだかね、やっぱり、と田古でなくとも呆れて、まじアホらしとため息も出ない。見渡せば、毎日毎日安い給料でこき使われ、せめてもの楽しみにとここの新宿ネオン町の盛り場、風俗街へと足を運ぶ庶民たちばかり。その背中が何とも侘しげで、哀切を禁じ得ない。みんな都会に迷った孤独な狩人なんだな、とため息の田古である。

田古のいる通りの向かい側で、やすおが唄い出す。その隣りに着ぐるみマンと星砂。曲は Billy Joel の New York State Of Mind。歌と共に、待ってましたと着ぐるみマンが踊り出す。星砂はやっぱり突っ立って、やすおと着ぐるみマンを見ているだけ。曲の後、やすおが星砂に問い掛ける。

「今日はどっか行って来たの、おっちゃん」と

「東京駅」

星砂の答えに「へえ、懐かしいな、東京駅」とここでやすおの思い出語り。

「もう何年いや十何年前になるかな、俺が東京出て来たの。北海道からさ、東京行きの夜行列車に飛び乗って」

「へえっ」

とやすおを見詰める星砂。

「じゃ、やすおさんも東京駅だったんですか、初めての東京」

「うん、そりゃそうさ。くーっ、俺もまだ若かったあ」

しみじみと語るやすお。そうか、みんなそれぞれ東京駅に思い出があるんだなと、感慨に耽る星砂。

「まだ若いですよ、やすおさん」

隣りでは着ぐるみマンが、星砂に頷きくすくすっと笑っている。

『もう着ぐるみマンさんのいなかの海も、春ですね』

星砂の問いに『そだな、海猫も元気に鳴いているんだな』

海猫かあ。着ぐるみマンの脳裏には、きらきらと夕陽煌めく波の上で小舟のように揺れている海猫の姿が浮かび、哀愁たっぷりの海猫の鳴き声も聴こえて来るようで、切なさ一杯、大きな着ぐるみの瞳も涙に濡れる。

「ああ、俺んとこの海も、もう春だよ。寂れた港にゃ野良猫どもがうじゃうじゃいやがったけど、あいつらみんな元気してっかなあ」

今度は野良猫。うんうん、夢国島の小さな港にもいたなあと、星砂も思い出す。

「な訳ねえか、みんなもう死んでるよな。そりゃそうだ、やつら猫なんだから」

自嘲気味に笑うやすお。星砂も寂しげ。

「やすおさん、さっきの歌教えて」

「あ、そうだった、そうだった。じゃ先ず飯食おうぜ」

看板持ちの田古だけをネオン街のメインストリートに残して、三人は裏通りへ。お握り、弁当、ペットボトルのお茶で晩御飯の後は、やすお先生による New York State Of Mind の練習。

「難しいけど、しっかり覚えろよ」

「うん」

「この歌唄えたら、何処行っただって東京のこと思い出せるから」

「えっ……」

思わずギターの指を止め、やすおの顔を見詰める星砂、でもやすおはただ笑ってるだけ。だから、

「うん、なんか泣けて来る歌詞だね」

と星砂も笑い返すだけ。

表通りに戻ると、エデンの東の雪が待っている。

「松ちゃん、久しぶり。元気してた」

「はい、元気だけが取り柄なもんで」

と答えつつ、数ヶ月前だったら考えられない今の自分に、我ながら驚く星砂である。唄い、踊るやすおと着ぐるみマンのパフォーマンスを眺めながら、女同士何やかやとお喋りの絶えない、すっかり仲良しのふたり。星砂には、お姉さんの存在の雪となっている。

「御免、吸わない人のそばじゃ止めた方がいいって分かってんだけど、つい吸っちゃうの」

珍しく遠慮がちに、ハイライトに火を点ける雪。

「いいんですよ、気にしないで」微笑みながら「桜きれいですね」と星砂。夜のネオン街の通りに舞い落ちて来る桜、雪も顔を上げ、

「うん、そうだね」と頷く。

「田舎いた頃は、東京にもこんなにたくさん桜が咲いてるなんて夢にも思わなかった。植物なんか育たないところだって思ってたから、東京」

「へえ」

「笑っちゃうよね、すごい田舎だから、わたしとこ」

「そんなことはないですよ、わたしだって」

「でもね、家の近所が有名な桜の名所だったの」

「そうなんだ、行ってみたい」

雪が故郷の話をするなんて、これが初めてである。

「貧乏な家でね、父親が早く死んじゃって。母さん内縁で若い男連れて来たんだけど、そいつがひどいやつだったの」

「えっ」

不意に予感が走る星砂、どきどき、どきどきっ……。悪い予感、暗い過去に引きずり込まれそうで、思わず人込みの中に田古の姿を捜す。すると目と目が合って田古が笑い掛けるから、勇気を出して雪の話に耳を傾ける星砂。

「いつも酒ばっか飲んで……。母さんいない時、そいつね」

えっ、やっぱり。耳を塞ぎたい、でも逃げちゃ駄目だよ、たこさん。

「わたしに、手出してきたの……」

「いやっ」

たこさん、やっぱり駄目だった。俯く星砂。

「あっ御免、ほんとばかね、わたし。こんな話しちゃって」

詫びる雪、でも星砂は下を向いたまま。

「松ちゃんにはつい、何でも話したくなっちゃうから。だってこんな話出来るの、松ちゃんしかいないんだもん。御免ね、ほんと。今の話忘れて」

ひたすら謝る雪に、申し訳なさを感じる星砂。わたしも辛いけど、雪さんはもっと辛いよね、たこさん。星砂は顔を上げ、

「こっちこそ、すいませんでした。もう、大丈夫ですから、続き聴かせて下さい」

雪の話によると、義父とのトラブルが原因で雪は家を飛び出し、そのまま上京して来たということである。へえ、そうだったのか、辛い思いをしているのは自分だけではないのだと今更ながら感じる星砂。雪がエデンの東へと去り、しばらくすると田古も看板持ちを終え星砂の隣りへ。日付けが変わりネオン街も今は静か、田古と星砂も帰路に就く。途中通過する夢の丘公園では、散りゆく桜を惜しんでか深夜まで人々が花見に興じている。道々雪から聴いた話を、但し義父とのトラブルのことは避けて、田古に伝えると、

「なんだかね、やっぱり、人に歴史有りっていうよ」

田古はただ星砂の肩をぽんと叩くのみである。

(三・十) 五月、Bridge Over Troubled Water

(三・十) 五月、Bridge Over Troubled Water

星砂が田古の部屋に来て十ヶ月目、日本列島はゴールデンウィーク、巷はのんびりと休息の日々である。田古の昼間のバイトもお休みで、その間はゆっくりと遅めの朝。星砂も付き合っただけで朝寝坊、遅い朝食を取るふたりである。いい陽気、窓から差し込む五月の日差しも柔らかい。台所のコップには、そこいら辺の道端から引っこ抜いて来たのか、春紫苑。開け放った窓から吹いて来る風に、にこにこ笑うように揺れている。

夢の丘公園には色鮮やかな皐月が群れなし咲いている。ゴールデンウィークでも関係なくバイトの星砂は、昼前にはサンファミへ。田古も星砂の様子を見守る為、夢の丘公園のベンチに腰掛ける。すっかり花の散った葉桜の葉と葉の隙間から差し込む木漏れ陽が、そんな田古をきらきらと見守っている。

星砂もバイトを終えると、公園のベンチでしばし休息。夕映えの空の下、黒猫の雪雄を間に挟んで、星砂と田古とが順番に雪雄の頭を撫でる。転げ回って尻尾の付け根やお腹も撫でてくれと催促する雪雄は、もうふたりには無防備、すっかり懐いて家族のようである。近頃ではふたりが公園を去る時、後を付いて来ようとするから、それを振り切るのが堪らなく切ない。雪雄とだって会えるのはもう後三ヶ月、そう思うと矢張り胸が詰まりそうになる。このままわたし、本当に島に帰っちゃうのかな、ちゃんと帰れるだろうか、まだまだ心定まらぬ星砂である。

島に電話すると、母美砂とのやり取りは八月の帰郷のことばかり。

「あんたちゃんと帰って来んでしょうね」

「はいはい、大丈夫です」

「ならいいけど。そうそう、那覇の観光ホテルでフロントの仕事があるそうよ。どう、あんた」

「どうって、やだ、まだ勝手に決めないでよ、ねえ」

「分かってる、分かっている。でもちゃんと考えといてよ、滅多にないチャンスなんだから」

「はいはい、じゃね」

ガチャン。今日もまた、電話の後の星砂はご機嫌斜め。

「なんだかね、やっぱり、そろそろネオン街に行かないかい」

「うん」

雪雄がどっか行った際に夢の丘公園を後にして、黄昏のネオン街へと向かうふたり。新宿駅前に差し掛かったところで、田古が、

「ちょっと寄り道しませんか」

「えっ、いいけど、寄り道って」

「なんだかね、やっぱり、海の音が聴こえる場所っていうよ」

にここ顔の田古。

「はあ、またーっ」

ほらまた始まったと、ため息混じりの星砂。行き先は、JR新宿駅の地下道である。絶え間なく続く改札前の人通り、その足音が海の音に聴こえるのだと力説する田古。

「なんだかね、やっぱり、聴こえるとかじゃなくて、実際、海の音そのものなんだよ」

「はいはい、分かった分かった」と苦笑いの星砂。

絶えることを知らない人波が押し寄せては引いてゆく、そんな地下道の通りの端に突っ立って、目を瞑る田古と隣りで見守る星砂。聴こえる訳ないでしょ、でもわたしも久し振りにちょっと瞑ってみようかな。恐る恐る目を閉じる星砂、すると、どきどき、どきどきっ……、ザヴザヴシューワ、ザヴザヴシューワ……。えっ、嘘っ。でも確かに今、なんか波の音が聴こえた気がした。でもやっぱり、空耳、空耳だよ。ただ足音がちょっとそんなふうに聴こえただけ、詰まり錯覚。あんまりたこさんが言うもんだから、つい先入観念で……。ところがその時星砂の脳裏に、五月の陽にきらきらと煌めく夢国島の海の景色が鮮やかに浮かんで来る……。

ザヴザヴシューワ、ザヴザヴシューワ……。えっ、でもやっぱり、海の音がしてる。この東京の人波の中で、確かにたこさんの言った通り。でも、どうして……。今迄ちっとも聴こえなかったのに。はっとして目を開けると、隣りにいる田古の目に涙がきらり。どきどき、どきどきっ……。

たこさん、わたしにも聴こえたよ、今確かに海の音、波音、潮騒が。わたしも海を感じたよ、東京の海を、ねえ、たこさん。良かった東京に来て、本当に良かった、たこさんと一緒にいられて。有難う、たこさん……。星砂は無言で田古に微笑み掛ける。すると涙を滲ませながら、田古も嬉しそうに笑い返す。今たこさんと気持ちがひとつになっている、たくさんの人のいる東京の片隅で、今たこさんと心がひとつに……。そんな気がしてならない星砂。たこさん、分かったよ、たこさんの言っていたことが、今少しだけ分かった気がするよ、心の中でそう呟いている星砂である。

「なんだかね、やっぱり、そろそろ行かないかい。やすおさんがネオン街で待ってるよ」

「うん、行こう」

手を握り、ノイズの中を歩き出すふたり。どきどき、どきどきっ……。お互いの鼓動と体温が伝わって来るようである。地下道から階段で表に出ると、ふたりの耳に響いていた海の音も、潮が引くように途絶える。すーっと魔法が解けるように、消えてゆく。

ネオン街はもう夜。田古は看板持ちをやすおと交替し、耳にはラジオのイヤホン。ラジオのニュースは秋葉原で通り魔殺人が起こったと伝えている。通り掛りの人々を次々に刃物で刺したのだという。擦れ違う人々の足音を鼓動を、ナイフでずたずたに……。ふう、如何なる理由か分からねど命を奪うということは、ひとつの波を消すことと同じなのだ、なんだかね、やっぱり、ため息を吐く。

星砂を見ると、やすおと着ぐるみマンのパフォーマンスに拍手を送っている。あの子も人前で唄いたいだろうにと、星砂の心中を思いやる田古。なぜなら真夜中青葉荘で、星砂が夢にうなされ悲鳴を上げることはなくなったけれど、代わりに時より寝言で唄っている星砂の声を耳にするから、何とも切なくてならない。そんな時星砂が口にしてるのは決まって、Memory……。

「ねえ、なぜ唄うの、何の為に」

星砂はやすおに問う。

「また、その質問かよ」

頭掻きながら、やすおが答える。

「そうさな、歌は俺の夢だからさ。なーんて言うと当たり前過ぎて詰まんねえけどよ」

しばしネオン街を行き交う人波に目を向けるやすお、星砂も一緒に見詰めている。

「でもそれ以前に、東京自体がひとつの夢なんだ、ここに集まって来るひとりひとりが、ひとつの夢みたいなもんなんじゃねえかなって思んだよな」

「うん」

「俺はさ、東京が大好きな訳、このごみごみした都会、雑踏がね。何ていうか、落ち着くんだ、まったく赤の他人しかいないってえのに、この中に身を置いてっと不思議に心がやさしくなれんだよ。天涯孤独な俺には一番安らぐ、いつも寂しさを癒してくれる場所なんだなあ」

「うん」

頷く星砂。でも天涯孤独、天涯孤独かあ。ふと田古を見る星砂である。

「だから俺も、この街の誰かの為に唄いたいんだ、今ここを通り過ぎる誰かの為に。だって歌ってのは、そういうもんだろ。誰かの為に、誰かと共に、誰かに向かって、その誰かはたったひとりでもいいんだよ。唄って上げたい誰かがいるから、歌ってというのは唄うもんなんだから」

喋り終わると、再び唄い出すやすお。曲は、Bridge Over Troubled Water。隣りでは着ぐるみマンが踊り出す。星砂にウインクしながら、颯爽と、くるくると夢見るように踊っている。

いつしか星砂の隣りには、雪。

「元気、なんか蒸し暑いね」

雑踏の熱気も手伝ってネオン街のメインストリートは、夏を思わせる陽気である。ネオンライト瞬く夜気の中に、雪の吸うハイライトの白い煙が上昇し消えてゆく。

「こっち来て、しばらくは真面目に働いてたんだけど」

上京後のことを、星砂に話す雪。

「っていっても未成年だし、大した仕事じゃないけど。二十歳位までは何とかね」

「うん」

「でもたまたま新宿遊びに来た時、声掛けられちゃって、モデルやりませんかって」

「モデル」

吃驚する星砂、何だか自分の経験に似てる気が……。

「付いてっちゃったの、わたし。ばかでしょ」

答えに困り、かぶりを振る星砂。

「そんなことないですよ」

「でもね、モデルなんて嘘だったの」

「嘘」悪い予感。

「AV」

「AV」

「そ、AV女優のスカウトだったの。結局、何だかんだで無理矢理……」

「ひどーい」

頬をふくらませ怒る星砂。

「ひどいじゃないですか、それって」

「でも、わたしも間抜けだったから」

「いえ、絶対許せません、そういうの」

「有難う」

星砂をなだめ、笑う雪。

「それから後は、水商売。初めはホステスとかやったんだけど、口下手でしょ、わたし、お酒も強くないし。だから続かなくて……、うん、後はずっと風俗、かな」

俯きがちに、ハイライトの煙を苦そうに吐き出す雪。

「辞めたいって、思ったことありませんか」

思い切って聞いてみる星砂。けれど雪はハイライトを揉み消しながら、かぶりを振って苦笑い。

「そりゃね、でも今更……、今更何にも出来ないし、わたし。だから……」

ちらりと腕時計を見る雪。

「あ、御免。もう店戻んなきゃ、じゃね」

逃げるように去ってゆく雪。

助けてあげたい、雪さんのこと。切実にそう願う星砂。だって、わたしとおんなじなんだもん。黙って雪の背中を見送っていると、星砂の背後にいつしか田古。星砂の肩をぽんと叩いて、

「なんだかね、やっぱり、そろそろ帰ろうか」

うんと頷く星砂。ねえ、たこさん、雪さんを助けたいの。田古にそう告げたかったけれど上手く口に出来ず、ただ泣きそうな顔で田古の背中に付いてゆく星砂である。

(三·十一) 六月、Mr.Lonely

(三・十一) 六月、Mr.Lonely

田古と星砂の共同生活は、星砂の、雪を助けたいという思いと、帰郷の時が刻一刻と迫り来る焦りとを除けば、表面上は平穩無事、何事もなく一日一日が過ぎて十一月目に突入である。

独り暮らしの変なおっさんの部屋に突如若い娘が同居とあらば、田舎ならちょっとした騒動にもなろうかと思えど、ここは大都会新宿の片隅、貧乏長屋の青葉荘。見知らぬ者同士がお互い干渉し合わず波風立てずに、慎ましく暮らしている。それに当初こそ部屋に閉じこもった切り一向に姿を見せなかった娘も、近頃ではちょくちょく顔も見るようになり会えば挨拶位はするから、どうやら拉致監禁の類ではなさそう。近所のおばさん連中も胸を撫で下ろしている様子である。

梅雨入りしたせいか雨の日が続き、同時に夏の暑さも押し寄せ、長いこと押し入れに仕舞われていた扇風機が遂に復活。今となっては星砂としては懐かしい、いとしさすら覚えずにいられない扇風機。部屋に来た当初、これなしではとても生きられないと思ったあの勇姿が今また目の前に、という訳である。早速馴染みの唸り声が力強く部屋に響き渡る。

雨になると、その日田古の日中のバイトはお休み。だから雨音に起こされながら、のんびりと目覚める朝も多く、それに合わせて星砂ものんびり。台所のコップには夢の丘公園の匂いの染み付いた紫陽花が飾られ、ふたりは静かな朝食を取る。

ラジオを点けるとニュース。何でも地球温暖化が進み、南極の氷が融けて、住む家を失くしたペンギンたちが宛てもなく海を漂流しているとか。哀れペンギンのホームレスまで出現する世の中となった訳である、ってまじかよと呆れ顔の星砂と田古。

田古と違って星砂は雨の日でも勿論サンファミのバイト。だから田古もビニール傘差し夢の丘公園の大きな木の下で、じっと星砂を見守る。その胸には黒猫の雪雄。バイトが終わり星砂が公園に来ると、雪雄は田古の腕を離れ思い切り星砂に甘えて来る。公園には紫陽花の他に、どくだみの白い花も咲いている。ただじっと何も言わず、しっとりと雨に濡れるどくだみの花。

夕立に遭遇し、ふたりと一匹は雨を逃れて公衆電話の箱の中。ついでという訳でもないけれど、星砂は母美砂へ電話することに。おっと、それじゃぼくたち気を利かしてと、田古が雪雄を抱いて電話ボックスから出ようとする。けれど外はまだ土砂降り、慌てて田古を引き止める星砂。

「外に出たら濡れちゃうよ」

「でも、なんだかね、やっぱり……」

「いいから遠慮しないで、直ぐ終わるから」

それでも、なんだかね、やっぱりと、田古は頑なに出てゆこうとするけれど、雪雄のやつが「みゃーお」と星砂に甘えるから、田古も渋々思い止まり公衆電話ボックスの中にとどまる。

「なんだかね、やっぱり、大人しくしとくんだよ、雪雄」

と注意する田古に、分かっているにゃ、というように頷く雪雄。

ツルルルル……。

「はい、もしもし」

「あ、元気、わたし」

「ああ、星砂。うん、みんな元気してるよ」

ただでさえ公衆電話ボックスの中、加えてガラスの向こうは激しい雨。だから田古の耳にも受話器の向こうの誰かさんの声が、はっきりくっきり漏れ聴こえ来る。って詰まり、聴き覚えのある、あの懐かしい美砂の声。どきどき、どきどき……、ついでのに夢国島の海の音さえ、ザヴザヴシューワー、ザヴザヴシューワー……と田古の耳に聴こえ来るようではない。

なんだかね、やっぱり、まさか生きて再びその声を耳にするなんて夢にも思わなかった、一体何十年振りのことだろ。ひとり胸が詰まる田古。思わず耳に手をあて、聴か猿にでもなりたい心境。でもその反面ずっと聴いていたっていう複雑な男心も覗かせる。

「うん、こっちも今雨降ってるよ」

「何言ってるの、こっちは台風なんだから」

「ええっ」

と言ってから受話器の口を掌で押さえ、

「向こう台風だって」

と無邪気に田古に告げる星砂。でも答えに困った田古は、ただ星砂に向かってにっこりと無言で微笑み返すばかり。だから、向こうには決して田古の声は伝わらない。ただ受話器の向こうの美砂は、

「何、誰かいるの」とくすぐったそうに笑うだけ。

「ううん、こっちのこと、こっちのこと」

再び受話器の口から掌を除け、話し出す星砂。

「……じゃ大雨だし、もう切るから。気付けてね」

ところが美砂。

「ああ、ちょっと」

慌てて星砂を呼び止め、

「あんた、もうそろそろ準備始めなさいよ。後もう二ヶ月ないで……」

「あーっ、分かっている、分かっている」

今度は星砂の方が慌てて美砂の声を遮って、

「ん、もう。じゃまた来月掛けるから、バイバイ」

ガッチャーン。

有無を言わず電話を切って、はいお終い。ふーっ、良かった、たこさんに余計なこと聴かれずに済んだよ。星砂は胸を撫で下ろす。

受話器を置くと、公衆電話の箱の中はシーン、深い深い沈黙に包まれる。ザーザーザー

ザーとただ激しい雨が降り続き、ふたりの耳にガラス窓を叩く雨音だけが響いて来るばかり。その沈黙を破ったのは「みゃーお」、無邪気な雪雄である。無言で雪雄の頭を交互に撫でる星砂と田古。尚も降り続く六月の雨は、ぺろぺろと雪雄が舐めてもやけにほろ苦い、田古の涙雨であるのかも知れない。

日曜日、その日は星砂もサンファミを休ませてもらい、田古とふたりで木馬百貨店の屋上へ。久し振りに着ぐるみマン出演のアンパンマンショーを見に出掛けるふたり。梅雨の晴れ間か珍しく朝から快晴でこりゃ午後からさぞ蒸し暑かろうと思いきや、それも束の間いざ開演という段で、残念ながら土砂降り。雨は降り止まず、アンパンマンショー午後の部は急遽中止。集まったちびっ子たちも早々に退散。ビニール傘差し最後まで残っていた田古と星砂も遂に諦め、

「なんだかね、やっぱり、引き上げますかい」

うんと星砂も頷き、ステージの観客席から立ち去ろうとしたその時、じゃーん、何処からかギターの音色と聴き覚えのある歌声が……。

もしかして、我らがやすお。足を止め、雨に濡れた屋上を見回す星砂と田古。いたいた、やっぱり、ギター構え屋上の入口に突っ立っているやすお。唄うは Bobby Vinton の Mr.Lonely。ヒューヒューッ、やすおさん、最高。ところがやすおは、

「今日の主演は俺じゃねえよ、あっちだよ」

とニヒルにステージを指差す。えっ。そこには、いつのまにやら我らが着ぐるみマン。土砂降りのステージの上で、やすおの歌に合わせ踊っているではないか。

それは嬉しそうに楽しそうに、気持ち良さそうに踊り続ける着ぐるみマン。雨なんかへっちゃら、水飛沫を上げながらくるりくるりと踊るその姿は、ばかでかい水の妖精かも。その姿を見詰めながら、いつしか星砂の目に涙、着ぐるみマンに感動している自分に気付いてはっとする。でも直ぐに星砂と田古もびしょ濡れ、ビニール傘など何の役にも立たない豪雨である。

でもそんなことはお構いなし、星砂はステージの上の着ぐるみマンに向かって叫ぶ。

「なぜ、そこまでして踊るの、何のために」

それに対し、着ぐるみマンもステージの上からメモ帳でなく肉声で絶叫。

「おいら、踊りたいんだなーっ」

えっ、星砂が着ぐるみマンの声を聴くのはこれが初めて。何だか感動に震えながら、続けて星砂。

「だから、どうして」

「だって……、だっておいら、誰かを励ましたいだな」

「誰かって」

「困ってる人、頭抱えてる人、死にたいとずっと思ってる人だな。そんなみんなを、おいらの踊りで腹の底から笑わせたいんだなーっ」

着ぐるみマンの言葉に感極まったか、星砂は行き成りステージに駆け上る。

「着ぐるみマンさーん」

と叫びながら、そのまま着ぐるみマンのびしょ濡れの胸に思い切り飛び込んでゆく。はーはーはーはー、白い息吐き吐き、星砂は心の中で叫んでいる。わたしも唄いたい、思い切り、わたしも踊りたいよ……。やがて雨が上がると、夕映えの空には小さな虹が架

かっている。

その夜はまた土砂降りで、ネオンの波も濡れている。それでもネオン街へと訪れる人の波は変わらない、だから今はパラソルの波また波が続いている。その中でやっぱり看板持ちのやすおが、いつものように突っ立っている。一応合羽は着てるけど、合羽も看板もびしょ濡れなのは言うまでもない。

そこへ合羽着た田古が登場し、やすおと交替。やっぱりいつも通り何食わぬ顔で突っ立つ田古、ただ黙々と雨に打たれながら。その姿を見ているだけで、涙が込み上げて来る星砂。どうしてみんな、みんなそんなに頑張れるの。そんなに頑張ったって何ひとついいことなんかないじゃない。そんなに頑張ったって何も変わらないのに、なのに、なぜ……。そんな星砂に向かって、ずぶ濡れの合羽の中から無言で田古が微笑み掛ける。

激しい雨音に混じって、カタカタ、カタカタッとハイヒールの音響かせながら、星砂へと近付いて来るのは雪。

「凄い雨だね、元気」

先ずはハイライト、風に吹き消されながらやっとの思いでマッチの火を点すと、ハイライトへとすーっと火を吸い込む。それからふーっ、吐き出した煙は雨の中何処へともなく消えてゆく。激しい雨には心許ないビニール傘を支えに、立ち話のふたり。

「こんな夜でも客来るから、凄いよね」

「うん」

「こんな夜だからこそ、いつもより人恋しいのかもね」

人恋しい……。

「雪さん」

「ん」

「あの、風俗、辞めませんか」

「えっ、どうしたの行き成り」

とうとう言っちゃったと星砂はどきどき、言われた雪は吃驚。しばしそのまま見詰め合う、ビニール傘に当たる雨音だけが響いている、心の中に響いて来る。

「有難う」

「えっ」

「そんなこと言ってくれたの、松ちゃんが初めてだから」

うんと黙って頷く星砂。

「実はわたしも以前、すごい嫌なことあったんですよ。でも今は何とか立ち直って来たし、サンファミのバイトだってやれるようになったし」

「うん」

「だから雪さんも」

「でもねえ」

「コンビニのバイトと違って、覚えちゃえば意外と何とかなりますよ。あっ、給料は安いけど」

「うん、でもわたしには、やっぱり無理よ」

「どうして」

「だって今更、もう若くないし……」

かぶりを振る雪に、星砂は説得の言葉が見付からない。

「有難う、松ちゃんの気持ち、凄く嬉しかった。じゃ、もう行かなきゃ」

歩き出す雪の背中を、星砂はただじっと見送るだけ。そんな星砂の肩をぽんと叩くのは田古、泣きそうな星砂にやっぱり黙って微笑み掛けている。ネオン街はまだ、土砂降りのネオンの海である。

(三・十二) 七月、夜を抱きしめて

(三・十二) 七月、夜を抱きしめて

いよいよ田古と星砂の不思議な共同生活も十二ヶ月目に突入。梅雨も早々に明け、蒸し暑い毎日がでーんと暮らしの中心に居座る。だから我らが扇風機に汗だくになって、せっせと頑張ってもらうしかない。

本当は、扇風機もう一台欲しいね、なんて田古に頼みたいところだけれど、口ごもる星砂。だってわたし後ひと月でいなくなる身だし……。ていうか、そのことまだ、たこさんに言ってない、どうしようと頭を抱える星砂である。

しかし蒸し暑い朝の朝飯は格別、汗だくで味噌汁を啜り、時より素麺も忘れない。見ると台所のコップに花はなし、何だ、殺風景で寂しいじゃん。でも暑さで直ぐに萎れてしまうから花が可哀想、申し訳ないという発想からしばらく飾らないことにした田古。その代わり夏の風物詩、元気な蝉時雨があちこちから聴こえて来て、星砂と田古に元気をくれる。

夜のネオン街も蒸し暑い。加えて今宵も集う群衆の熱気で更にむんむん、むさ苦しい。立っただけでも、じっわーっと汗が滴り落ちて来る。そんなじめじめを忘れさせ、星砂と田古の耳にやすおの歌が聴こえて来る。曲は Memory。隣りでは、暑かろうに着ぐるみマンが踊っている。その姿は、ブロードウェイのミュージカルを彷彿とさせるファンタジーでありメルヘンであり、星砂の胸に熱い思い、即ち夢を甦らせる。と同時に去年八月六日の夜のことを思い出さずにいられない星砂、やすおとここでめぐり会ったあの夜を。

あれからもう直ぐ一年かあ、早いなあ。振り返れば、あっという間。もう直ぐ一年、そしてもう直ぐ東京に出て来てから三年。いよいよタイムリミットがそこまで迫って来ているのである、詰まり美砂との約束の時間が刻一刻と……。

星砂は改めて自らに問う。なぜわたしは唄いたいのか、踊りたいのか、何の為に。その為にわたしはここ東京に出て来た筈ではなかったのかと。けれどその答えはもう既に星砂の中にある、やすおと着ぐるみマンが教えてくれた答えが。だからわたしはこれからも生きてゆける、たとえ何処へ行っても、この東京を離れ遥か遠い夢国島に帰っても。それでもわたしは生きてゆけるんだ。だから、なんだかね、やっぱり、たこさん。人々が暮らすこの街がこれからも生き続けてゆくように、夢のようなこの東京が……。ネオンの人波の中に田古の姿を捜すと、いつものように看板持った田古は、何も知らず修行僧のように沈黙考している。

汗びっしょり唄い終わったやすおへと、歩み寄る星砂。

「ねえ、教えてよ、今の曲」

「ああ、いいとも。だってこの歌は、この歌が、きみと俺とを結んでくれた運命の歌なんだからな」

「うん」

やすおのきらきらと光る額の汗が眩しくてならない星砂である。もうやすおさんの汗のにおいを嗅ぐこともない、そしてもうやすおさんの歌を聴くことも、後ひと月で……。

翌日星砂はサンファミで、今月一杯でアルバイトを辞める旨を店主に告げる。ええっ、まじで。残念だなあ、でもまだ若いからもっといい仕事見付かるよ、と激励してくれる店主。もっといい仕事って、ここが一番楽しかったのに、俯く星砂。いざ辞めるとなると、単調な作業もそのひとつひとつがいとおしくてならない。レジ操作も、客とのやりとりも、商品整理、ファーストフードの調理、床清掃、ゴミ箱の片付け……。そしてバイトの間、ずっと夢の丘公園から見守ってくれた田古、やすお、着ぐるみマン。

バイトを終え、今夕はしんみり気分で夢の丘公園のベンチに腰掛ける星砂、隣りには黒猫の雪雄。サンファミ店主に続いて、雪雄にも告げねばならない、サンファミを辞めること、帰郷すること。

「あのね……」

星砂の気持ちが分かるのか、「みゃーお」の鳴き声も心なし悲しげな雪雄である。

沈んだ星砂と雪雄の鼻に、くんくん、くんくん、何処からか良い匂い。何だ、と辺りを見回す星砂に、雪雄が教える。あれだ「にゃーっ」と雪雄が目やる先には、白いくちなしの花。な一るほどと頷く星砂、甘くやさしい花の香りも、今日の星砂には何処かほろ苦く切ない。思い切り雪雄を抱き締め、しばし東京の夕焼けに見入る星砂である。

とんとん、そんな星砂の肩を誰かが叩く、着ぐるみマンかと思いきや、振り返ると田古。

「なんだかね、やっぱり、バイト早めに終わったからさ」

「着ぐるみマンさんは」

「もう、ネオン街に行っちゃったよ」

そうだ、たこさんにも言わなきゃ、バイトのこと、そして帰郷のこと。でもそう思うと急に、どきどき、どきどきっ、鼓動が高鳴る。どうしよう、でも、もうたこさんにも伝えなきゃ、だって雪雄にも言ったし、時間だって後もう残り僅かだし。

けれどなかなか決心がつかない。どんな顔するかな、たこさん。がっかりされたら死ぬ程嫌だなあ。どうしよう、どうしよう、どきどき、どきどきっ、迷う星砂。でも……、でもやっぱり、今ここで言っちゃおう。だって少しでも早い方がいい、遅くなればなる程辛いし。それに青葉荘で言うより、ここの方が言い易い、雪雄もいるし……。ねえ雪雄。「みゃーお」と後押し雪雄。

「たーこさん、実はね」

深刻そうな星砂の表情に、田古も珍しく緊張。

「なんだかね、やっぱり、どうかしたのかい」

「うん、わたしね、今月一杯でサンファミ辞めることにしたの」

えっ、流石の田古も一瞬唖然、でも直ぐに気を取り直して、

「なんだかね、やっぱり、いいんじゃない、それも」

訳も聞かず、得意技のOKサインとウィンク。

意表を突かれた星砂は、帰郷の件まで告げられずに口ごもる。そこへ田古。

「なんだかね、やっぱり、ネオン街に行く前に、ちょっと寄り道しないかい」

「寄り道」

「うん、やすおさんも少しの遅刻なら、許してくれるんだよ」

うん、じゃと頷く星砂。よし、決まりと歩き出す田古。

雪雄を残し夢の丘公園を後にして、田古が向かった先はビル街、その中の東京摩天楼ビルである。新宿の街はもうすっかり陽が沈み、夏の宵。ビルに入り、エレベータに乗り込む。エレベータはどんどん上昇し、最上階の三十階に到達する、そこはやすおの知り合いが勤める結婚相談所シクラメン。こんな場所に一体何の用があるのかと思えば、シクラメンには足を向けず、田古は人影のない待合いロビーの窓辺に佇むばかり。きょとんとしている星砂に、

「ほら、なんだかね、やっぱり」

と窓に映る外の景色を指差す。えっと釣られて星砂が目をやると、そこには……。

「うわーっ、きれい」

思わず息を呑む、夜の街一面に広がる大都会新宿の夜景であり、さながらそれは地上に映る銀河の瞬き。

にこにこ笑い掛ける星砂と、星砂の反応に満足する田古。ふたりはそのまましばらく黙って、夜の新宿に酔い痴れる。ネオン街に煌めくネオンライト、駅の灯り、通過する電車の灯り、摩天楼の光の連なり、何処までも何処までも続く住宅街の灯り……。その光の波また波の、その下で暮らす人々の鼓動、息遣いすら感じられる程。凄—い、これが新宿なのね、わたしたちが暮らす。眩しげに田古の顔を見詰める星砂に、なんだかね、やっぱり、無言で頷く田古。この中に、青葉荘もあるんだね、わたしたちの青葉荘。わたしたちが東京の夜の中で暮らす時、青葉荘のわたしたちの灯りも、この夜景の中のひとつの光として点っているんだね。なんだかね、やっぱり、その通り、そうそう、そういうことさ。

やっぱりわたし、この街が好き、ねえ、たこさん。いろんな人がいて、悪い人もたくさんいたけど、それでも新宿が、東京が、わたし大好き。たこさん……、わたしもこの街で生きたい、青葉荘で、夢の丘公園で、たこさんと雪雄とやすおさんと着ぐるみマンさんたちとずっと一緒に……。うん、そうしたけりゃ、そうすればいいんだよ、何も遠慮なんかいらないんだからさ。なんだかね、やっぱり、だってここはきみの街、きみの、東京なんだから。星砂に笑い掛ける田古、けれど星砂の顔から笑みは消え、その瞳から涙が溢れ出す。えっ、息を呑む田古。御免なさい、たこさん。わたしね、本当に御免なさい……。なんだかね、やっぱり、どうして謝るのさ……。

「Memory……」

涙の中で、星砂の唇から歌が零れ落ちる。ほら、なんだかね、やっぱり、きみだって、ちゃんと唄えるじゃないか。東京摩天楼ビル三十階、結婚相談所シクラメンの窓には、星砂の肩を抱き締めるま—るい田古の背中が映っていた。けれどその時田古はまだ、星砂の涙の訳を知らない。

新宿の夜景と東京摩天楼ビルを後にして、ふたりはネオン街へと向かう。遅刻を詫び、看板持ちをやすおと交替する田古。星砂にも待ち人がいる、雪である。ハイライト吹かし、星砂に手を振る雪。

「あら、大丈夫、松ちゃん」

泣いた後だから、まだ星砂の目は充血状態。でも、

「うん、平気平気」

と健気に微笑んでみせる。

「ほんと」

苦笑いで念を押す雪。

「なんか悩みあるんだったら、遠慮しないで相談してよ。って言ってもあんまり役に立たないけど」

「有難う、でもほんと平気です」

ふたりはいつもの立ち話。

「わたしっていつも松ちゃんに、愚痴ばっか零して来たじゃない」

「そうでしたっけ」

「そうよ。でもね、これで楽しいことも、それなりにあんのよ」

「はい」

雪、「どっしようかなあ」と勿体振る。

「何ですか、にたにたして」

「うん、ここだけの話なんだけど、田古さんには絶対内緒よ」

「勿論ですよ」

「実はね、わたし、以前、田古さんと付き合ってたの」

厚化粧の顔をまっ赤にして雪が告白する。

「ええーっ」

これには流石の星砂も吃驚、思わず口を両手で塞ぐ。

「田古さんて、ほんと海が好きよね。会うたんびいつも海のことばっか話してたし」

「へえ」

「ホテルもね」

「ホテル」

「うん、入ったラヴホの名前も、海猫だった」

「うみねこ」

「うん、田古さんがここがいいって」

はにかむ雪。ええっ、そうだったんだ、雪さんとたこさんがラヴホねえ。でもふたりとも大人なんだから、別にいいじゃない、と平静を装う星砂。

「そんなに海好きなんですっけ、たこさん」

「そりゃ沖縄だし、田舎、田古さんの」

えっ、沖縄……。たこさんの田舎、沖縄なんだ、ちっとも知らなかった。今更ながら田古について何も知らない自分に、愕然とする星砂である。でも沖縄の何処なんだろう。

「何て島だっけ」と続ける雪。

「島なんですか、たこさんの田舎」

「何、知らないの、松ちゃん。親戚なんでしょ」

「あっ……ですね」

星砂、苦笑い。

「ですねじゃないわよ、ちょっと」

釣られて雪も笑い出す。

そこへやすおが、ふたりに割り込んで星砂に、

「わりい、おっちゃんから急用」

「えっ」

「沖繩に記録的な台風が上陸してるって、ラジオで」

「記録的な台風」

「うん。夢国島も危ないから、電話しろって、おっちゃんが」

「電話……」

戸惑う星砂。その横で雪が、

「そうそう、その夢国島よ、田古さんの田舎」

「えっ」

じっと雪を見詰める星砂。

どきどき、どきどきっ……、星砂の鼓動が高鳴る。夢国島、まさか、たこさんが夢国島の人だなんて。どうして教えてくれなかったんだろう、わたしに。きよろきよろ、ネオン街の人波の中に田古を捜す、エデンの東の看板を持った田古。もしかしてたこさんて、お母さんかお父さんの知り合いなのかも。だからわたしのことも知ってて、それでわたしに親切にしてくれたとか、でも凄い偶然……。

どきどき、どきどきっ……、でも、でも違うよ、やっぱり。だってたこさん、わたしに、あの歌を唄ってくれた。あの歌、You Are So Beautiful を、You Are So Beautiful って、唄ってくれたから。あっ……、そうか、そうだ。たこさんって、わたしの、お、と、う、さ、ん……。ああ、だから誕生日も年もおんなじだったんだ。遂に悟る星砂である。

「電話しないの、松ちゃん」

ぼけっとしている星砂に促すやすお。

「そうよ、早い方がいいよ」と雪も心配する。

「じゃ、松ちゃん、またね」

ハイライト揉み消し、エデンの東へと帰ってゆく雪。星砂は急いで、通りの端の公衆電話ボックスに飛び込む。

ツルルルル……。

記録的な台風かあ、ため息の星砂。受話器の向こうから、荒れ狂う夢国島の海の波音が聴こえて来るようではない。みんな大丈夫かな、お母さん早く出て……。ツルルルル……。

「はい、もしもし」と美砂の声。

「お母さん、わたし。夜中に御免」

「いいから、心配して掛けて来たんでしょ」

「どうなの、台風」

「ん、こっちは平気、大したことないない」

「良かったあ」

しかし一安心の星砂に、透かさず美砂が釘を刺す。

「良かったじゃないわよ、あんた。もう来月なのよ、ちゃんと帰って来んでしょねえ」

「えっ。うん、分かってる」

「ホテルの仕事だって、あるんだからね」

「大丈夫だって、ちゃんと帰りまーす」

「ならいいけど」

島に帰っても仕事ないのは分かっているから、以前から話に出てた観光ホテルのフロントの仕事を、既に星砂はOKしている。

電話を切る前に、田古のことが脳裏をよぎる星砂。けれど結局美砂には何も告げずに受話器を、ガッチャン。お母さん、吃驚しないでよ、わたし東京で、おとうさん見付けちゃった。なんて言ったら、お母さんどんな反応するだろう。でもやっぱり、そんなこと言えない。今更言っても仕方ないし、お母さん困らせるだけ。受話器を置いた後も、公衆電話ボックスの中でぼけっとしていた星砂。ふーっとため息で曇らせた窓ガラス越し、何にも知らずに看板持ちの田古が手を振っている。

ネオン街の通りに戻ると、

「どうだった、台風」

やすおが問い掛ける。田古は相変わらず、人波に揉まれながら看板持ち。

「島の方は大丈夫だって」

「良かったな、そりゃ」

「うん、でも……」

「でも、何」

田古のことが気になって仕方のない星砂。でも、

「ううん、何でもない」

「そうだ、新しい曲作ったばっかなんだ、聴いてくんね」

聴き慣れないメロディを弾き出すやすお。

「うん、聴かせて」

海外の名曲をカバーするばかりでなく、やすおはちゃんとオリジナル曲も持っている。

「タイトルは、夜を抱きしめて」

「夜を、抱きしめて」

「ん、知り合いの名もない詩人さんが書いた詩に、曲を付けさしてもらったんだ」

やすおは星砂へと語り掛けるように、唄い出す……。

「気付かなかった、今までちっとも気付かなかったよ、

水がなきゃ海と呼んじゃいけないと思っていたから、

なんだかねやっぱり、この夜を抱きしめ、

ちゃんと目に見えなきゃ涙だと感じちゃいけないと思っていたから、

けどもうぼくは愛している、この夜を抱きしめ、

この弱々しい腕と臆病な心と何度も棒にふった運命とできそこないのぼくの一生をこめて、

今せいいっぱい抱きしめるよ、このいくせんの人がゆきかう都会の夜の片隅、

きみには聴こえないかい、きらきらとまたたく街の灯りは、まるでとわに続く夜の潮騒のようさ、

実際ぼくなんか何度も海と錯覚したことがあるんだ、
うんと酒に酔っ払った時とか、うんとひとりぼっちの時。

そして今せいっぱい抱きしめるよ、誰にも何にもしてあげられないけれど、
いつも愚痴と泣き言ばかりで何の役にも立たないけれど、
ぼくには見えるんだ、今この夜の中でたくさんの人が泣いていると、
だからここは海なんだよやっぱり、たくさんの人の涙でできた、
だからもうぼくは愛している、
いくせんの人がゆきかうこの夜を、今はじっと抱きしめて、とわに続く潮騒のように
抱きしめて、
好きだなんて絶対口にしたりしないで、きみの涙をぬぐってあげたりはしないけれど、
今泣いているきみがいるこの夜を、
今きみの涙が生きているこの夜を感じながら、ぼくも生きていくよ」

唄い終わるとやすおは、その詩の書かれたメモ用紙を星砂に渡す。あんまり褒められ
た文字ではない、むしろ神経質そうに尖がってて読み辛い程。

「良かったらあげるよ、その詩人さんからもらった直筆だぜ」

「いいの、そんな大事なもの」

「いいんだよ、大事に持っててくれりゃ」

「うん、有難う。大事にする」

「ああ」

「名もない詩人さんに宜しく言っといて」

「勿論さ」

気付いたら、星砂の隣りには田古。

「なんだかね、やっぱり、そろそろ帰らないかい」

いつのまにか日付けは変わり、ネオン街の通りも今は既に閑散としている。うん、頷
く星砂。着ぐるみマンはもうとっくの昔に夢の丘公園に戻って、既にテントの中で熟睡
中。まだ唄ってくからと言うやすおに別れを告げると、星砂は田古と共に歩き出す。

沈黙。真夜中の路地に、ふたりの足音だけが響く。いつもはお喋りの星砂が今夜は無
口、ただ田古の横顔ばかりをちらちらと見詰めている。けれど目と目が合うと、はっと
して、さっさと目を逸らす。確かめたい、この人が、本当に、本当のおとうさんなのか。
それに、帰郷のことだって早く伝えなきゃ。どきどき、どきどき……、でも言えない、
恐くて何も言い出せない。田古こうして歩く日々も後もう残り僅かだというのに、気
ばかりが焦る星砂。そしてそんな星砂の気も知らず、ただ黙々と歩き続ける田古である。

(三・十三) 八月、Memory

(三・十三) 八月、Memory

月が変わり、遂に八月。星砂に残された時間は、泣いても笑っても後六日。雪雄を除いて、まだ誰にも帰郷のことは教えていない。荷物なら上京時と何ら変わらないトランクひとつの身、だから出発準備に時間はかからない。田古に買ってもらった布団は、青葉荘に残してゆくしかないけれど。そんなことより星砂の頭の中は、田古が実父なのかということと、帰郷すると告げた時みんながどんな顔をするか、その二点で一杯。

八月一日月曜日、朝、田古はいつものようにさっさとバイトに出掛け、青葉荘にはやすおがやって来る。

「サンファミ、辞めたんだって」

「あっ、はい。すいません、折角紹介してもらったのに」

「いいんだよ、そんなこた」

コンビニのバイトじゃ詰まんなかったかなとか、これからどうすんのか、聞かれると思ったけれど、然にあらず。やすおは行き成し、

「田舎でも帰んの」とぼつり。

「えっ」

何で分かったんだろ、戸惑う星砂。でもこれでこっちから切り出す手間が省けたと、安堵のため息。

「うん、実は……」

ところがやすおは勘違い。

「ま、しばらく帰んのも悪くないんじゃない、気分転換になって」

「えっ」

しばらくじゃないよ、ずっとだってば、気分転換な訳ないでしょ……。

もう仕方ないと、星砂はいよいよやすおに帰郷を告げる。

「わたし、もうずっと向こうなの」

「はっ、どういうこと」

「だから、帰省じゃなくて帰郷」

「帰郷……」

吃驚仰天のやすお。でも直ぐに、

「そうか。でもま、いつかこういう日が来るこた、みんな覚悟してたから」

みんな……。

「御免」

泣きそうな顔で俯く星砂。やすおは星砂を元気付けるように笑みを浮かべ、

「ま、それもひとつの生き方だよな」

「うん」

「でも嫌んなったら、また帰って来りゃいいじゃん」

「えっ」

「だから田舎飽きたらさ、また東京に帰って来なよ」

東京に帰って来る……。

星砂の心に八月の光が差し込む、その顔に俄かに笑みが甦る。

「そっか、うん、そうだね。なーんだ、帰って来ればいいんだ」

「そうだよ」

あたり前だろって顔のやすお。

「ここだっていいし、夢の丘公園だってあらあな、な」

「うん」

「おっちゃんも俺も着ぐるみのおやじもみんな待ってっから」

「分かった」

微笑みつつも、目には涙一杯の星砂である。

星砂帰郷の件は、やすおの口から田古、着ぐるみマン、雪へと伝わる。その日の夜ネオン街では、着ぐるみマン、雪から別れを惜しまれ、ついついまた涙に濡れる星砂である。でも田古だけは一向に、そのことに触れて来ない。ただいつも通りやすおと交替し、いつものように眩しいネオンの街の通りで黙々と看板持ちをこなしているだけ。こういう時は意外とクールな人なのかも、たこさんって、と無理に思おうとする星砂。でも何だか無性に悲しくてならない。かと言って自分の方からは言い出せない。看板持ちが終わると、ふたりしていつものように帰路に就く。星砂と肩並べ歩く田古だけれど、やっぱり無言、何も言ってはくれない。

八月二日火曜日、朝、やっぱり田古は何事もなかったかの如くさっさとバイトに出掛けてしまうから、星砂は拍子抜けのがっかりがっくん。なんだかね、やっぱり、わたしのことなんて、きっと何とも思っていないんだわ。わたしが帰郷しようが、何処にいなくなるだろうがどうでもいいっていうよ、知ったこっちゃないって訳ですね、はいはい、分かりましたよ、まったく、ばっかみたい。

でも、だったらやっぱり、たこさんがおとうさんだなんて有り得ない……ってことよね。でも、考えようによっては、その方が別れも辛くなくていいかも、と強引に割り切ろうとする星砂である。

八月三日水曜日も、八月四日木曜日も、八月五日金曜日も、同じ具合の田古である。

そして遂に八月六日土曜日の朝が訪れる。それはありふれた、晴れた蒸し暑い、いつもの八月の朝である。土曜日故、田古のバイトはお休み。青葉荘の部屋には、田古と星砂と、そして扇風機。いつのまにか台所のコップには、大きな向日葵の花が飾られている。夢の丘公園のやつなのか、それとも買って来たのかは定かでない。

朝っぴらから蝉も元気に鳴いている。一年前のちょうどこの日は星砂の為に閉め切っていた部屋の窓も今朝は見事に開け放ち、僅かながらも涼しさを含んだ風がふたりの頬にやさしい。同様に去年は閉ざされた窓越しに聴こえて来た隣近所のノイズ、話し声、笑い声、足音もストレートに耳に届く。もう星砂に外界への恐怖はない。あの去年の八月六日パンドラの夜の悪夢もすっかり見なくなって久しい。

本日八月六日は星砂二十二回目の誕生日であるけれど、星砂は誰にもそのことを教えていない、田古に対してもまた然り。それに今更教える気もない、今日が東京最後の日であるから尚更のこと。誕生日なんかより、みんなと別れることの方が今日の自分には遥かに重要。ま、兎に角たこさんに限っては、わたしのことなどどうでもいい訳だから、あっさりと言、お世話になりました、とでも言っておけばいいか、などと軽く考えてみる星砂である。

台所に立ち、朝食をこしらえる。去年は自分の為に、田古が一生懸命不器用な手付きで作ってくれた。今思い起こせば、すべてが懐かしくてならない。あっ、でもそうか、わたしの箸、お茶碗はどうしよう。そんなことを思うだけで、胸がきゅっと詰まって死にそうになる。このままここに残していったら、たこさんどうするんだろう、困りはしないか。ねえ、たこさん、どうしよっか、わたしの食器。荷物になっちゃうから、持ってけないんだけど、捨てちゃっても構わないよ全然。とか田古に笑い掛けたいけど、やっぱり上手く言い出せない。もどかしさだけが込み上げる。

仕度が出来て、マイメロディのテーブルに並べる。そっか、こいつともお別れなんだ、マイメロディ。でも何でマイメロディなんだろ、もしかしてファンだったりして、たこさん。しまった、今迄一度も気にしたことなかったなあ、ばかなわたし。

御飯、味噌汁、海苔、生卵、醤油、お茶、献立は至ってシンプル。今朝は田古の好物の卵かけ御飯である。黙って田古と向かい合う。今朝はまだ田古はラジオを点けないでいる。忘れていいのか、それとも意識的に……。

「頂きます」と田古。

答えるように星砂も「頂きます」

「なんだかね、やっぱり、美味しそう」

とむしゃむしゃ頬張る田古の頬に御飯粒。扇風機、蝉時雨、隣近所のノイズ、何処かで犬の鳴く声。すべての音がいとおいしい、今わたしの耳に響いている音のすべてが……。目頭が熱くなる星砂、でも堪えて食事。だってこれが田古との最後の朝御飯。明日は早朝から出発するから。

「ふう、なんだかね、やっぱり、美味しかった」

「うん」

「御馳走様」

「御馳走様」

後片付け、台所に並んで立つ。でもやっぱり無言のふたり。それが終わると、ぼけーっ。柱に凭れる田古と窓辺に佇む星砂。ラジオが点いていないせいか、落ち着かない。よくまあ、こんな狭い部屋に男女ふたりでいたもんだ、と改めて思う。一年間、よくぞ何事もなく過ごしてこれたなあ。でも一年間なんてあっという間なのね、丸で夢の如しじゃない、夢の、夢……、夢かあ。夢なんて、これじゃ何が夢だか分からないじゃない、と思う星砂。歌手に憧れダンサーになりたくってやって来た東京で、でも上手くいかなくてひどい目にあって。だけどそのお陰でたこさんと会えた、こうしてたこさんと出会えたんだから、そして夢みたいな一年が過ごせたんなら、あの烏賊川たちに騙されたことも今ではそんなに悪いことでもなかったのかも知れない、むしろ感謝してもいい位……な訳ないか、ばかみたい。ひとり、くすくす笑いの星砂。

「なんだかね、やっぱり……」

そんな星砂の耳に、不意に田古の声。

「なーに」

「もう準備はいいのかい」

えっ、準備、準備って帰郷の……。田古が星砂の帰郷に関して触れるのは、これが初めてである。緊張する星砂、でも、今が別れの挨拶をするラストチャンスかも……。

「うん、もう大丈夫」

「そりゃ良かった」

「あっ」

「何だい」

「うん、どしよっか、わたしが使ってたもの」

「もの」

「食器とか、後布団。捨てちゃおっか」

「捨てる」

「でも、邪魔でしょ」

「まさか」

「だって」

「みんな、宝物なんだよ、ぼくの」

えっ、戸惑う星砂。

「宝物……」

「だから、なんだかね、やっぱり、みんなそのまんまでいいのさ」

笑い掛ける田古に、けれど泣きそうな星砂。でも涙をぐっと堪えて、田古の顔を見詰め返す。しまった、でも、たこさんには見えるんだった、こんな涙でも……。

「出掛けないかい」と誘う田古。

「なんだかね、やっぱり、何処がいい」

問う田古に、あれこれ考え結局、

「公園」

青葉荘を出て、夢の丘公園へ。公園に着く頃はもうお昼、ふたりは汗だく。公園は蝉に支配された、蝉時雨の楽園である。星砂は先ずサンファミに別れの挨拶へ、それからふたり分の菓子パンと、パックに入った素麺、ペットボトルのお茶を購入。田古の待つ公園のベンチに戻る。

最後の昼食は、夢の丘公園のベンチで。

「なんだかね、やっぱり、ラジオ忘れちゃったよ」と笑う田古。

「取って来る」

「暑いから、いいんだよ。それに今日はいらない」

田古の言うように、公園では何にもなくても確かに平気である。風が吹き、草花が微笑み、虫たちが遊ぶ、「みゃーお」と黒猫の雪雄もやって来る。

「しまった、忘れてた」と星砂、サンファミに雪雄の食事を買いに。

のんびりとした午後を過ごす、ふたりと一匹。雪雄は星砂の膝の上ですやすや。日が傾き、昼下がりに。

「散歩しないかい」

「うん」

雪雄を起こして、公園を一回りする。改めて歩き回ると、夢の丘公園は実に広い。公園で暮らす人々も暑さを避けて、木陰で昼寝したり、ラジオ聴いたり、ぶつぶつ独り言呟いていたり……。やすおと着ぐるみマンは出掛けているのか、今は留守らしい。

よせばいいのに、公園を歩き回って汗びっしょり。自販機で冷えたお茶を購入し、ベンチに戻ってまた一服。気付いたら、夕暮れである。雪雄ともいよいよお別れ、気を利かして田古は席というかベンチを外す。思い切り雪雄を抱き締め、最後の抱擁と頬擦り。

「じゃーね、短い間だったけど楽しかったよ、有難う」

「みゃーっ」分かっているのかいないのか、ぺろぺろと涙に濡れた星砂の頬を舐める雪雄。

そこへ夕立。

「うわーっ」

と木陰に逃げ込む雪雄を抱いた星砂と田古。容赦なく襲い来る大粒の雨また雨に、雪雄も含めみんなびしょ濡れ。笑い合って、

「なんだかね、やっぱり、直ぐに乾くから平気、平気」

と上機嫌の田古。夕立の後、夢の丘公園の夕映えの空には、小さな虹。

「それじゃ、これでほんとにお別れだね、バイバイ、雪雄」

と手を振って、きょとんと公園の舗道に佇む雪雄に別れを告げると、星砂は田古と共に夢の丘公園を後にする。雪雄はいつまでも星砂の背中を見送っている。

ネオン街へ向かうかと思えば、

「こっち、こっち」と向きを変える田古。

何処へ行くかと思えば、何てことない青葉荘。何でまた、あっラジオを取りに戻るのかと思いつつ、部屋のドアの前に立てば、あれあれっ。何やら中に人影、一体誰、まさか泥棒。でも田古は少しも驚かない。

ゆっくりとドアを開ける田古、恐る恐る中を覗く星砂。すると、じゃーん、何とそこには着ぐるみマンとやすおが、しかもにっこりと微笑み掛けているではないか。何で、何してんのふたりとも。そっちこそ何ぼけっとしてるだなど着ぐるみマンが星砂の手を引っ張り、部屋の中へ。直ぐにマイメロディのテーブルが目に入る。しかもその上には、小型控えめサイズの白いバースディケーキ。えっ、立ち尽くす星砂。

「松ちゃん、誕生日、おめでとう」とやすお。

わたし、と目を丸くする星砂に、着ぐるみマンも頷いてみせる。何で、何で知ってるの、誰にも教えてなかったのに。ケーキの上のローソクを数えると、二十二本。どうして、さっと田古を見詰める星砂。固唾を呑んで、ふたりを見守るやすおと着ぐるみマン。注目の中、田古はにこっと笑って、星砂に何やら差し出す。

「なんだかね、やっぱり、はい、これ。誕生日プレゼントっていうよ」

誕生日プレゼント……。言葉を失くし、無言のまま受け取る星砂、小さな箱である。

「開けてみれば」とやすお。

うんと頷き蓋箱を開ける、そこにはコルクの栓で中味を密封した小さな透明の瓶が。瓶の中味は、砂。

「何だよ、おっちゃん、ただの砂じゃん」

星砂の代わりに問うやすお。

「なんだかね、やっぱり、星の砂って言いたいところ、夢の丘公園の砂。だから夢の砂ってところかな」

頭を掻いて苦笑いの田古。

「夢の砂、そりゃいいわ」

笑うやすおに、手を叩く着ぐるみマン。でも星砂は直立不動、じっと田古を見詰めたままである。

星の砂……、やっぱり間違いない。

「おとうさん」

田古の胸に飛び込む星砂、じっと抱き締める田古。ふたりを見守るやすおと着ぐるみマン。

どきどき、どきどきっ……、おとうさん、わたしの、おとうさん……。

縋り付いた田古の胸は、あったかかった。何処か懐かしい匂いもして、それは確かに夢国島の海の匂い。どきどき、どきどきっ、高鳴る田古の胸の鼓動の中に、確かに夢国島の海の音も聴こえた。星砂はずっと田古の胸に縋り付き、ずっと縋り付いていたかった。なぜなら、やっと見付けた、ここがわたしのふるさとなのだから、ねえ、たこさん。

「ねえ一緒に帰ろう、わたしと島に帰ろうよ、おとうさん」

田古の胸から離れ、涙声で訴える星砂。けれど田古は黙って目を瞑る。ふるさとの青い海、懐かしい海の匂い、砂浜に打ち寄せる波の音が甦る。さとうきび畑を駆け抜ける風も頬に吹いて来るようである。帰りたい、帰れるものなら……。けれど田古はぎゅっと唇噛み締めると、目を開き、一言こう答える。

「松堂に、わりいから」

まつどうにわりいから……、まつどうに……。田古の言葉を幾度となく心の内に繰り返す星砂。それではなんにも言い返せない、分かったと頷く星砂である。

最後の晩餐である。やすおが買って来たお弁当とお茶とバースディケーキで乾杯。着ぐるみマンもすぽっと頭の着ぐるみを取って、素顔で弁当にぱくつく。黙々と食する四人、静かである。ただみんなの食事の音がするばかり、後はいつもの青葉荘と都会のノイズだけ。

それからいつものように、ネオン街へと繰り出す四人。外はもうすっかり宵、ネオン街はサマーアンドサタディナイトで大フィーバーの熱帯夜。田古は看板持ち、ラジオと耳にはイヤホンも忘れない。やすおと着ぐるみマンはいつものパフォーマンス開始。通りの人波に紛れ、ふたりを眺めている星砂である。

そこへ、カタカタ、カタカタッとハイヒールの音鳴らし、やって来る雪。田古が自分の実父と分かって、雪と田古の関係も他人事には思えない星砂。おとうさん、どうして雪さんと別れたんだろう。

「ねえ、最後だし、どっかで食事でもしない」

と誘う雪に連れられ、近くの喫茶店に入る星砂。雪の知る穴場なのか、ネオン街から歩いて直ぐなのに、店内は空いていて静か。

いつものように雪は早速ハイライト。奢らせてよと聞かない雪に、それじゃとサンド

イッチとココアを注文する星砂。この席で初めて星砂は、雪に自分の過去を話して聴かせるのである。

「へえ、そうだったんだ」

星砂の思い出話を聴いて、雪は吃驚。

「松ちゃんと田古さんが親子だったなんて……」

しばしため息の雪である。ハイライトの煙にもやりながら、

「御免、わたし自分のことばっか喋って、松ちゃんのこと何にも知らなかった。松ちゃんも大変だったんだね」

雪に見詰められ、照れ笑いの星砂。

「でも、もう大丈夫だから、わたし」

「それなら良いけど」

同じ痛みを分かち合い、今は笑みを交し合うふたりである。

「そうかあ、明日帰っちゃうんだね、松ちゃん」

星砂との別れも然ることながら、雪は田古のことが心配である。あの人寂しいだろうなあ。でもそんなことを星砂に問うてみたところで今更仕方のないことである。だから田古のことには触れず、

「わたしもいい機会だから、一遍田舎に帰ってみようかな」

それからハイライトを揉み消すと、

「じゃそろそろわたし、お店行かなきゃ」と雪。

「うん」

星砂も顔き、ふたりは席を立ち茶店を後にする。

別れ際、照れ臭そうに雪が告げる。

「そうそうわたし、辞めることにしたから、エデンの東」

「えっ」

驚いて雪を見詰めずにいられない。

「ほんとですか」

「嫌だ、泣かないでよ。こっちまで……」

「でも」

「有難う、わたしも頑張ってみるから。じゃ、元気でね、松ちゃん」

「雪さんも」

ネオン街の人込みの中、エデンの東へと向かう雪の背中に星砂は小さく囁き掛ける。

「おとうさんのこと、宜しく願いしまーす」

聴こえたのか否か、振り返り雪は無言で頷くばかり。

雪を見送った後、星砂は看板持ちの田古の許へ。

「おとうさん、わたしにもやらせて」

「なんだかね、やっぱり、重たいからさ」

「平気、平気」

それじゃ仕方ないと、星砂にエデンの東の看板を渡す田古。

「ラジオとイヤホンも貸して」

「はいはい、なんだかね、やっぱり」

田古を真似して看板を持ち上げる星砂。

「う、本当重たい」

田古の見守る中、ネオン街の通りのまん中に立ち、イヤホンのラジオに耳を傾ける。星砂に気付くこともなく、目の前を通り過ぎてゆく人波。絶え間なく続く人影、足音、ノイズ、瞬き灯り続くネオンの波また波。唄い踊るやすおと着ぐるみマンの姿が見える、エデンの東の店のネオンライトの文字も見える。

ラジオから流れ来る曲は、Elaine Paige の Memory。その瞬間、星砂の中で目の前の景色が一変する。そこはさながら華やかな都会のコンサートホール。どきどき、どきどきっ……、重たい看板を田古に返すと、田古の手を握り締めながら、星砂は唄い出す。目の前を通り過ぎる人波へと今、唄い掛けるように。

「Memory……」

驚いて、振り返ったり足を止める人、耳を傾ける人、やっぱり無関心に遠ざかる人、人……。星砂の歌に気付いて駆け寄るやすおと着ぐるみマン。やすおがギターを弾く、Memory の伴奏。そして星砂の歌声は緊張で震えているけど、その声は透き通っていてやさしい。星砂の歌に合わせて踊り出す着ぐるみマン、田古から手を離し星砂も踊り出す。くるくる、くるくる、弧を描き、アスファルトの路上で唄い踊る星砂の額に頬に、汗が光る。

星砂と着ぐるみマンの周りに人だかりが出来る。どきどき、どきどきっ……、注目の的、スポットライト代わり七色のネオンライトが星砂を照らす。群衆の中に混じって、田古の瞳がやさしく星砂を見守っている。心の中で星砂は囁く。

「わたし、唄えたよ、おとうさん」

その声が確かに届いたように、田古は星砂に頷いている。にこにこ、にこにこ、なんだかね、やっぱりと、星砂に向かって笑い掛けている。あたかも夢国島の海辺に打ち寄せる波のように、笑っている、いつまでも、いつまでも、絶えることなく……。

八月六日から七日へと日付けが変わる午前零時、東京新宿ネオン町三丁目。やすお、着ぐるみマンと抱擁し、別れの言葉を交わす星砂。

「じゃ、もう行くね」

「ああ、元気だな」

『世話になっただな』

『さようなら、ありがとう』

それから田古とふたり、青葉荘へと帰路に就く。

最後の晩、それでも暑さは変わらない。扇風機は全開で、一晩中うんうん唸り続ける。風呂を済ますと、ごろんと畳の上、並んで横になるふたり。

「おやすみなさい」

「おやすみ」

でもふたりとも眠れない。

「おとうさん」

「なんだかね、やっぱり、どうしたの」

「眠れないの」

「ああ、分かった」

答えると田古は唄い出す、囁く声で。心臓の鼓動のように、星砂の耳に田古の唄う声が響いて来る、どきどき、どきどきっ……。

「You Are So Beautiful……」

いつしか星砂は眠りの中へ、幼い子供が夢見るように。だから田古が一晩中唄い続けていたことを、星砂は知らない。

八月七日、朝のJR新宿駅である。日曜日とあって、まだ人影は少ない。星砂と田古は山手線のホームに佇み、電車を待つ。山手線内回りで浜松町駅まで、そこから羽田空港へ向かう星砂。なぜ星砂が飛行機で帰ることにしたかという、東京からさっさと離れたかったから。という冷たいように聞こえるが、新幹線だと途中下車して引き返してしまいたくなる、そんな気がしたからである。

ホームに山手線の汽笛が響く。

「じゃ、もう行くね」

「なんだかね、やっぱり、体に気を付けて」

「おとうさんも」

黙って頷く田古。停車した山手線に重いトランクと共に乗り込む星砂、発車のベル。

「おとうさん」

「何だい」

にこっと微笑み、田古に星砂。

「なんだかね、やっぱり、夜を抱きしめて」

「あっ」

戸惑う田古。

「おとうさんの詩でしょ、あの詩」

えっと頭掻き掻き、田古は「なんだかね、やっぱり……」と頷いてみせる。

閉じるドア、

「おとうさーん……」

風のように去ってゆく星砂。

「せいさーっ」

直立不動で手を振り続ける田古。ぼくには見えるんだ、この夜の中で今たくさんの人が泣いていると、だからここは海なんだよやっぱり、たくさんの人の涙でできた、だからもうぼくは愛している、いくせんの人がゆきかうこの夜を、今はじっと抱きしめて、とわに続く潮騒のように抱きしめて、好きだなんて絶対口にしたりしないで、きみの涙をぬぐってあげたりはしないけれど、今泣いているきみがいるこの夜を、今きみの涙が生きているこの夜を感じながら、ぼくも生きていくよ……。

山手線が走り去った後、ホームには田古ひとり。そこへカタカタ、カタカタッとハイヒールの音を響かせ近づく人影。振り返ると、そこには雪。見詰め合うふたり、恐る恐る雪が笑い掛ける。すると田古、行き成り雪に駆け寄ったかと思うと、そのままがばーっと雪を抱き締めた。吃驚した雪、けれど田古のするがままに任せる、なぜなら田古は泣いていたから。

雪の肩に顔を埋めすすり泣く田古へと、雪が唄い掛ける。囁くように、子守唄のように。

「You Are So Beautiful……」

あなたは、世界で一番美しい……。

涙を拭いながら顔を上げる田古、その時人知れず流す涙、心の中でだけ流す涙が見えない自分に気付いてはっとする。なぜなら今、それ迄確かに見えていた、笑顔に隠された雪の涙が見えないから。その代わり雪の中に海の匂いがしている、少しハイライト臭いけれど。なんだかね、やっぱり、それにしても煙草臭い海なんて、ちょっとなあ……と、心の中でぺろっと舌を出す田古であった。

(了)

終わりに

終わりに

お読み頂き、ありがとうございます。

夜を抱きしめて

著 SKY BLUE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
